蔀屋北遺跡発掘調査概要・V

2006年3月

大阪府教育委員会

はじめに

四條畷市・寝屋川市一帯に広がる讃良郡条里遺跡は、古墳時代を中心に様々な性格の遺構が錯綜する巨大な遺跡です。この遺跡の南端部分に大阪府土木部により、なわて水環境保全センターの建設が計画されました。大阪府教育委員会では、これに伴い1999年度から予定地内の試掘調査を行った結果、この地には古墳時代中期の巨大な集落跡が展開していることや、さらに馬骨や馬歯、また馬具の出土によって、本遺跡が「日本書紀」などに記された河内の馬飼と関連した遺跡であることが想定されました。この点の重要性を考慮し、讃良郡条里遺跡内でも特に固有性の高いこの地を蔀屋北遺跡として周知し、2001年度から発掘調査を実施しております。

これまでの調査で、古墳時代中期・後期の集落の様相が徐々に明らかにされております。集落を構成する竪穴住居跡や掘立柱建物跡、井戸、溝などが多数見つかり、朝鮮半島から移入された土器をはじめ多くの遺物が出土しています。中でも土坑から見つかった埋葬された馬の全身骨格は、日本列島にもたらされて間もない時期の資料として注目されることになりました。さらには井戸枠に再利用された船材も出土し、河内湖を西に望む当地への人やモノの交流がより具体的に明らかになってきました。そして掘立柱建物跡は柱が良好に遺存しているものが多数あり、建物の構造を知る上で貴重な資料であります。これらの調査成果によって、蔀屋北遺跡が古墳時代中期から後期にかけて、朝鮮半島と深い関わりをもった巨大な集落遺跡であり、さらに河内の馬飼との関連性がより強く想定されております。これらの成果の一部については速報性を重視し、既に蔀屋北遺跡発掘調査概要として刊行されているところであります。

今回ここに報告いたしますのは、2003年度～2004年度にかけて発掘調査を実施いたしました調査区の概要報告書です。今回の調査では、蔀屋北遺跡集落の西端部を画する溝とその東側に展開する竪穴住居跡群、掘立柱建物跡群、井戸で構成された集落跡が検出されました。既往の調査区と比べて竪穴住居跡が密に存在しており、本調査によって集落の構成や時期的な変遷に新たな知見を加えることとなりました。この調査成果を地域の新たな文化財として、積極的に保護および活用をしていくことによって、地域の歴史が豊かに再構築されていくものと考えます。

調査に際しましては、地元の方々ならびに関係各位に多くのご協力をいただき、深く感謝いたしますと同時に、引き続き蔀屋北遺跡の発掘調査に皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成18年３月

大阪府教育委員会
文化財保護課長　丹上　務

例　　言

1．本書は大阪府土木部の依頼を受け、寝屋川流域下水事業なわて水環境保全センター建設に先立って、平成15年12月９日から平成16年12月17日までの期間に実施した四條畷市砂・蔀屋に所在する蔀屋北遺跡の発掘調査概要・Ｖである。

2．現地調査は文化財保護課調査第一グループ技師宮崎泰史が担当し、最終遺構面調査の一部は同グループ技師岩瀬　透、岡田　賢の補助を受けた。遺物整理作業は同課調査管理グループ技師林日佐子、藤田道子を担当者として実施した。

3．調査にあたっては、四條畷市砂・蔀屋自治会、寝屋川市堀溝自治会をはじめ、四條畷市教育委員会、寝屋川市教育委員会、大阪府東部流域下水道事務所など多くの方々のご協力を得た。記して謝意を表したい。

4．写真測量は、株式会社国土開発センターに委託した。なお写真フィルムについては同社で保管している。

5．本書に掲載した遺物写真撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。出土木製品の樹種同定は（株）パレオ・ラボに、保存処理は（株）吉田生物研究所に委託した。

6．本書で用いた座標値は、平面直角座標第Ⅵ系（日本測地系）で、付図には世界測地系座標値を併記している。

7．本調査の調査番号は03046（平成15年度）、04002（平成16年度）である。

8．本書の執筆・編集は宮崎の助言を得て岡田が行った。

9．本書は300部製作し、一部あたりの単価は1,113円である。

目　　次

本　文　目　次

はじめに
例言
第１章　調査の経過
　第１節　調査に至る経過 …… 1
　第２節　調査の方法 …… 2
第２章　調査成果の概要
　第１節　調査の概観 …… 5
　第２節　古墳時代中・後期の遺構と遺物 …… 9
第３章　まとめ …… 43

付　表　目　次

第１表　井戸474出土木製品一覧表

挿　図　目　次

第１図　蔀屋北遺跡の位置
第２図　調査区の位置と地区割
第３図　D-1・D-2区南壁土層断面図
第４図　D-1区東壁土層断面図
第５図　D-1区古墳時代中・後期遺構面主要遺構配置図
第６図　竪穴住居跡１・２平面図・断面図
第７図　竪穴住居跡３・４・５・８平面図・断面図
第８図　竪穴住居跡２・４・８カマド平面図・断面図
第９図　竪穴住居跡15・25平面図・断面図
第10図　竪穴住居跡18・19・20平面図
第11図　竪穴住居跡15・23・25カマド平面図・断面図
第12図　竪穴住居跡23平面図・断面図
第13図　掘立柱建物跡１・２平面図・断面図
第14図　掘立柱建物跡３・４平面図・断面図
第15図　掘立柱建物跡５・６平面図・断面図
第16図　溝900土層断面図
第17図　D-2区古墳時代中・後期遺構面主要遺構配置図
第18図　掘立柱建物跡９・10平面図・断面図
第19図　掘立柱建物跡11・15平面図・断面図
第20図　掘立柱建物跡12・13平面図・断面図
第21図　井戸474土層断面図
第22図　井戸474出土土器・１
第23図　井戸474出土土器・２
第24図　井戸474出土土器・３
第25図　井戸474出土木製品・１
第26図　井戸474出土木製品・２
第27図　井戸474出土木製品・３
第28図　井戸474出土木製品・４

図　版　目　次

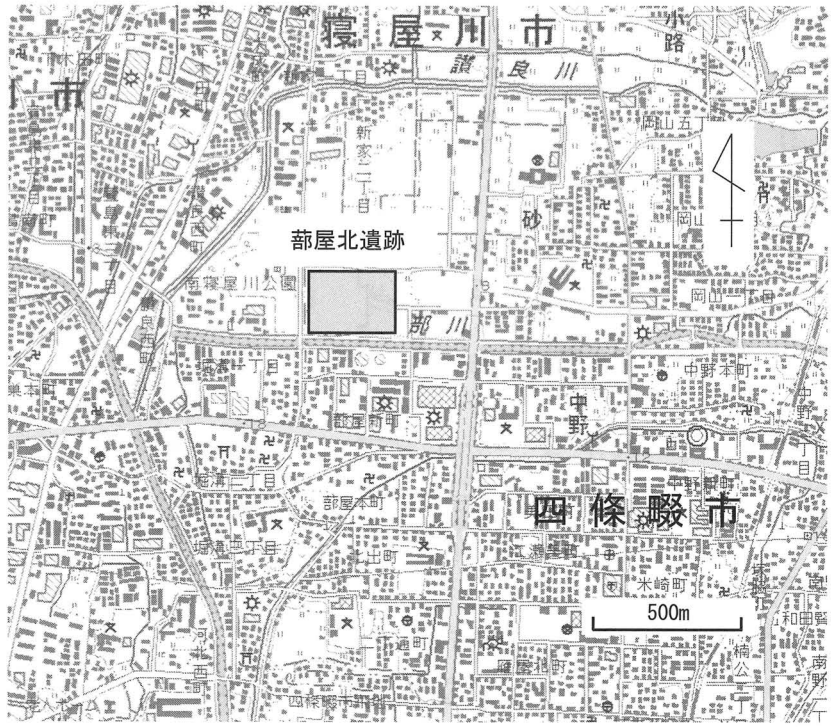
図版１　調査区全景
図版２　上段：調査区遠景（南より）
　　下段：調査区遠景（東より）
図版３　上段：D-1区古墳時代中･後期遺構面全景（西より）
　　下段：D-1区古墳時代中･後期遺構面全景（北より）
図版４　上段：D-1区古墳時代中･後期遺構面全景（南より）
　　下段：D-1区古墳時代中･後期遺構面全景（南より）
図版５　上段：竪穴住居跡１・２
　　下段：竪穴住居跡１カマド、竪穴住居跡２カマド
図版６　上段：竪穴住居跡３・４・５・８
　　下段：床面土器出土状況、竪穴住居跡４カマド、床面下土器出土状況、竪穴住居跡５カマド
図版７　上段：竪穴住居跡８
　　下段：竪穴住居跡８床面紡錘車出土状況、竪穴住居跡８カマド
図版８　上段：竪穴住居跡18・19・20・23
　　下段：竪穴住居跡18カマド、竪穴住居跡19カマド、竪穴住居跡20カマド、竪穴住居跡23カマド
図版９　上段：竪穴住居跡10・15・16・19（東より）
　　下段：竪穴住居跡15カマド、竪穴住居跡25カマド、竪穴住居跡16カマド
図版10　上段：竪穴住居跡25（北より）
　　下段：掘立柱建物跡３（北より）
図版11　上段：溝900　６層遺物出土状況（西より）
　　下段：溝900 馬骨出土状況、木製品出土状況
図版12　上段：D-2区古墳時代後期遺構面東半部全景（北より）
　　下段：D-2区古墳時代後期遺構面西半部全景（北より）
図版13　上段：D-2区古墳時代中・後期遺構面東半部全景
　　下段：D-2区古墳時代中・後期遺構面西半部全景
図版14　上段：掘立柱建物跡９
　　下段：掘立柱建物跡10
図版15　上段：掘立柱建物跡12・13
　　下段：竪穴住居跡26・27
図版16　掘立柱建物跡10礎板出土状況
図版17　井戸474遺物出土状況
図版18　D-1・D-2区各遺構・遺物出土状況等
図版19　井戸474出土土器・１
図版20　井戸474出土土器・２
図版21　井戸474出土土器・３
図版22　井戸474出土土器・４
図版23　井戸474出土土器・５
図版24　井戸474出土木製品・１
図版25　井戸474出土木製品・２

第１章　調査の経過

第１節　調査に至る経過

四條畷市蔀屋・砂に所在する蔀屋北遺跡（第１図）は、生駒産山地から西流する岡部川や枚方丘陵から西流してくる讃良川などの河川によって形成された沖積低地に立地し、弥生時代から近世にいたる複合遺跡である。本遺跡は、なわて水環境保全センターの建設に伴う試掘調査によって発見された。試掘調査時は讃良郡条里遺跡として遺構・遺物の確認を行ったが、設定トレンチのいずれの調査地点からも古墳時代中期の遺構と遺物が確認され、出土遺物からは当該時代の馬の生産や飼育に関わる遺跡であることが推測された。この点とその遺構面が讃良郡条里遺跡の範囲を南に越えて分布することなどを考慮し、新たに蔀屋北遺跡として周知し発掘調査を行うことになった。こうした経緯は既刊の調査成果報告に詳しい[1)]。

なわて水環境センター建設予定地の発掘調査は、水処理施設（浄化槽）から開始した。調査面積は約17,200㎡で、南よりＡ・Ｂ・Ｃと３分割して行われ、古墳時代中期から近世までの十数面の遺構面を調査している。中でも古墳時代中期から後期の遺構面は、多数の遺構と遺物が出土し本遺跡を特徴付ける成果を得ている。各調査区は浅い谷や溝によっていくつかの遺構集中部分に区分されるが、それぞれの遺構集中部分で竪穴住居跡や掘立柱建物跡、井戸、溝が多数検出され、古墳時代中期から後期の集落跡であることが明らかになった。中でもＡ調査区では、馬を埋納した土坑が発見され、馬の全身骨格が良好に遺存していた。日本列島に移入された馬の体躯の復元や系統の推定にとって重要な資料である。また各調査区からは準構造船などの船材を枠に転用し



第１図　蔀屋北遺跡の位置

た井戸が複数見つかり、西に望む河内湖やそこへ流入する河川での交通手段を復元する具体的な資料を提供することとなった。また多数の韓式系土器や陶質土器、U字形土製品などの遺物からは、朝鮮半島からの渡来集団が推測され、溝や浅谷から検出される馬骨や馬の埋納土坑などと合わせ、本遺跡が河内の馬飼との関連を強く想定させる調査成果を得ている。このうちA調査区とC調査区については調査成果の概要が刊行されている[2)]。

本調査区は水処理施設のうちポンプ棟と沈砂池棟の建設地にあたり、C調査区の西、また発進立坑部での調査地点（試掘調査H地区）の南東に位置し（第2図）、これをD地区として調査を行った。調査は2003年12月に開始し2004年12月に終了した。本書はD調査区の調査成果概要である。

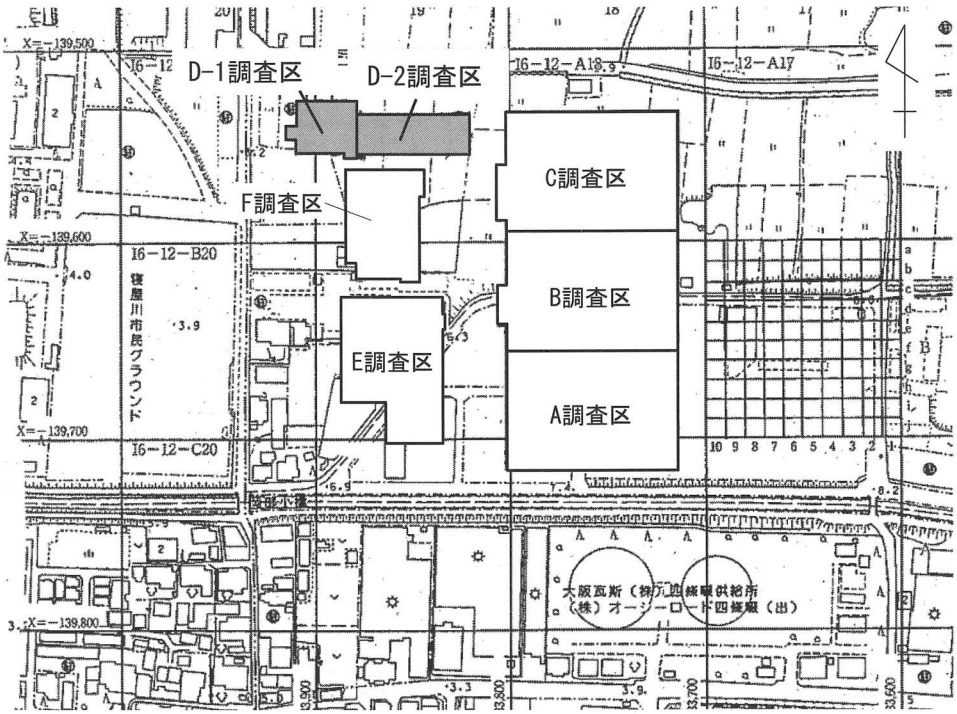
1）大阪府教育委員会2002『讃良郡条里遺跡（蔀屋北遺跡）発掘調査概要・Ⅳ』

2）大阪府教育委員会2004『蔀屋北遺跡発掘調査概要・Ⅰ』

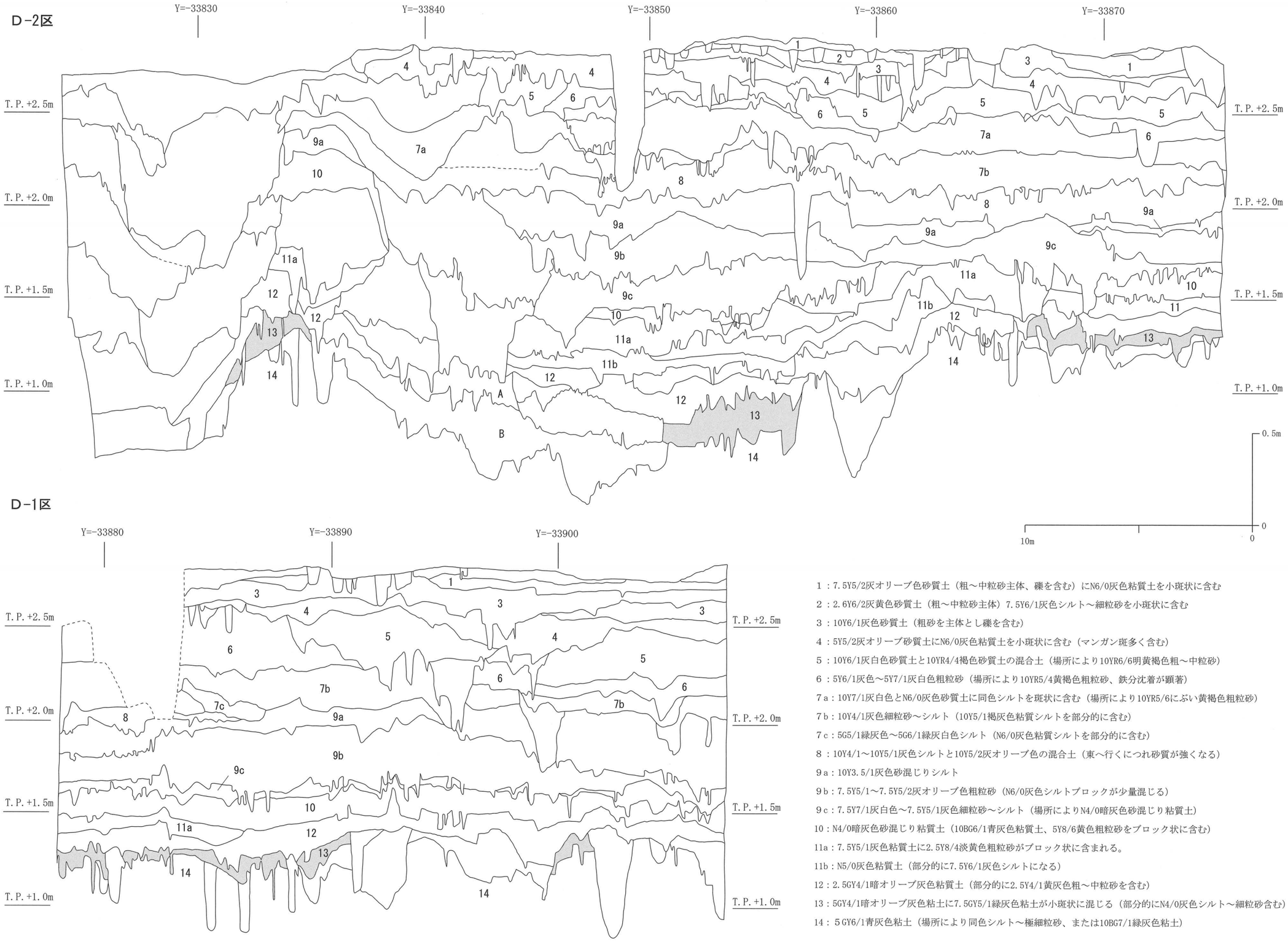
大阪府教育委員会2005『蔀屋北遺跡発掘調査概要・Ⅱ』

第2節　調査の方法

地区割りはA～C区と同様に、国土座標（第Ⅵ座標系）を基準としている。遺構の登録や遺物の取り上げ等はこれを基に設定された10mメッシュで行っている（第2図）。D調査区は西のポンプ棟建設地と東の沈砂池棟建設地、そして今後南接地点で建設が予定されている管理棟とつながる管路の取次ぎ部分をそれぞれD-1、2、3区として調査を行った。大区画ではD-1区の西端部がI6-12-A20であるが、その他はすべてI6-12-A19である。なお調査面積は約2,010㎡である。



第2図　調査区の位置と地区割



1：7.5Y5/2灰オリーブ色砂質土（粗～中粒砂主体、礫を含む）にN6/0灰色粘質土を小斑状に含む
2：2.6Y6/2灰黄色砂質土（粗～中粒砂主体）7.5Y6/1灰色シルト～細粒砂を小斑状に含む
3：10Y6/1灰色砂質土（粗砂を主体とし礫を含む）
4：5Y5/2灰オリーブ砂質土にN6/0灰色粘質土を小斑状に含む（マンガン斑多く含む）
5：10Y6/1灰白色砂質土と10YR4/4褐色砂質土の混合土（場所により10YR6/6明黄褐色粗～中粒砂）
6：5Y6/1灰色～5Y7/1灰白色粗粒砂（場所により10YR5/4黄褐色粗粒砂、鉄分沈着が顕著）
7a：10Y7/1灰白色とN6/0灰色砂質土に同色シルトを斑状に含む（場所により10YR5/6にぶい黄褐色粗粒砂）
7b：10Y4/1灰色細粒砂～シルト（10Y5/1褐灰色粘質シルトを部分的に含む）
7c：5G5/1緑灰色～5G6/1緑灰白色シルト（N6/0灰色粘質シルトを部分的に含む）
8：10Y4/1～10Y5/1灰色シルトと10Y5/2灰オリーブ色の混合土（東へ行くにつれ砂質が強くなる）
9a：10Y3.5/1灰色砂混じりシルト
9b：7.5Y5/1～7.5Y5/2灰オリーブ色粗粒砂（N6/0灰色シルトブロックが少量混じる）
9c：7.5Y7/1灰白色～7.5Y5/1灰色細粒砂～シルト（場所によりN4/0暗灰色砂混じり粘質土）
10：N4/0暗灰色砂混じり粘質土（10BG6/1青灰色粘質土、5Y8/6黄色粗粒砂をブロック状に含む）
11a：7.5Y5/1灰色粘質土に2.5Y8/4淡黄色粗粒砂がブロック状に含まれる。
11b：N5/0灰色粘質土（部分的に7.5Y6/1灰色シルトになる）
12：2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘質土（部分的に2.5Y4/1黄灰色粗～中粒砂を含む）
13：5GY4/1暗オリーブ灰色粘土に7.5GY5/1緑灰色粘土が小斑状に混じる（部分的にN4/0灰色シルト～細粒砂含む）
14：5GY6/1青灰色粘土（場所により同色シルト～極細粒砂、または10BG7/1緑灰色粘土）

第３図　D-1区・D-2区南壁土層断面図

第２章　調査成果の概要

第１節　調査の概観

基本層序

調査は現代の表土を機械で掘削し、T.P.+2.8mから人力掘削を開始した。基本層序としてD-1区およびD-2区南壁、およびD-1区東壁の土層を示し、層序とともに検出遺構面の概要について述べる（第３・４図）。

第１層は灰オリーブ色粗～中粒砂である。

第２層は灰黄色粗～中粒砂。上面で畝溝となる南北方向の溝を多数検出している（第２遺構面）。

第３層は砂礫を含む灰色粗～中粒砂。

第４層は灰～灰オリーブ色の粗～中粒砂で、上面で畝溝を検出している（第４遺構面）。

第５層は灰白色粗～中粒砂と灰黄褐色粘質土で鉄分の沈着が顕著にみられる。上面で溝や土坑、ピット、井戸、畦畔を検出している。中世（12世紀末～13世紀）の遺構面である（第５遺構面）。

第６層は灰～灰白色粗～細粒砂で、上面で中世（12世紀末～13世紀）のピット、井戸、畝溝などを検出している（第６遺構面）。

第７層は大きく7a～7c層に分けられ、それぞれの上面で遺構面を検出している。第7a層は灰～灰白色の粗～中粒砂で、上面でピット、畝溝等を検出しており中世の遺構面である（第7a遺構面）。第7b層は灰～灰オリーブ色細～中粒砂で、部分的に灰色粘質シルトを含む。上面で畦畔や溝を検出している（第7b遺構面）。第7c層は緑灰白～緑灰色シルトで灰色粘質シルトを含む。上面で畦畔を検出している。

第８層は灰色シルトとオリーブ灰色粗～中粒砂の混合土で、上面で畦畔や流路を検出している。平安時代の遺構面である。第８層はD-2区では確認できたが、D-1区では顕著ではなかった。

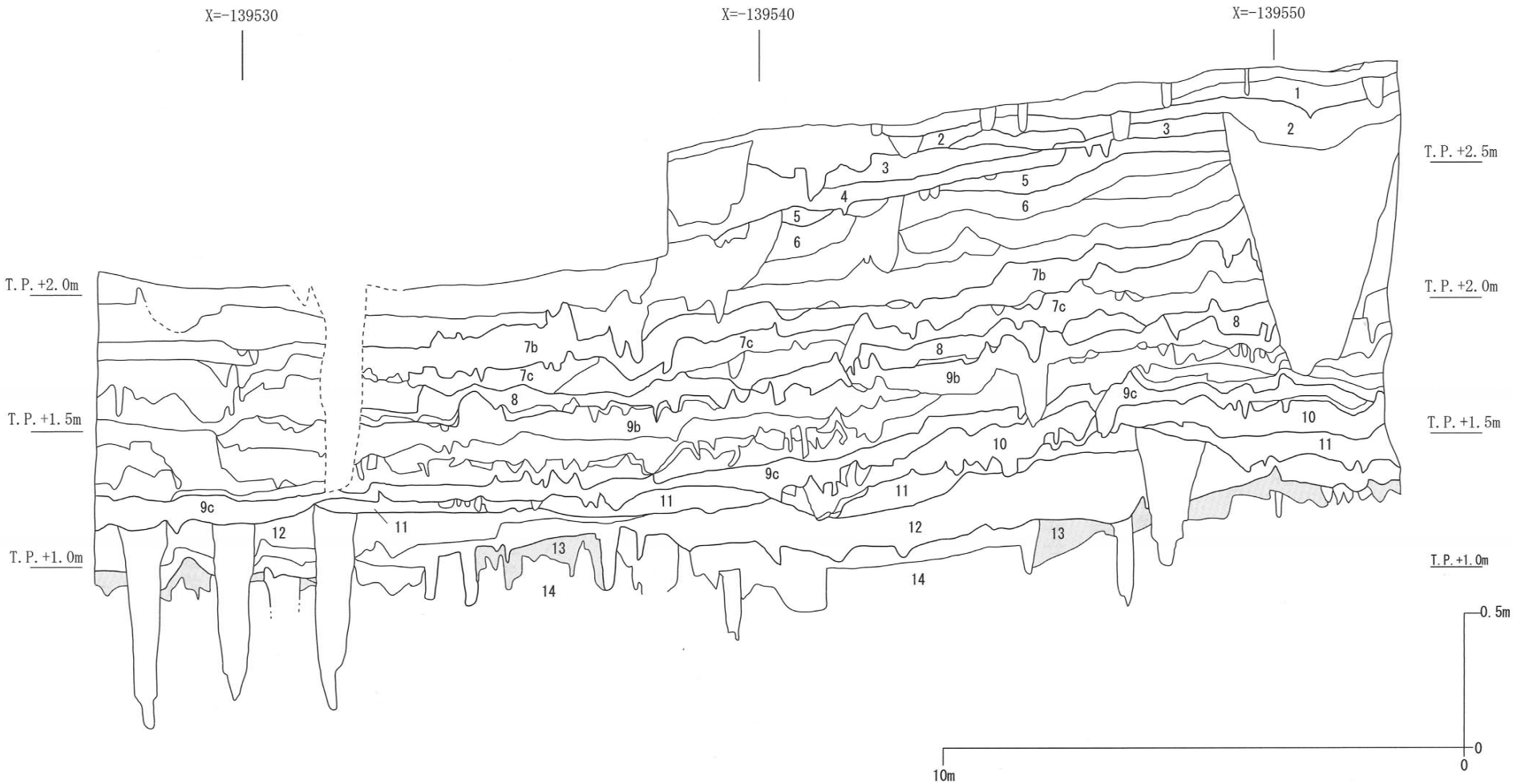
第９層は大きく9a～9c層に分けられる。第9a層は灰色砂混じりシルト。第9b層は灰オリーブ～灰白色粗粒砂。第9c層は灰白色細粒砂～灰色シルトで、上面で畦畔を検出している（第9c面）。

第10層は暗灰色粘質砂混じりシルトである。D-1区では普遍的に確認できるが、D-1区では東にいくに従い層厚を減じている。上面で畦畔を検出している（第10遺構面）。

第11層は灰色粘質土に灰白色～浅黄色粗粒砂を含む。D-2区中央部では厚く堆積しているが、D-1区では東半部にみられるのみである。上面で畦畔を検出している（第11遺構面）。

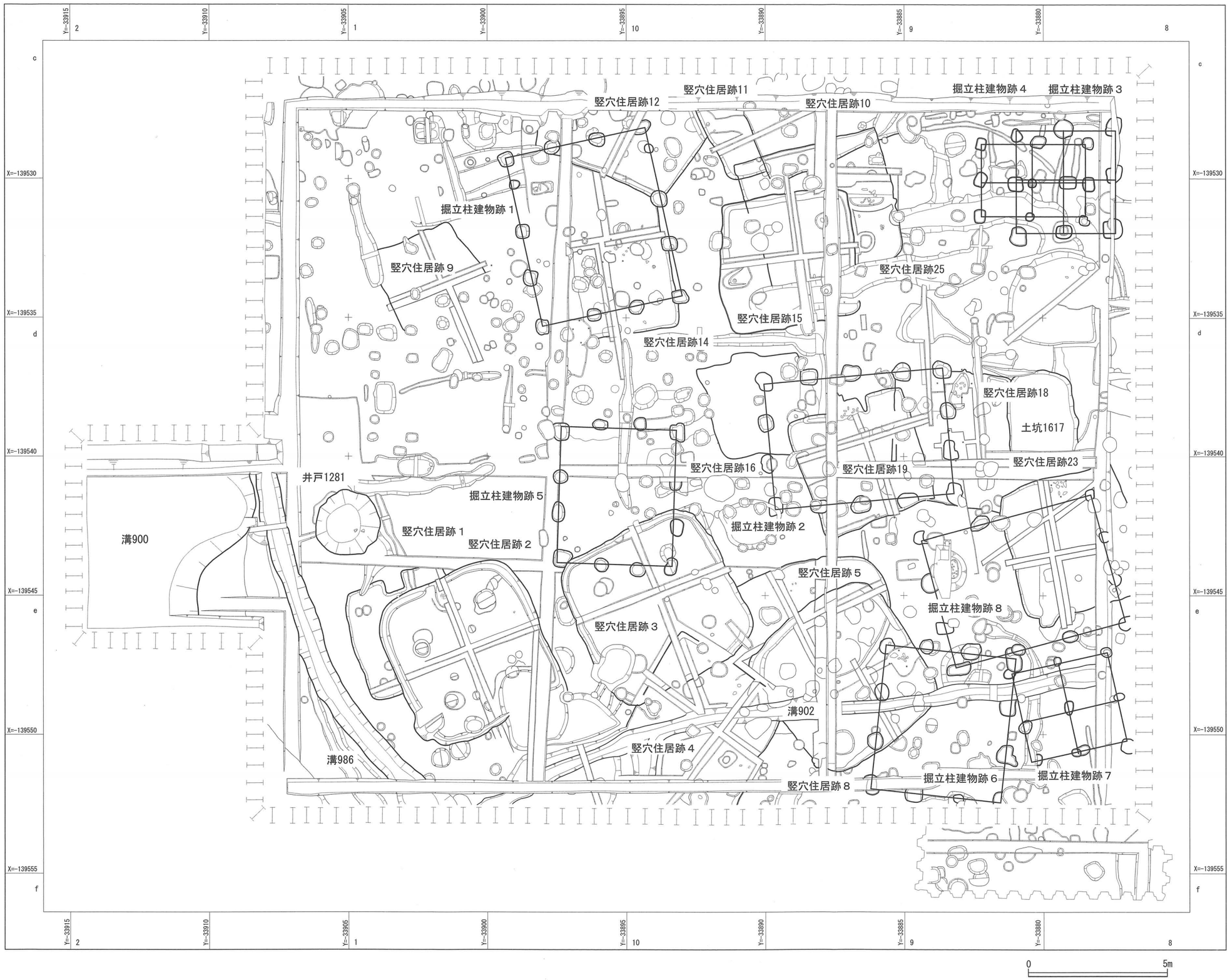
第12層は暗オリーブ灰色粘質土で部分的に灰色粗粒砂層を挟む。上面で畦畔を検出している（第12遺構面）。

第13層は暗オリーブ灰色粘土に第14層の緑灰色粘土や灰色粘土のブロックが混じる土層で、６世紀の遺物包含層である。第13層はD-1区では層圧が薄く部分的な堆積であり、第12層を除去すると第14層の青灰色粘土～シルトが見える所もあった。一方D-2区では東半部ではさらに３層に



第４図 D-1区東壁土層断面図

※土色は第３図を参照



第５図　D-1区古墳時代中・後期遺構面主要遺構配置図

分層できる程に堆積していたが、西半部はD-1区と同様の状況であった。本層上面から掘り込んでいる古墳時代後期の遺構が検出されている（第13遺構面）。

第14層は青灰色粘土～シルトで、D-2区の中央部でT.P.+0.5mまで落ち込み、D-2区東端部ではT.P.+1.3mまで高くなる。またD-1区ではT.P.+1.3m付近で検出されるが、両地区とも北へ向かって緩やかに低くなっていく。古墳時代中・後期遺構面のベースとなる（第14遺構面）。

なお、本調査区では古墳時代中期の遺構面であるT.P.＋1.0m前後までを調査の対象深度としていたが、この遺構面下の遺構や遺物の有無と層序を確認するため、D-2区では東西方向に、D-1区では南北方向と東西方向に幅３ｍのトレンチを設定しT.P.±０ｍまで調査を行った。その結果、D-2区の東半部のT.P.+0.5m前後で弥生時代中期前葉の土器を包含する、黒褐色砂混じり粘土層が確認され、その下位の灰白色シルト～砂層まで掘り込まれる複数のピットや溝の断面を確認している。黒褐色砂混じり粘土層中で、当該期の遺構面が存在する可能性が高い。当遺構面は工法や調査上の安全を考慮し一度埋め戻した後、しかるべき工程を経た上で平成17年度に発掘調査を行う予定である。

第２節　古墳時代中期・後期の遺構と遺物

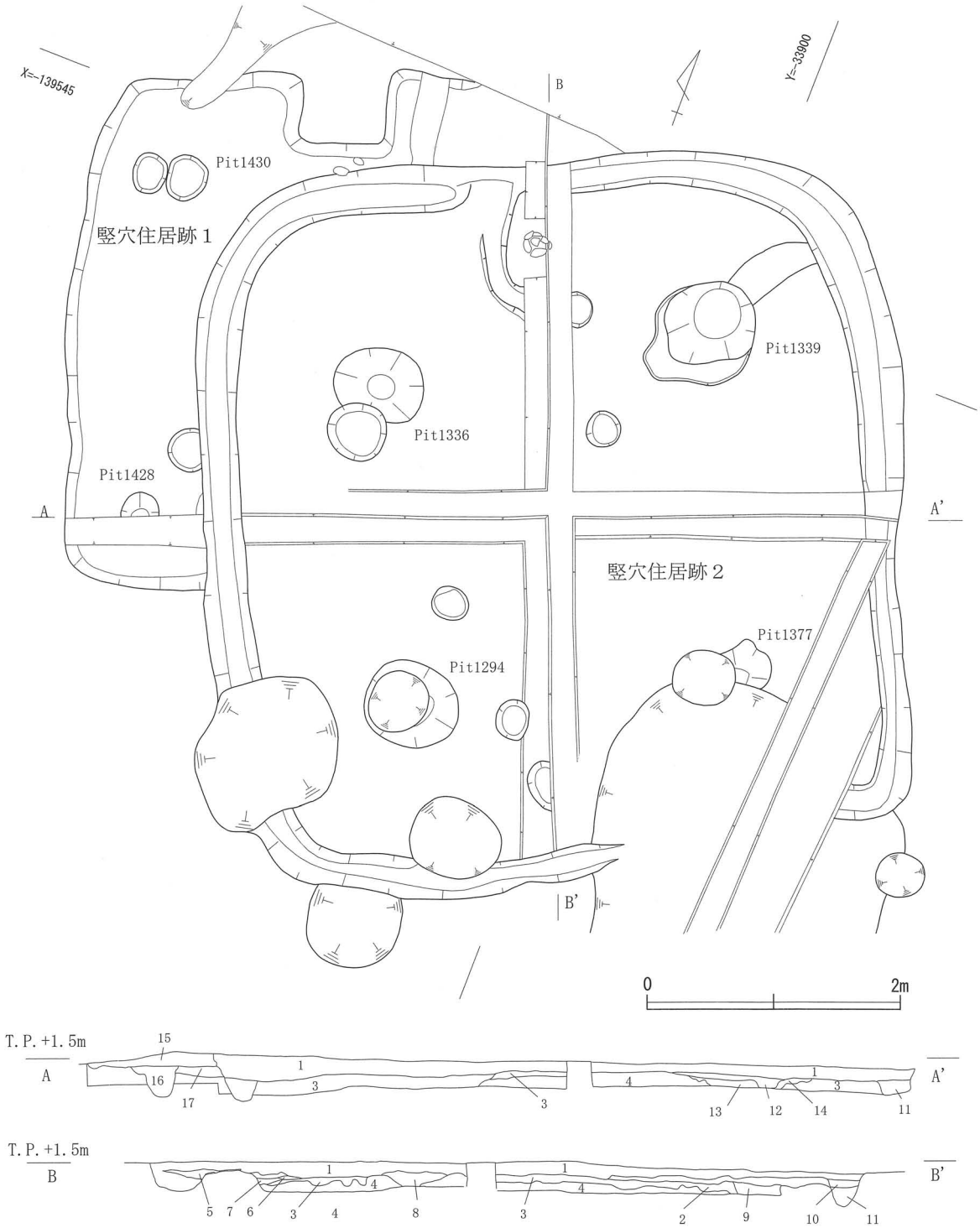
Ｄ－１区の遺構と遺物（第５図）

６世紀の遺物包含層である第13層は層厚が薄くまた部分的に存在する状況であった。第13層中で検出された遺構は古墳時代後期のものであるが、多くは第14層の青灰色粘土～シルト層上面で、古墳時代中期の遺構と共に検出された。遺構数は総数で千を超え、調査区一面がピットや溝などの遺構ばかりであった。ここでは主な遺構の概要について述べるが、遺構埋土の状況や切り合い関係、そして遺物の検討が現段階では十分でないため、今後それらの検討を経た上で、新たな建物の確定や遺構の詳細な時期決定などは本報告に委ねることにしたい。

竪穴住居跡

竪穴住居跡は５世紀後半から６世紀代にかけてのものを調査段階で25棟分検出している。D-1区の西端付近と中央部西寄り以外の範囲に重複しながら密に配置している様相がみられる。主軸は北西から北北西と、その直角の北東から北北東にとるものが多く、遺構面全体をみると後述の溝900や溝986に平行しているようである。また多くの住居跡には北壁か北東壁にカマドが設置されていた。ここではそれらのうち主なものについて略述する。

竪穴住居跡１（第６図、図版５）　ｅ1区で検出された竪穴住居跡で、竪穴住居跡２によって切られている。検出レベルはT.P.＋1.5mで、床面レベルはT.P.＋1.4m程度である。規模は約4.0m×4.0mで平面形は隅丸の正方形である。北北西に主軸をとり北壁の中央部にカマドを配する。住居内にはカマドの他にピットが数個検出されているが、主柱穴は明確ではなかった。Pit1430



竪穴住居跡２

１：7.5Y4/2灰オリーブ色粘土
２：10GY7/1明緑灰色粘土　10Y3/1オリーブ黒色粘土ブロック状に混じる
３：10Y3/1オリーブ黒色粘土に10GY7/1明緑灰色粘土ブロック状に混じる
４：10GY7/1明緑灰粘土（第14層）
５：１に7.5YR3/3褐色粘土のブロック混じる
６：１に炭化物混じる
７：１と7.5YR3/3褐色粘土の混合土
８：１に10YR7/1明緑灰色粘土が斑状に混じる（６～８はカマド構成層）
９：１に10YR7/1明緑灰色粘土が斑状に少量混じる
10：１に10YR7/1明緑灰色粘土がブロック状に混じる
11：N3　暗灰色粘土に10GY7/1明緑灰色粘土が斑状に混じる（10・11は壁溝埋土）
12：10YR7/1　明緑灰色粘土に１が斑状に混じる
13：１に10YR7/1明緑灰色粘土が小ブロック状に混じる
14：10YR4/2灰黄褐色粘土（炭化物混じる）

竪穴住居跡１

15：N3暗灰色粘土に10GY7/1明緑灰色粘土が斑状に混じる
16：N3暗灰色粘土に10GY7/1明緑灰色粘土が小斑状に混じる
17：10GY7/1明緑灰色粘土にN3暗灰色粘土がブロック状に少量混じる

第６図　竪穴住居跡１・２平面図・断面図

やPit1428がその可能性をもつ。カマドは上部を削平され、また焚口は竪穴住居跡２によって削平されているが、内壁の一部と火床は残存し、土師器甕の破片を検出した。カマド部分の北壁はカマドに向けて幅70cm、長さ50cmの凹字状に掘られ煙道の距離を短くしているようである。

竪穴住居跡２（第６図、図版５）　ｅ１～ｅ10区で検出された竪穴住居跡である。検出レベルはT.P.＋1.5mで第13層中で検出された。床面のレベルはT.P.＋1.4mである。平面形は5.6m×5.6mの隅丸正方形で北北西に主軸をとる。住居内には北壁中央部にカマドを配する。ピットのうち主柱穴になるのはPit1336、Pit1339、Pit1377、Pit1294である。また床面周囲には深さ約0.2mの壁溝をめぐらす。カマドは天井部が削平されているが、全体的に残りがよく、側壁はU字形になり、北壁から60cmの所に土師器甕を伏せて支脚に転用していた。またその周りにはカマド内部の堆積土上に土師器甕が検出された。住居跡床面の延長になるカマドの火床には炭化物層が明確に検出された。

竪穴住居跡３（第７図、図版６）　ｅ10区で検出された竪穴住居跡である。竪穴住居跡２に平行するように位置している。竪穴住居跡５を切り、竪穴住居跡４に切られる。検出レベルはT.P.＋1.45mで、床面のレベルはT.P.＋1.25mである。平面形は長軸5.7m、短軸5.5mで主軸は北東である。住居内の東壁やや北よりにカマドを配する。ピットのうち主柱穴になるのはPit1409、Pit1612、Pit1615、Pit1658である。また床面周囲には北側で深さ0.1m、南側で深さ0.2mの壁溝をめぐらす。カマドは削平されており炭化物層と焼土層が部分的に残存する。

竪穴住居跡４（第７図、図版６）　ｅ10～ｆ10区で検出された竪穴住居跡である。竪穴住居跡３および竪穴住居跡８などを切っている。また溝902によって切られている。検出レベルはT.P.＋1.35m、床面のレベルはT.P.＋1.25mである。平面形は長軸5.0m、短軸4.8mの隅丸方形で、主軸は北北東にとる。住居内の東北壁中央部にカマドを配する。ピットのうち主柱穴になるものは明確でない。床面周囲には浅い壁溝をめぐらす。カマドは側壁がU字形に残存し、内部には10cmほどの炭化物層がみられる。また住居北東壁から50cmのところに土師器甕を伏せて支脚に転用している。また北東部の床面で土師器甕などを検出している。また床面より下位の、住居の掘り方の埋土から礎や砥石などの遺物が検出されている。

竪穴住居跡５（第７図、図版６）　ｅ9～10区で検出された竪穴住居跡である。竪穴住居跡３、４、８に切られている。検出レベルはT.P.＋1.4m、床面のレベルはT.P.＋1.25mである。平面形は切り合い関係によって不明確であるが、長軸で５m以上はあると考えられる。カマドは住居内の北壁よりに配されているが、削平により壁が僅かに残存する程度である。炭化物層が、カマドの西側にも広く分布している。

竪穴住居跡８（第７図、図版７）　ｅ～ｆ9区で検出された竪穴住居跡である。竪穴住居跡５を切り、竪穴住居跡４に切られる。検出レベルはT.P.＋1.3m、床面のレベルはT.P.＋1.2mである。平面形は長軸5.7m、短軸5.4mの隅丸方形で主軸は竪穴住居跡４と同様に北北東にとる。ピットのうち主柱穴になるものは、Pit1577、Pit1669、Pit1970、Pit1967である。住居内の北東壁中央にカ

マドを配する。カマドは天井部分が削平されているが全体的に残りがよく、焚口の幅は約60cmである。北東壁から55cmの所に土師器甕を伏せて支脚に転用していた。カマド内は焼土と炭化物層が堆積し、さらに炭化物層は焚口をこえて住居内の床面にも広がっていた。注目すべきは焚口の両側壁が床面に接する部分には炭化物層がみられず（第８図、図版７）、何かが差し込んであったようである。本遺跡でも多量に出土しているU字型土製品が、造りつけカマドの焚口の縁に設置される可能性を指摘できるかもしれない。またカマドのすぐ北側の壁よりには須恵器坏身が、南側の壁よりには土師器甕を検出している。床面からは紡錘車を検出している。

竪穴住居跡９　ｄ1区で検出された竪穴住居跡である。北西部を溝によって切られている。検出レベルはT.P.＋1.5m、床面のレベルはT.P.＋1.4mである。平面形は約３ｍの正方形と考えられる。主柱穴、カマドともに検出されていない。

竪穴住居跡10　ｃ9～10区で検出された竪穴住居跡である。西に位置する竪穴住居跡11を切る。検出レベルはT.P.＋1.3m、床面のレベルはT.P.＋1.2mである。平面形は隅丸の方形であると考えられるが、住居の３分の２は調査区外であるため規模は不明である。住居内にはピットが複数あるが、主柱穴になるものは不明である。カマドは検出されていない。

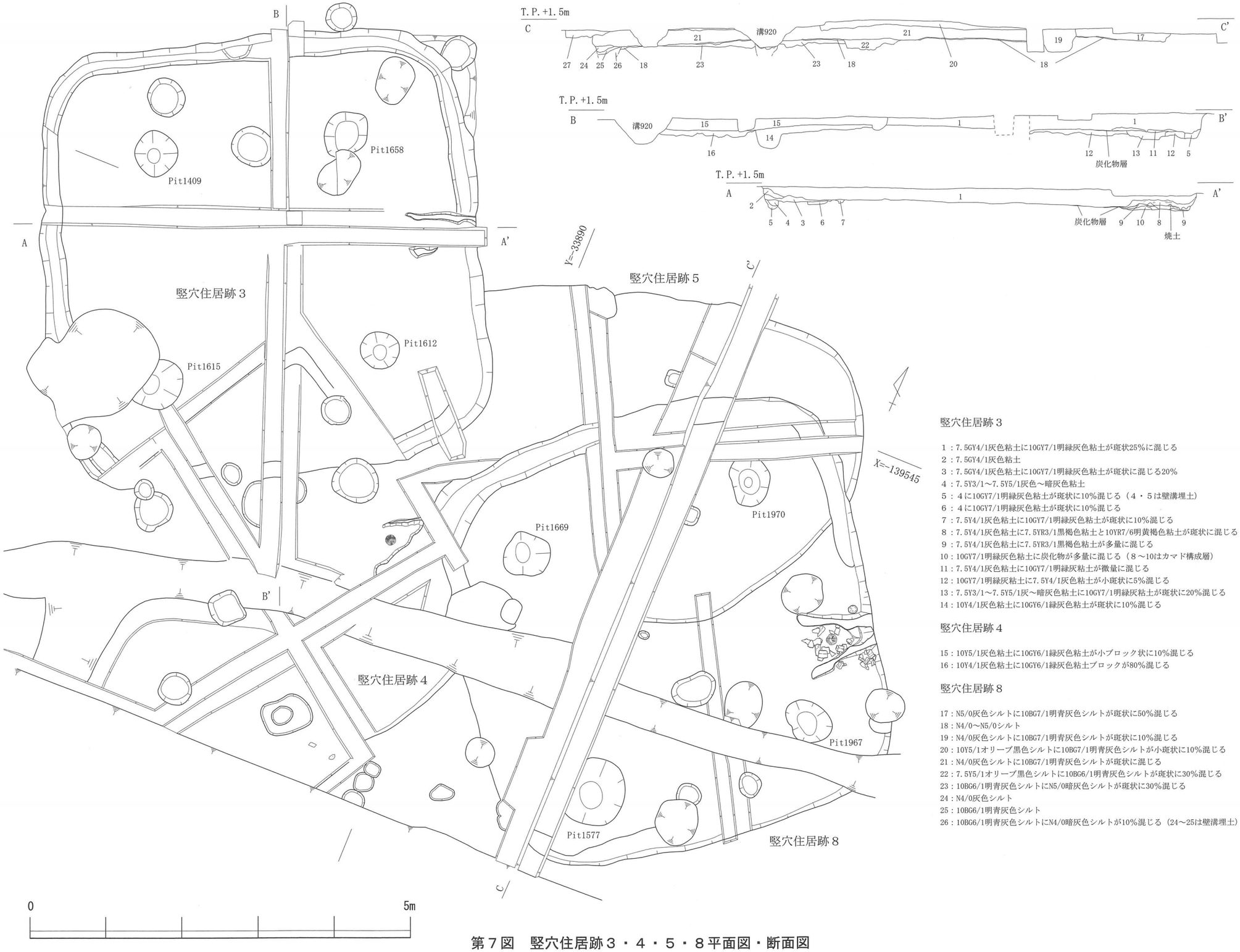
竪穴住居跡11　ｃ10区で検出された竪穴住居跡である。竪穴住居跡10に切られる。検出レベルはT.P.＋1.3mで床面のレベルはT.P.＋1.2mである。住居の大部分は調査区外であり規模等は不明である。カマドは検出されていない。

竪穴住居跡12　ｃ～ｄ10区で検出された竪穴住居跡である。竪穴住居跡11に切られている。また掘立柱建物跡１の柱穴Pit1006に切られている。主柱穴は不明確である。またカマドは検出されていない。住居の約２分の１は調査区外であるが、平面形は約５ｍ四方の隅丸方形であろう。

竪穴住居跡14　ｄ10区で検出された竪穴住居跡である。住居西側の掘り方が不明確であるが、平面形は約５ｍ四方の隅丸方形と考えられる。主柱穴は不明である。本住居跡に伴うカマドは検出されてないが、付近にはカマドが３基検出されているため、複数の住居跡が存在した可能性がある。

竪穴住居跡15（第９図、図版９）　ｄ9～10区で検出された竪穴住居跡である。竪穴住居跡25を切っている。検出レベルはT.P.＋1.4m、床面のレベルはT.P.＋1.3～1.2mで、北から南にむかって緩く傾斜する。主軸を西南西にとり平面形は一辺4.8m四方の隅丸方形である。住居内のピットのうちPit1414、Pit1309、Pit1310、Pit1090が主柱穴である。また南西壁の中央やや南よりからカマドが検出された。天井部分が削平されていたが残りはよく、側壁はU字状になり焚口で内側に折れている。主軸に対して焚口がやや北に傾いている。南西壁から55cmの所に土師器甕を伏せて支脚として転用されていた。カマド内部は焼土と炭化物層が堆積していた。

竪穴住居跡16　ｄ9～10区で検出された竪穴住居跡である。竪穴住居跡19に切られている。検出レベルはT.P.＋1.3mで床面のレベルはT.P.＋1.25mである。主軸は東北東にとり、平面形は一辺が3.5m～４ｍの不整四角形である。主柱穴は不明である。住居の東壁のやや南よりにカマドが配



竪穴住居跡３

１：7.5GY4/1灰色粘土に10GY7/1明緑灰色粘土が斑状25%に混じる
２：7.5GY4/1灰色粘土
３：7.5GY4/1灰色粘土に10GY7/1明緑灰色粘土が斑状に混じる20%
４：7.5Y3/1～7.5Y5/1灰色～暗灰色粘土
５：４に10GY7/1明緑灰色粘土が斑状に10%混じる（４・５は壁溝埋土）
６：４に10GY7/1明緑灰色粘土が斑状に10%混じる
７：7.5Y4/1灰色粘土に10GY7/1明緑灰色粘土が斑状に10%混じる
８：7.5Y4/1灰色粘土に7.5YR3/1黒褐色粘土と10YR7/6明黄褐色粘土が斑状に混じる
９：7.5Y4/1灰色粘土に7.5YR3/1黒褐色粘土が多量に混じる
10：10GY7/1明緑灰色粘土に炭化物が多量に混じる（８～10はカマド構成層）
11：7.5Y4/1灰色粘土に10GY7/1明緑灰粘土が微量に混じる
12：10GY7/1明緑灰粘土に7.5Y4/1灰色粘土が小斑状に5%混じる
13：7.5Y3/1～7.5Y5/1灰～暗灰色粘土に10GY7/1明緑灰粘土が斑状に20%混じる
14：10Y4/1灰色粘土に10GY6/1緑灰色粘土が斑状に10%混じる

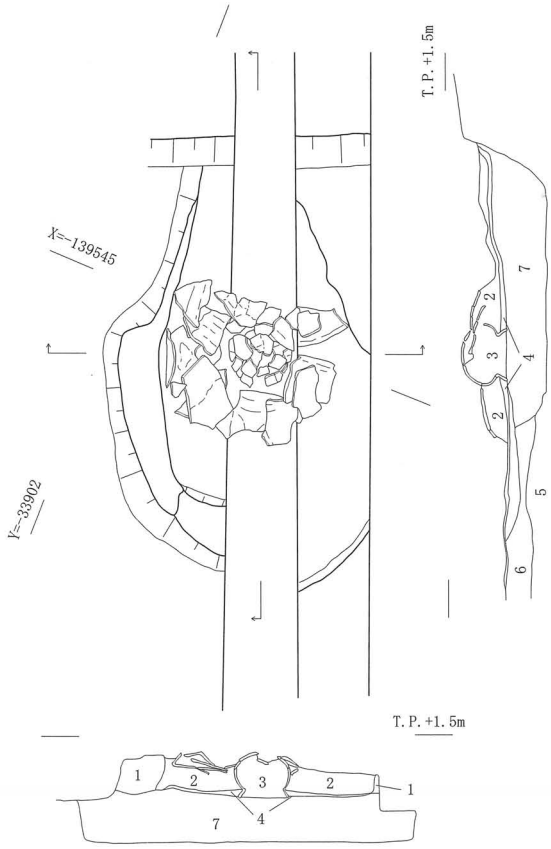
竪穴住居跡４

15：10Y5/1灰色粘土に10GY6/1緑灰色粘土が小ブロック状に10%混じる
16：10Y4/1灰色粘土に10GY6/1緑灰色粘土ブロックが80%混じる

竪穴住居跡８

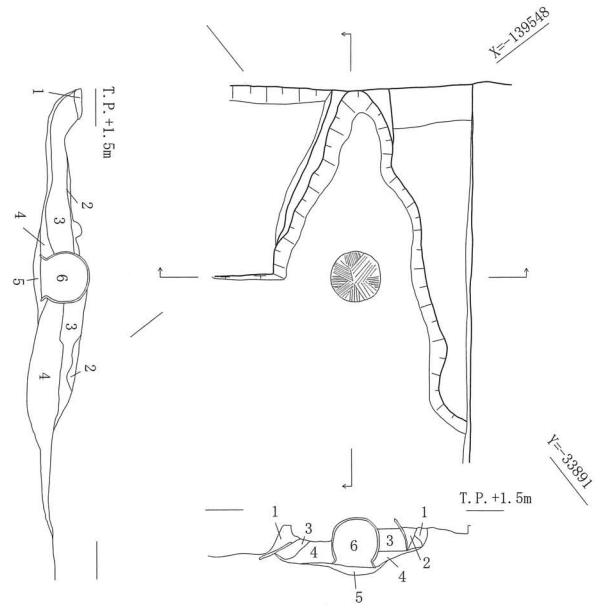
17：N5/0灰色シルトに10BG7/1明青灰色シルトが斑状に50%混じる
18：N4/0～N5/0シルト
19：N4/0灰色シルトに10BG7/1明青灰色シルトが斑状に10%混じる
20：10Y5/1オリーブ黒色シルトに10BG7/1明青灰色シルトが小斑状に10%混じる
21：N4/0灰色シルトに10BG7/1明青灰色シルトが斑状に混じる
22：7.5Y5/1オリーブ黒色シルトに10BG6/1明青灰色シルトが斑状に30%混じる
23：10BG6/1明青灰色シルトにN5/0暗灰色シルトが斑状に30%混じる
24：N4/0灰色シルト
25：10BG6/1明青灰色シルト
26：10BG6/1明青灰色シルトにN4/0暗灰色シルトが10%混じる（24～25は壁溝埋土）

第７図　竪穴住居跡３・４・５・８平面図・断面図



1：5YR4/2灰褐色～7.5YR4/1褐灰色粘土（カマドの壁）
2：7.5Y4/2灰オリーブ色粘土に褐色粘土ブロック混じる
3：7.5YR4/2褐灰色粘質土
4：7.5Y4/2 灰オリーブ色粘土　炭化物多量に混じる
5：7.5Y4/2灰オリーブ色粘土に褐色粘土ブロック混じる
6：10Y3/1オリーブ黒色粘土に10GY7/1明緑灰色粘土ブロック混じる
7：2.5Y4/1黄灰色粘土に2.5GY5/1オリーブ灰色粘土ブロック混じる

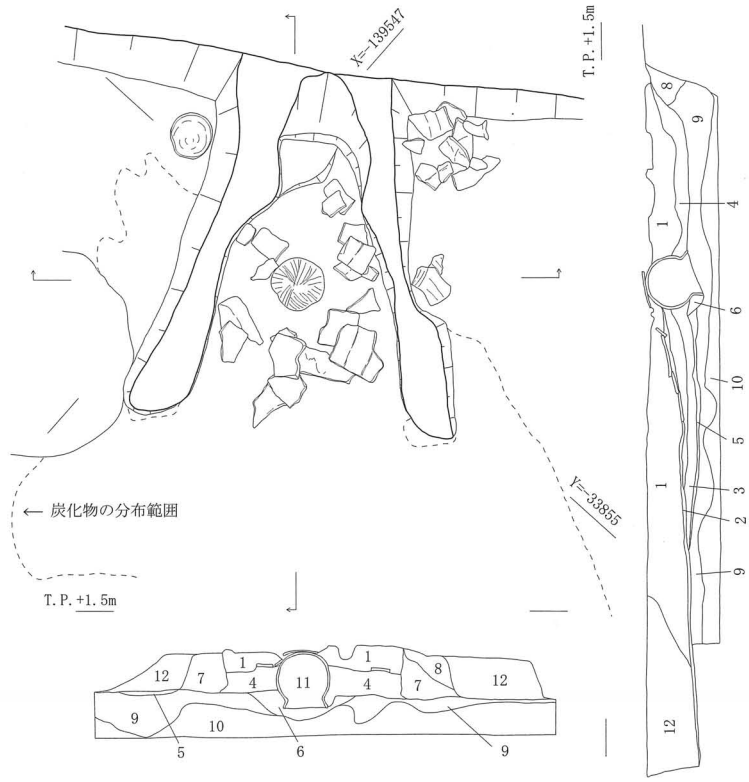
竪穴住居跡２カマド



1：7.5Y8/4褐灰色粘質土（カマドの壁）
2：10YR5/6黄褐色粘質土（崩落したカマドの焼壁土）
3：2.5GY3/1暗オリーブ灰色粘質土　炭化物多く含む
4：N1・5/0黒色炭化物層
5：7.5Y4/1褐灰色粘質土
6：7.5YR3/1黒褐色粘質土

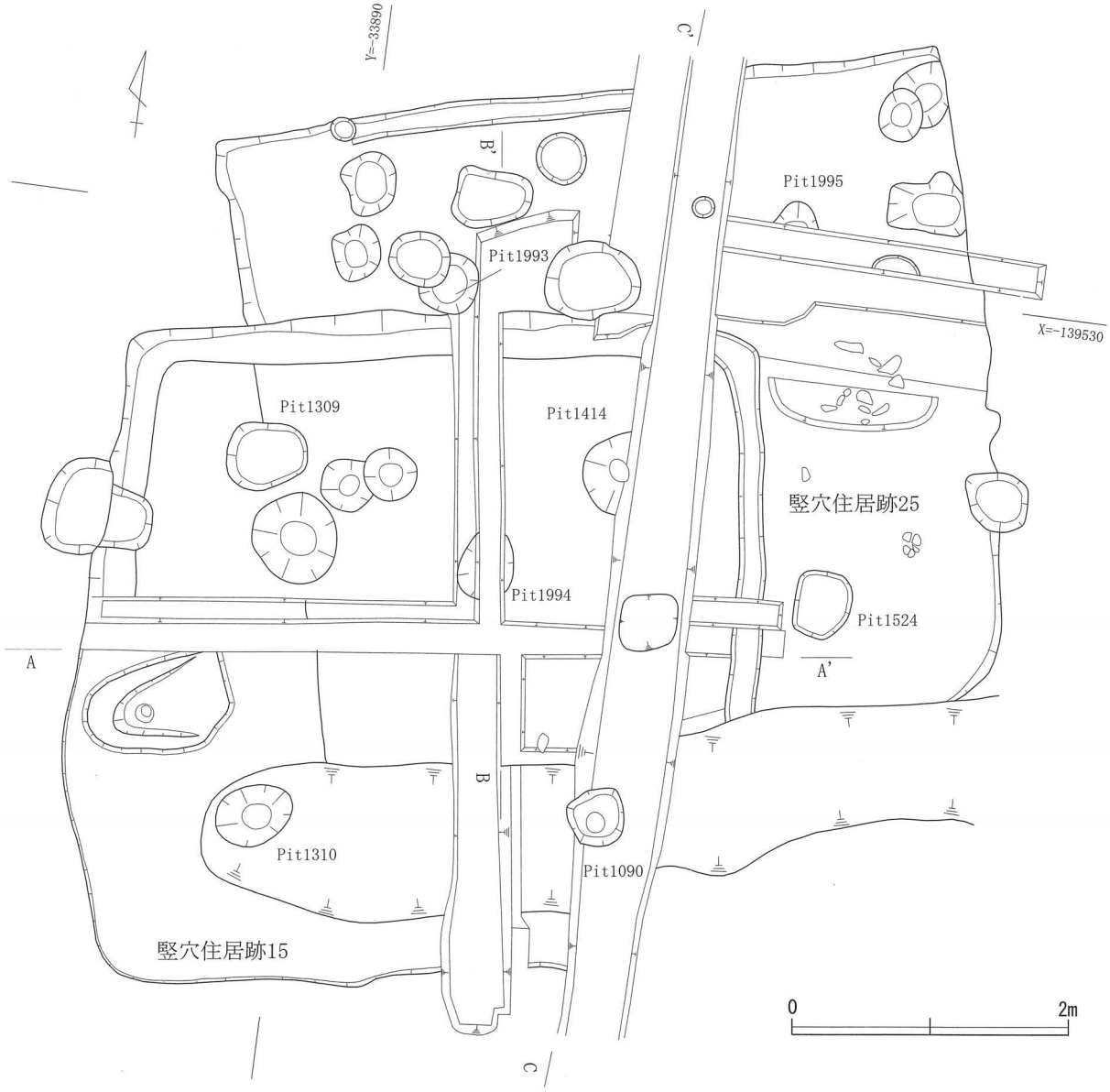
竪穴住居跡４カマド

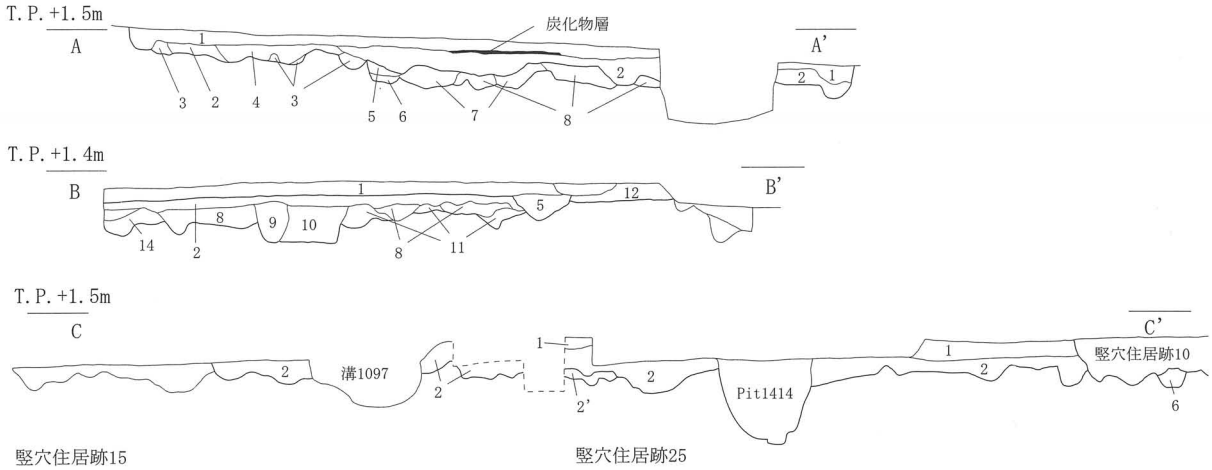
1：2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘質土に2.5Y4/1黄灰色焼土ブロック混じる
2：2.5Y5/1黄灰色炭化物層
3：2.5Y6/3にぶい黄色灰層
4：7.5Y4/1灰色砂混じり粘土
5：N1.5/0黒色炭化物層
6：10YR4/1褐灰色粘質シルト
7：10GY5/1緑灰色～5YR4/1褐灰色粘土（カマド壁）
8：5YR4/1褐灰色粘土
9：5G5/1緑灰色粘土に2.5Y4/1黄灰粘土混じる
10：5G5/1緑灰色粘土
11：10YR4/3にぶい黄灰色粘土
12：N4/0灰色シルトに10GY6/1緑灰色粘土がブロック状に混じる（竪穴住居跡８の埋土）



竪穴住居跡8カマド

第８図　竪穴住居跡２・４・８カマド平面図・断面図





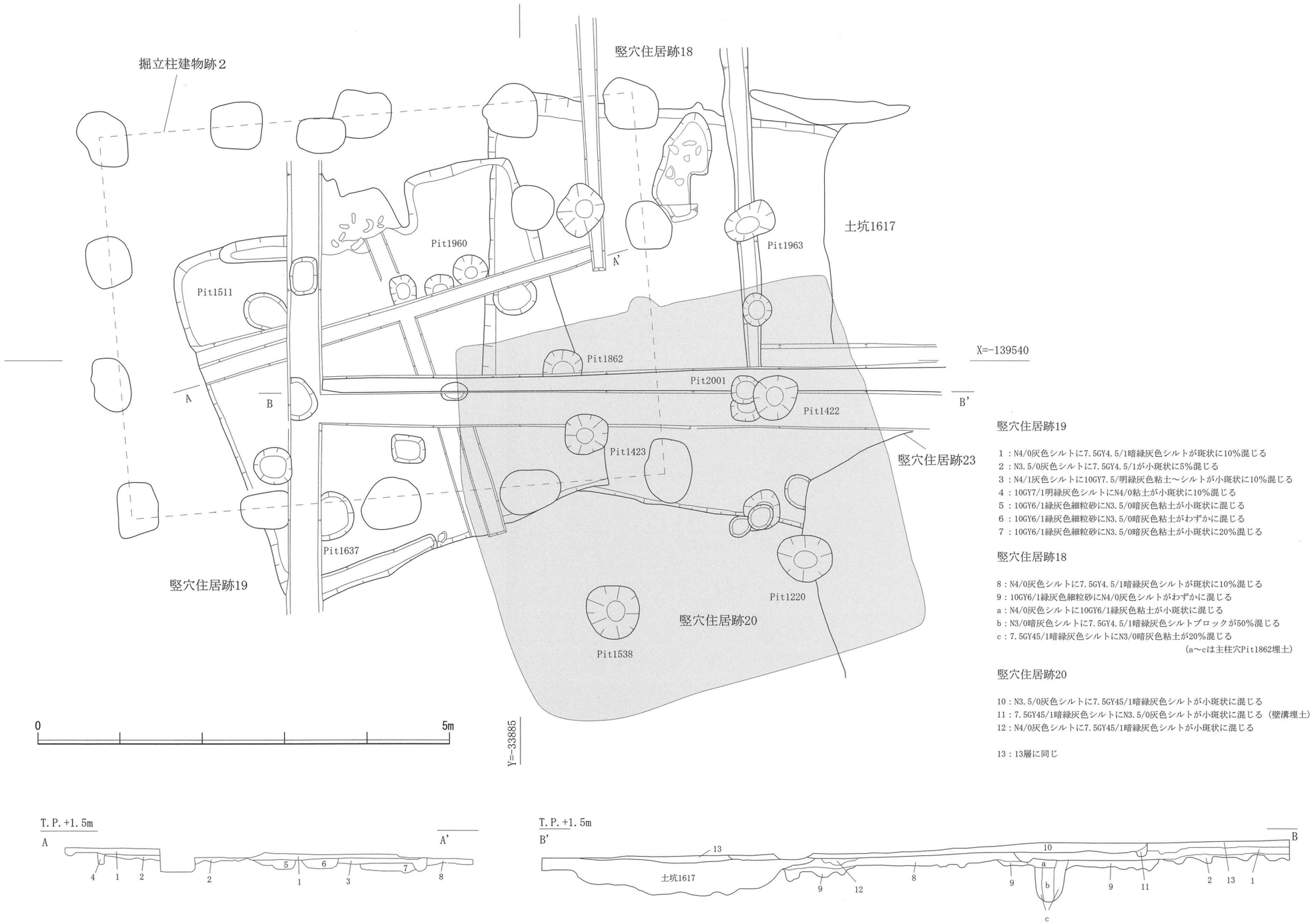
竪穴住居跡15

1：N4/0灰色～10YR5/1灰色粘土に10GY7/1明緑灰色粘土が斑状に混じる
2：10Y4/1灰色粘土に10GY7/1明緑灰色粘土がブロック状に混じる
2'：2に10BG6.5/1青灰色粘土小ブロック混じる
3：10GY6/1緑灰色細粒砂混じり粘土に10Y4/1灰色粘土が少量混じる
4：2に焼土が混じる
5：10Y4/1灰色粘土に10GY7/1明緑灰色粘土ブロック混じる（壁溝埋土）

竪穴住居跡25

5：10YR4/1灰色粘土に10GY7/1明緑灰色粘土の小ブロックが混じる
6：10GY7/1明緑灰色粘土に10Y4/1灰色粘土ブロック状に混じる　（6・7は壁溝埋土）
7：10GY6/1青灰色粘土に10Y4/1灰色粘土小ブロック混じる
8：7に10GY6/1緑灰色細粒砂を斑状に含む
9：10GY6/1緑灰色粘土に10Y5/1灰色細粒砂～シルト斑状に混じる
10：N4/0灰色粘土
11：10Y4/1灰色粘土に10GY7/1明緑灰色粘土がブロック状に混じる
12：10Y4/1灰色粘土に10BG6/1青灰色粘土がブロック状に混じる

第９図　竪穴住居跡15・25平面図・断面図



竪穴住居跡19

1：N4/0灰色シルトに7.5GY4.5/1暗緑灰色シルトが斑状に10%混じる
2：N3.5/0灰色シルトに7.5GY4.5/1が小斑状に5%混じる
3：N4/1灰色シルトに10GY7.5/明緑灰色粘土～シルトが小斑状に10%混じる
4：10GY7/1明緑灰色シルトにN4/0粘土が小斑状に10%混じる
5：10GY6/1緑灰色細粒砂にN3.5/0暗灰色粘土が小斑状に混じる
6：10GY6/1緑灰色細粒砂にN3.5/0暗灰色粘土がわずかに混じる
7：10GY6/1緑灰色細粒砂にN3.5/0暗灰色粘土が小斑状に20%混じる

竪穴住居跡18

8：N4/0灰色シルトに7.5GY4.5/1暗緑灰色シルトが斑状に10%混じる
9：10GY6/1緑灰色細粒砂にN4/0灰色シルトがわずかに混じる
a：N4/0灰色シルトに10GY6/1緑灰色粘土が小斑状に混じる
b：N3/0暗灰色シルトに7.5GY4.5/1暗緑灰色シルトブロックが50%混じる
c：7.5GY45/1暗緑灰色シルトにN3/0暗灰色粘土が20%混じる
(a～cは主柱穴Pit1862埋土)

竪穴住居跡20

10：N3.5/0灰色シルトに7.5GY45/1暗緑灰色シルトが小斑状に混じる
11：7.5GY45/1暗緑灰色シルトにN3.5/0灰色シルトが小斑状に混じる（壁溝埋土）
12：N4/0灰色シルトに7.5GY45/1暗緑灰色シルトが小斑状に混じる

13：13層に同じ

第10図　竪穴住居跡18・19・20平面図・断面図

されている。天井部、袖部ともに削平されており、また南側は竪穴住居跡19によって切られている。焚口から30cmのところに土師器甕を伏せて支脚として転用していた。

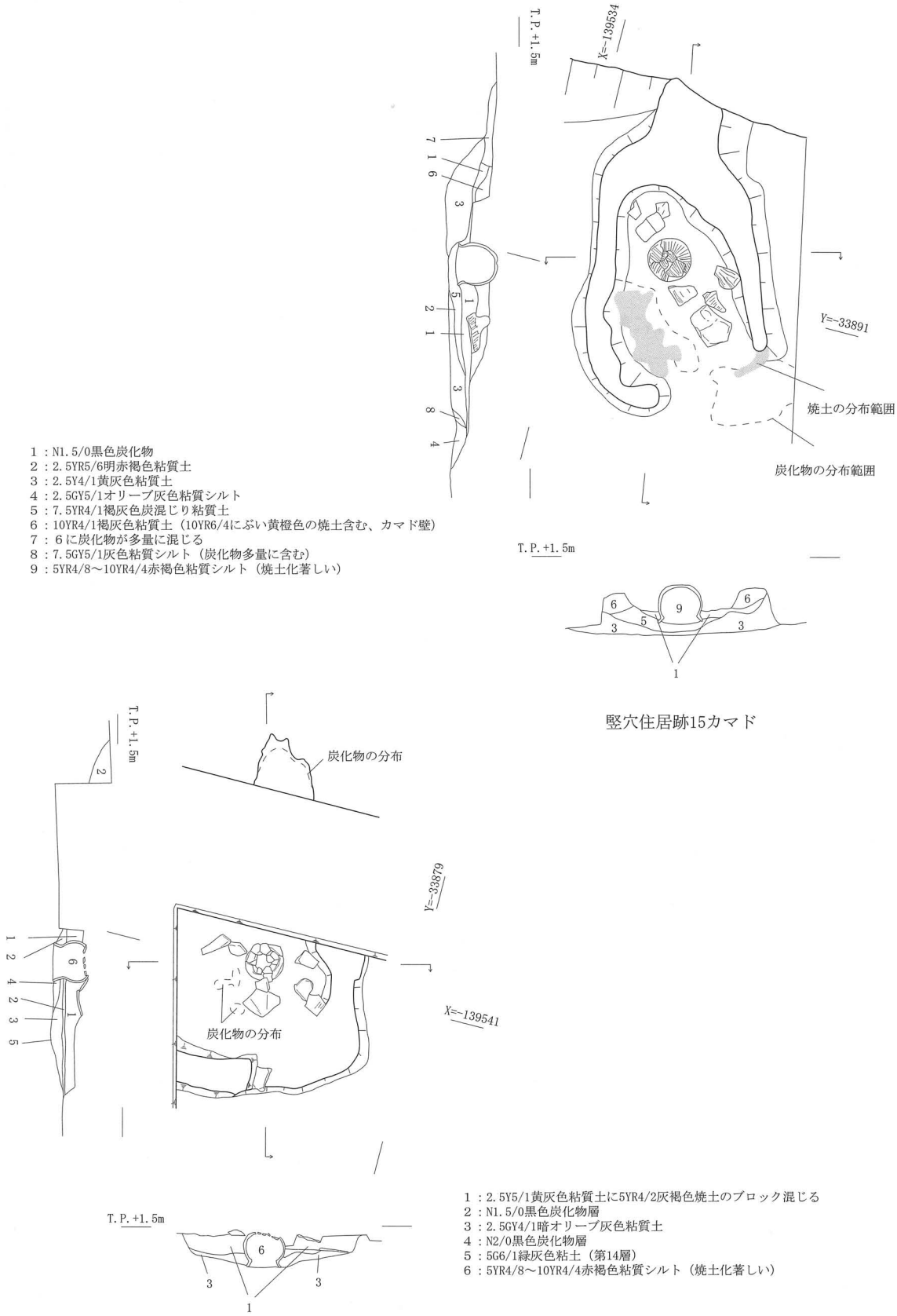
竪穴住居跡18（第10図、図版８）　ｄ～ｅ9区で検出された竪穴住居跡である。竪穴住居跡19および20によって切られている。竪穴住居跡20の掘り下げと同19の掘り下げのあとで平面形が確認できたが、それらに切られていない北壁中央にあるカマドはT.P.＋1.1mで検出した。床面のレベルはT.P.＋1.1m弱である。主軸は北で平面形は一辺が4.3m四方の隅丸方形である。住居内のピットのうち、Pit1963、Pit2001、Pit1862などは主柱穴になる。また床面周囲には壁溝をめぐらせている。カマドは天井部も壁も残存せず、焼土層と炭化物層が検出され、北壁から50cmのところに土師器甕を伏せて支脚に転用していた。また焚口は別のピットによって切られている。

竪穴住居跡19（第10図、図版８）　ｄ～ｅ9区で検出された竪穴住居跡である。竪穴住居跡16および18を切り、同20に切られる。検出レベルはT.P.＋1.25mで、床面のレベルはT.P.＋1.15mである。主軸は北北東で平面形は長軸4.5m、短軸4.2mの隅丸方形である。住居内のピットのうち東側のPit1511とPit1960、Pit1637は主柱穴になる可能性があるがそれ以外は不明である。床面周囲には部分的に壁溝を検出している。カマドは北壁中央にある。天井部や壁体は残存していないが、焼土層と炭化物層中に土師器甕を伏せて支脚にしている。

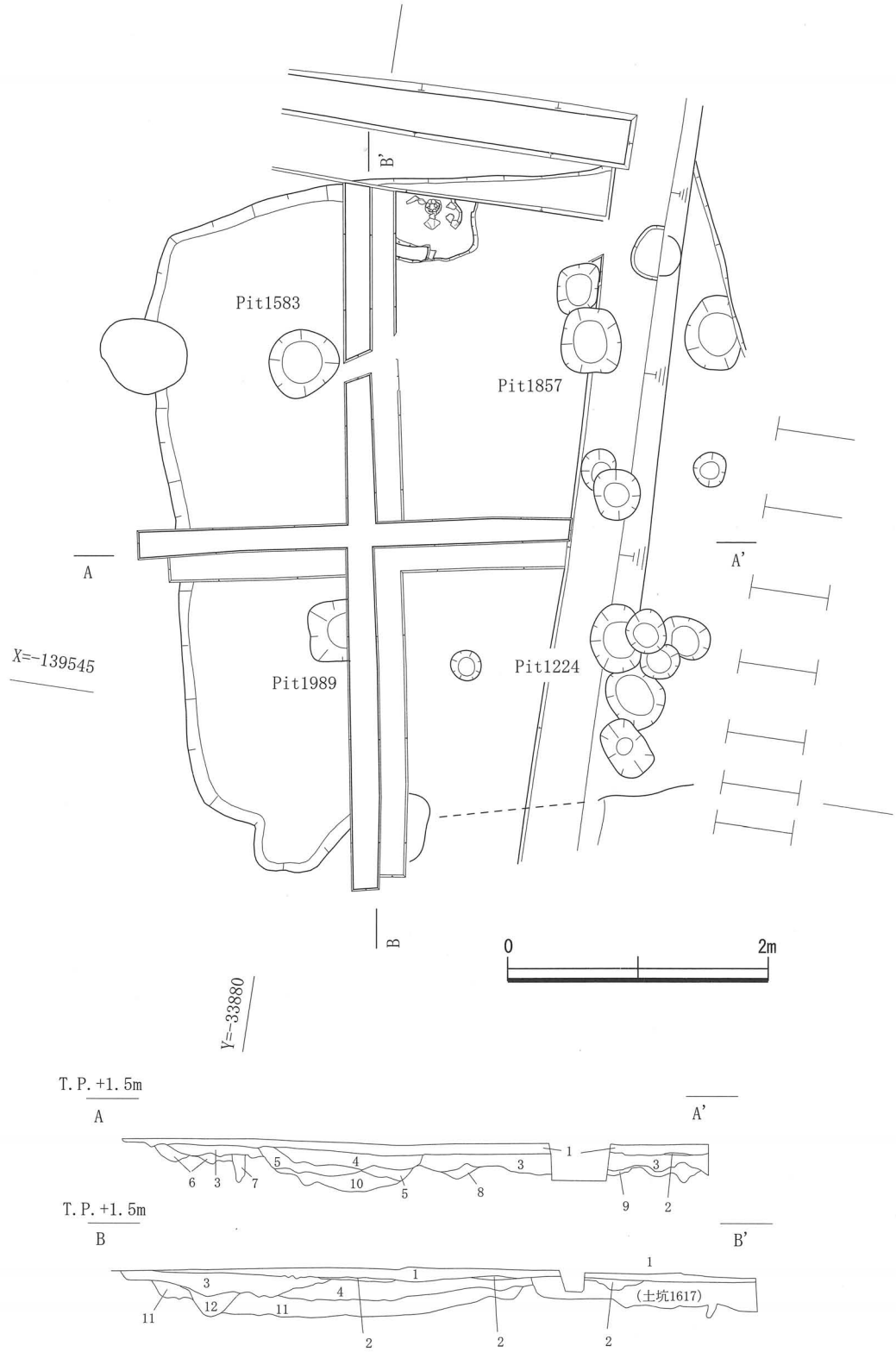
竪穴住居跡20（第10図、図版８）　ｄ～ｅ9区で検出された竪穴住居跡である。第13層中に掘り方があるが、プランを確定させることは困難であった。ｄ9区とｅ9区境界のアゼの土層断面によって竪穴住居跡18、19、23との重複関係を確認している。検出レベルはT.P.+1.3mで、床面のレベルはT.P.+1.2mである。主軸はほぼ北北東で、平面形は一辺が約5.0mの隅丸正方形である。住居内のピットのうちPit1423、Pit1422、Pit1220、Pit1538が主柱穴である。北壁の中央部にカマドがある。カマドは天井部と壁体は削平されている。焼土と炭化物がU字状に分布しており、そのほぼ中央部に土師器甕を伏せて支脚にしている。

竪穴住居跡23（第12図、図版８）　ｅ9区で検出された竪穴住居跡である。炭化物と共に須恵器、土師器が廃棄された土坑1617を整地しその上に構築している。検出レベルはT.P.+1.15mで、床面のレベルはT.P.+1.10mである。主軸は北北東で、平面形は南西端がD-2区との境目で切れているが一辺4.8mの隅丸方形である。主柱穴はPit1583、Pit1989、Pit1224、Pit1857である。北壁の中央部にカマドが配されている。カマドは天井部、壁体は削平されているが、焼土と炭化物がU字状に分布している。北半分はｄ・ｅ区のトレンチで削平されてしまったが、境界のアゼに煙道部が残存している（第11図）。カマドのほぼ中央部に土師器甕を伏せて支脚としている。

竪穴住居跡25（第９図、図版10）　ｃ～ｄ9区で検出された竪穴住居跡である。竪穴住居跡10、11、15に切られている。竪穴住居跡15の床面の下位にこの住居跡の床面を確認できる。検出レベルはT.P.+1.2mで、床面のレベルはT.P.+1.1mである。主軸は東北東で平面形は長軸5.2m、短軸4.6mの方形である。主柱穴はPit1995、Pit1993、Pit1994で、もう１つは竪穴住居跡15の掘り方により不明である。東壁の中央部にカマドが配されている。天井部、壁体は削平されており、焼土



第11図　竪穴住居跡15・23カマド平面図・断面図



1：10Y3/1オリーブ黒色粘土に10GY6/1緑灰色粘土ブロックが10%混じる
2：10Y3/1オリーブ黒色粘土に10GY6.5/1緑灰色シルト～極細粒砂帯状に混じる
3：10Y4/1灰色粘土に10GY6/1緑灰色粘土ブロックが30%混じる
4：10Y3.5/1オリーブ黒色粘土に10GY6/1明緑灰色粘土を斑状に含む
5：10Y3/1オリーブ黒色粘土に10GY6/1緑灰色粘土ブロックが50%混じる
6：10GY6/1緑灰色粘土に10Y3/1オリーブ黒色粘土ブロックが10%混じる
7：10GY6/1緑灰色粘土に10Y3/1オリーブ黒色粘土が小斑状に混じる
8：10GY6.5/1緑灰色シルト～極細粒砂に7.5Y2.5/1黒色粘土が小斑状に混じる
9：10Y4/1灰色粘土に10GY6/1緑灰色粘土小斑状に混じる
10：10GY6/1緑灰粘土～粘質シルトに7.5Y2.5/1黒色粘土ブロックが10%混じる
11：10Y3/1オリーブ黒色粘土に10GY6/1緑灰色粘土が小斑状に混じる
12：10Y3/1オリーブ黒色粘土

第12図　竪穴住居跡23平面図・断面図

と炭化物が分布している。中央部に土師器甕を伏せて支脚に転用している（第11図）。

掘立柱建物跡

D-1区の掘立柱建物跡は８棟以上検出されている。今後各ピットの位置関係や土層断面、重複関係を再検討し棟数が増えることも予測される。それについては本報告に委ね、ここでは調査時点で判明しているものについて略述する。

掘立柱建物跡１（第13図）　ｃ～ｄ10区で検出された掘立柱建物跡で３間×４間であるが北辺から１間部分は幅が約１ｍでその他の柱の間隔が約1.8mとはやや異なる。梁間5.2mで桁行6.2mである。これらのうちPit1001は竪穴住居跡14の主柱穴Pit1806を切り、Pit1023はその掘り方を切っている。またPit1006は竪穴住居跡12の掘り方を切っている。検出面はT.P.+1.4mである。柱穴は一辺約40cmの略方形で、埋土は灰色粘土が主体である。

掘立柱建物跡２（第13図）　ｄ～ｅ9区で検出された３間×４間の掘立柱建物跡で、梁間4.6m、桁行5.5mである。柱穴は一辺30～40cmの略方形で、埋土は灰色粘土が主体である。各ピットのうちPit1800は竪穴住居跡20のカマド下から検出され、またPit1835、Pit1062は竪穴住居跡19を切っている。またPit1830、Pit1349などは竪穴住居跡16を切っている。

掘立柱建物跡３・４（第14図、図版10）　ｃ9～ｄ8区で検出された掘立柱建物跡で、掘立柱建物跡３は２間×２間以上、掘立柱建物跡４も２間×２間以上で、ともに東側が調査区外に伸びると考えられる。掘立柱建物跡３は梁間3.5m以上、桁行3.5m以上、掘立柱建物跡４は梁間３ｍ以上、桁行４ｍ以上である。

掘立柱建物跡５（第15図）　ｄ～ｅ10区で検出された３間×３間の掘立柱建物跡で、梁間約４ｍ、桁行約５ｍである。Pit1067～1069は竪穴住居３を切っている。柱穴は一辺40～50cmの円形か略方形で埋土は灰色粘土が主体である。検出面はT.P.+1.4m前後である。

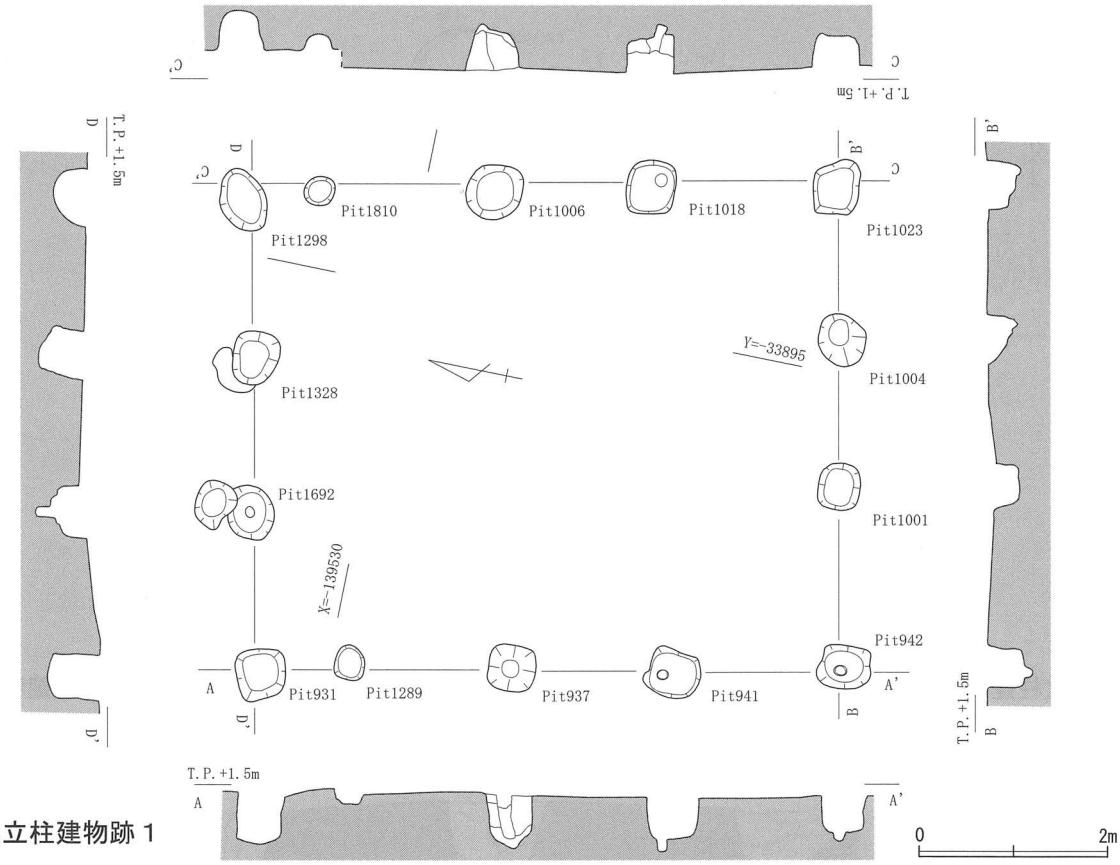
掘立柱建物跡６（第15図）　ｅ～ｆ9区で検出された３間×３間の掘立柱建物跡で、梁間4.4m、桁行5.2mである。柱穴は一辺40～50cmの円形～楕円形である。埋土は14層をブロック状に含む灰色粘土が主体である。西辺は竪穴住居跡８を切っており、とくにPit1917は竪穴住居跡８のカマドに広がる炭化物層を切っている。

掘立柱建物跡７　ｅ～ｆ8区で検出された。東半部がD-1区外であり、D-2区に続きが検出されてないので２間×２間の掘立柱建物跡であると考えられる。梁間2.8m、桁行3.5mである。

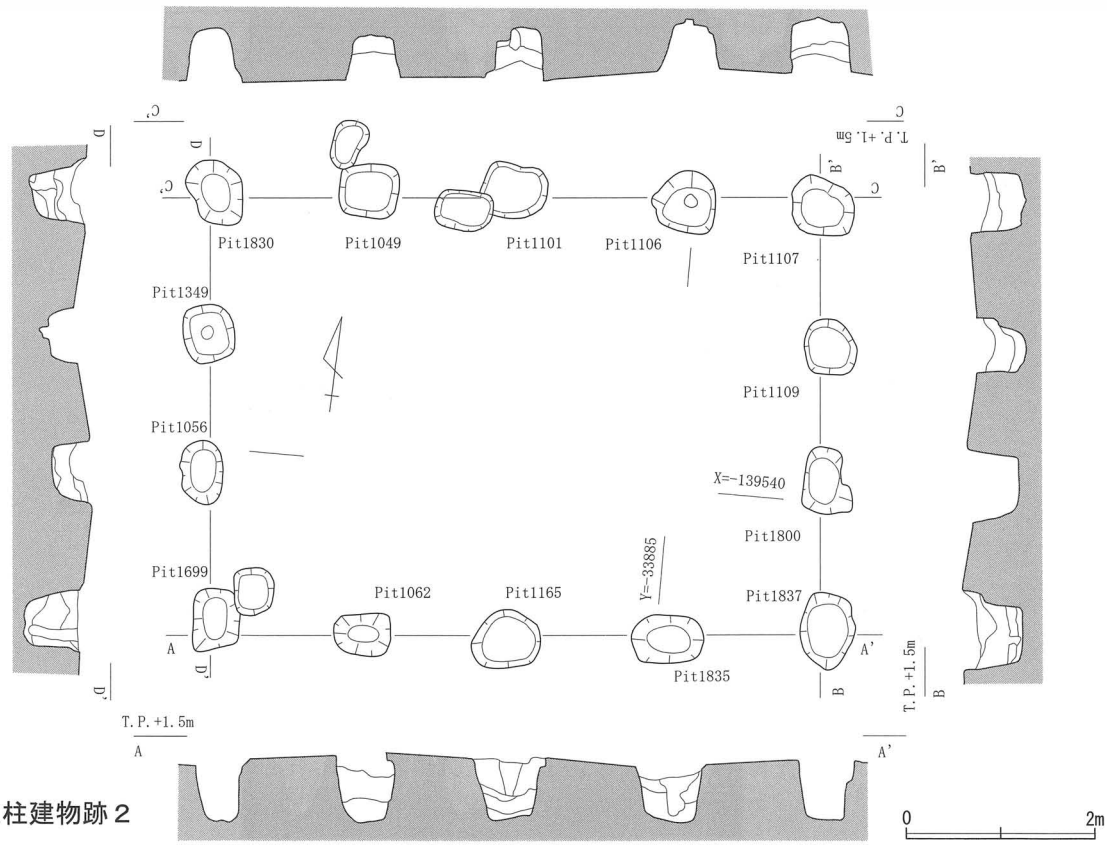
掘立柱建物跡８　ｄ～ｅ9区で検出された３間×３間の掘立柱建物跡で、梁間4.8m、桁行6.3mである。竪穴住居跡23の主柱穴Pit1857とPit1224によって東側の柱穴が２つ切られている。

その他の遺構

溝900（第16図、図版11）　A20-ｅ1～2で検出された溝で東の肩部から溝の落ち際を検出している。この溝は2001年度に行われた発進立坑部の発掘調査で検出された溝11に当たる。発進立後

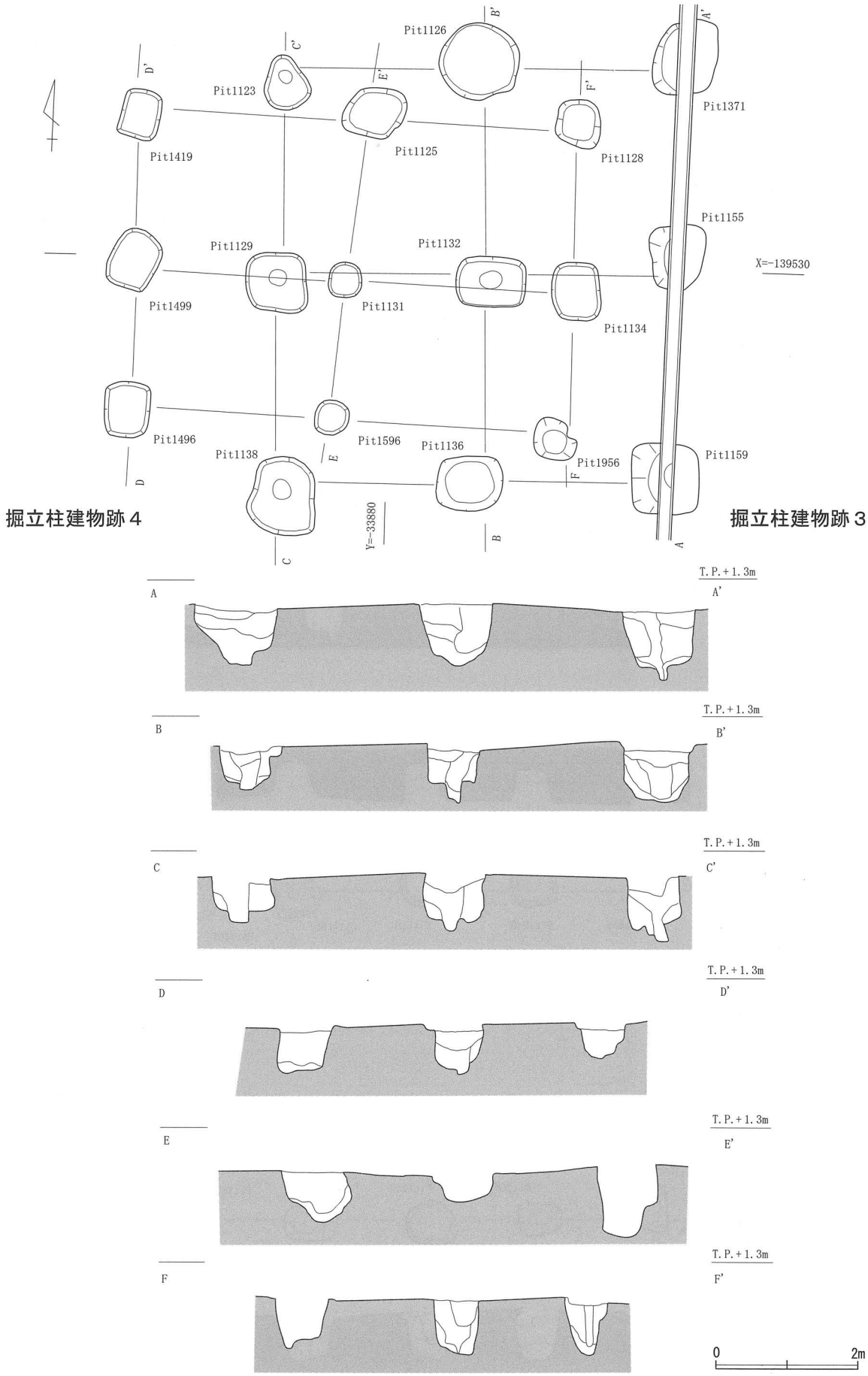


掘立柱建物跡１

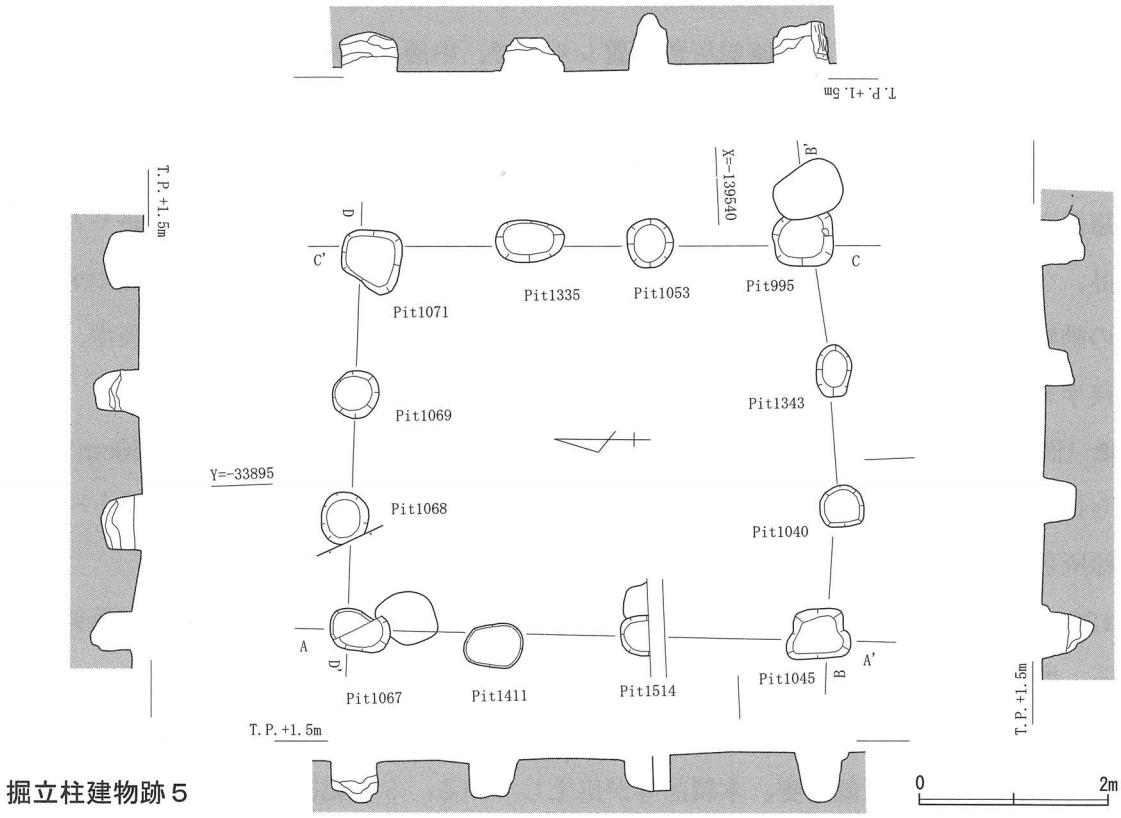


掘立柱建物跡２

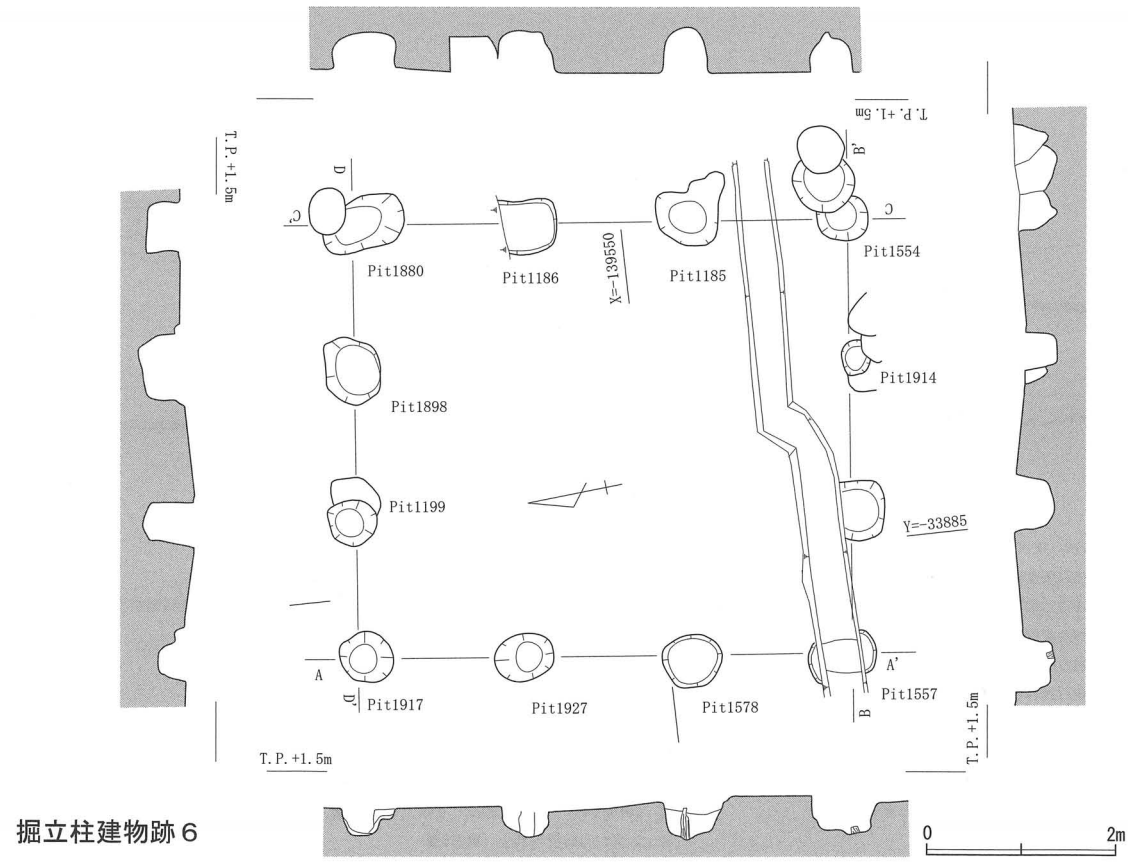
第13図　掘立柱建物跡１・２平面図・断面図



第14図　掘立柱建物跡３・４平面図・断面図



掘立柱建物跡５



掘立柱建物跡６

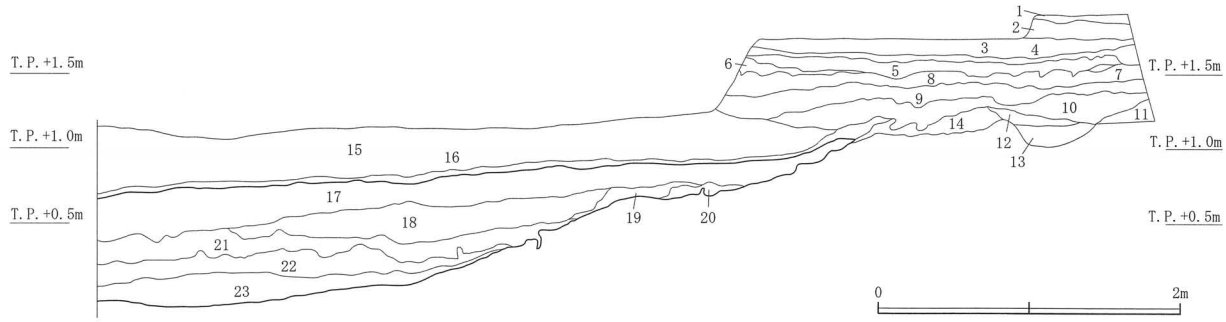
第15図　掘立柱建物跡５・６平面図・断面図

部では西の肩を検出しており、今回の東肩部の検出によって溝の方向は北西から南東方向であることが推測される。埋土は上層が暗緑灰色粘質シルトで、中層が暗オリーブ灰～オリーブ灰色の砂混じり粘質シルトで発進立後部溝11の第３層および第４層に対応している。下層は暗灰色粘土で同溝11の第５層に対応する層とさらにその下に第６層を確認した。遺物は５世紀後半から６世紀の須恵器を中心に、韓式系土器、滑石製臼玉、双孔円盤、ガラス玉などの他に、鎌や刀子などの鉄製品、ツチノコや鎌柄、斧柄、鍬などの木製品など多種多様である。さらに馬骨や犬骨、鹿角などの動物遺存体も出土している。上層は概ね６世紀前半～後半、中層は５世紀後半、下層は５世紀後半を中心としている。

溝986（図版18）　ｅ～ｆ1区で検出された北西―南東方向の溝で幅90cm、深さ50cmである。溝内からは多量の須恵器（壷、坏身、坏蓋など）が検出されている。埋土は灰色シルト～粘土と14層の緑灰色粘土混じりの灰色粘土で上層が６世紀前半、下層は５世紀後半である。

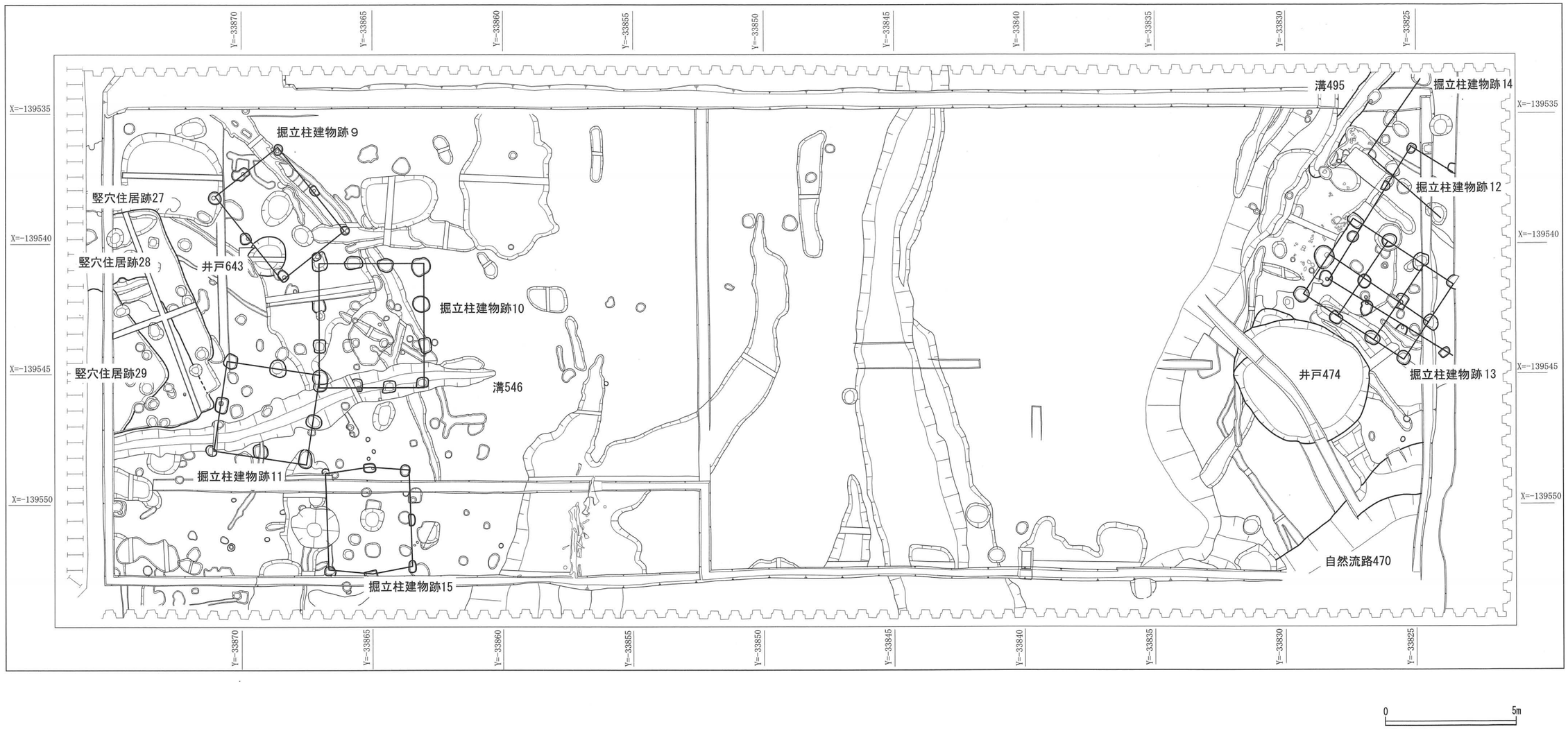
井戸1281　ｅ1区で検出された径約２ｍ、深さ２ｍの井戸で最下層から土師器甕が数個体出土している。所属時期は５世紀後半である。

土坑1617（図版18）　ｄ8～9区で検出された土坑で、南半部は竪穴住居跡23の下で検出された。須恵器坏身、坏蓋、土師器甕、木製品等が出土している。５世紀後半の遺構である。



1：5Y8/1灰白色中粒砂（鉄分沈着顕著）
2：5Y5/1灰色礫混じり細粒砂
3：2.5Y7/2灰黄色粗粒砂～2.5Y8/1灰白色粗粒砂
4：5Y8/1灰白色粗～中粒砂（斜交するラミナがみられる）
5：5Y4/1灰色礫混じり細粒砂
6：5Y8/1灰白色粗粒砂
7：5Y5/2灰オリーブ色礫混じり細粒砂（鉄分沈着顕著）
8：7.5Y5/1灰色粘質シルト
9：7.5Y4/1灰色粘質シルト
10：2.5Y4/1黄灰色細粒砂混じり粘質シルト
11：10Y5/1灰色粘質シルト
12：2.5Y5/1黄灰色粘土（炭化物混じる）
13：7.5GY5/1緑灰色粘質シルト　（12,13は溝986埋土）
14：2.5GY6/1オリーブ灰色粘質シルト
15：5Y8/1灰白色～5Y6/1灰色粗～中粒砂（上下位は水平ラミナ,中位は斜交ラミナがみられる）
16：5Y4/1灰色～2.5Y7/4浅黄色シルト
17：7.5GY4/1暗緑灰色粘質シルト（炭化物,植物遺体含む）
18：5GY4/1暗オリーブ灰～10Y4/2オリーブ灰色砂混じり粘質シルト（溝第3層）
19：10GY4/1暗緑灰色粘質土
20：10GY5/1緑灰色砂混じり粘土
21：10Y5/2オリーブ灰色砂混じり粘土（溝第4層）
22：2.5GY4/1暗灰色粘土（溝第5層）
23：2.5GY4/1暗灰色粘土（22より植物遺体,土器片の包含量が少ない（溝第6層）

第16図　溝900土層断面図



第17図　D-2区古墳時代中・後期遺構面主要遺構配置図

D－2区の遺構と遺物

D-2区は中央部に狭部幅で約30mの浅い谷状地形が緩やかな勾配で北から南へ流れており（第3図のA・B)、これを挟んで東西にある第14層の高まり上に第13層が堆積し、その上面および第14層上面に掘立柱建物跡などの遺構が存在する。第13層上面の遺構は古墳時代後期に属すが（図版12)、第14層上面の遺構にも中期に加えて後期の遺構も多数存在する。ここでは第14層上面検出遺構を中心に述べる。なお谷を挟んで東西の遺構群を東遺構群、西遺構群と呼ぶことにする。東遺構群はC調査区で検出された古墳時代遺構面の西端部にあたり、また西遺構群はD-1区から続く遺構面の東端部にあたる。

竪穴住居跡

竪穴住居跡はD-1区からの続きになる西遺構群で3棟検出されている。

竪穴住居跡26（図版15）　d～e8区で検出された竪穴住居跡である。西半部がD-1区との境目で全体のプランははっきりしないが平面形は一辺6.5mの隅丸方形であろう。埋土は灰色シルトに明青灰色シルトブロックが混じる。竪穴住居跡27によって切られている。住居内のピットのうち主柱穴になるものは不明確である。

竪穴住居跡27（図版15）　d8区で検出された竪穴住居跡である。西半部がD-1区との境目にあるため全体のプランははっきりしないが、平面形は一辺が6m程度の隅丸方形であろう。

竪穴住居跡28　d8区で検出された竪穴住居跡で、竪穴住居跡28の掘り下げによって確認された。D-1区との境目でプランは不明である。

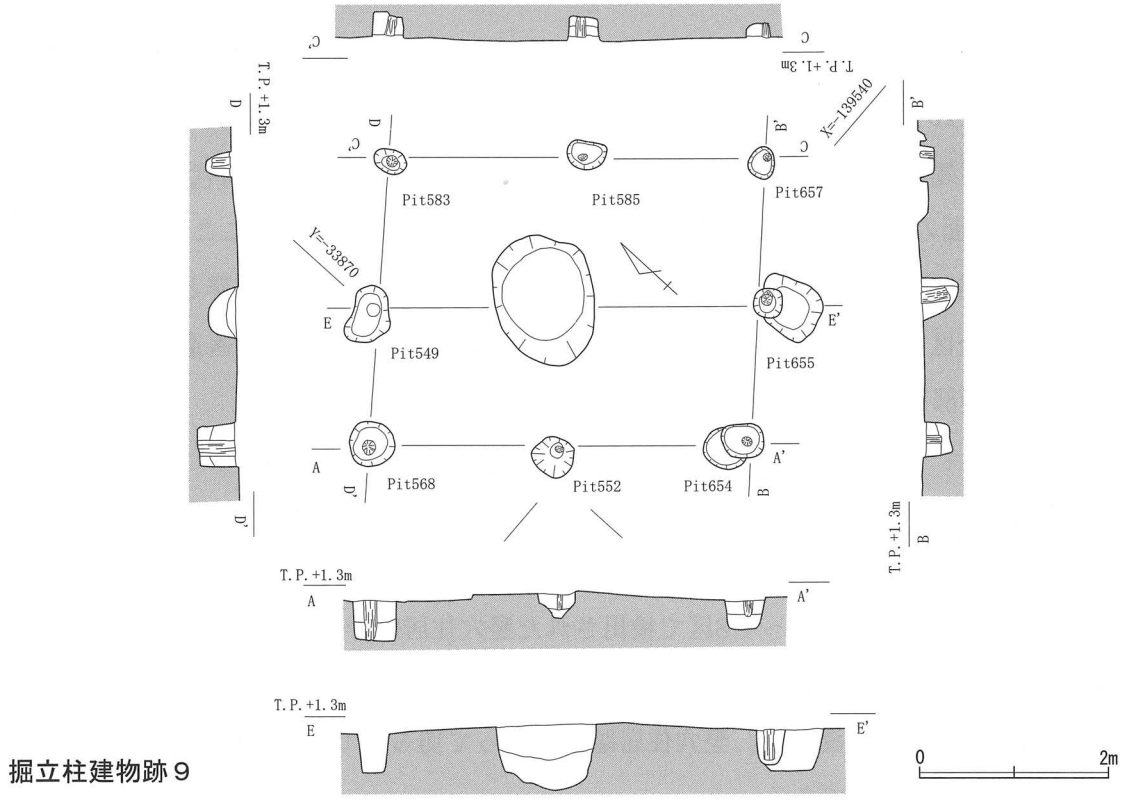
掘立柱建物跡

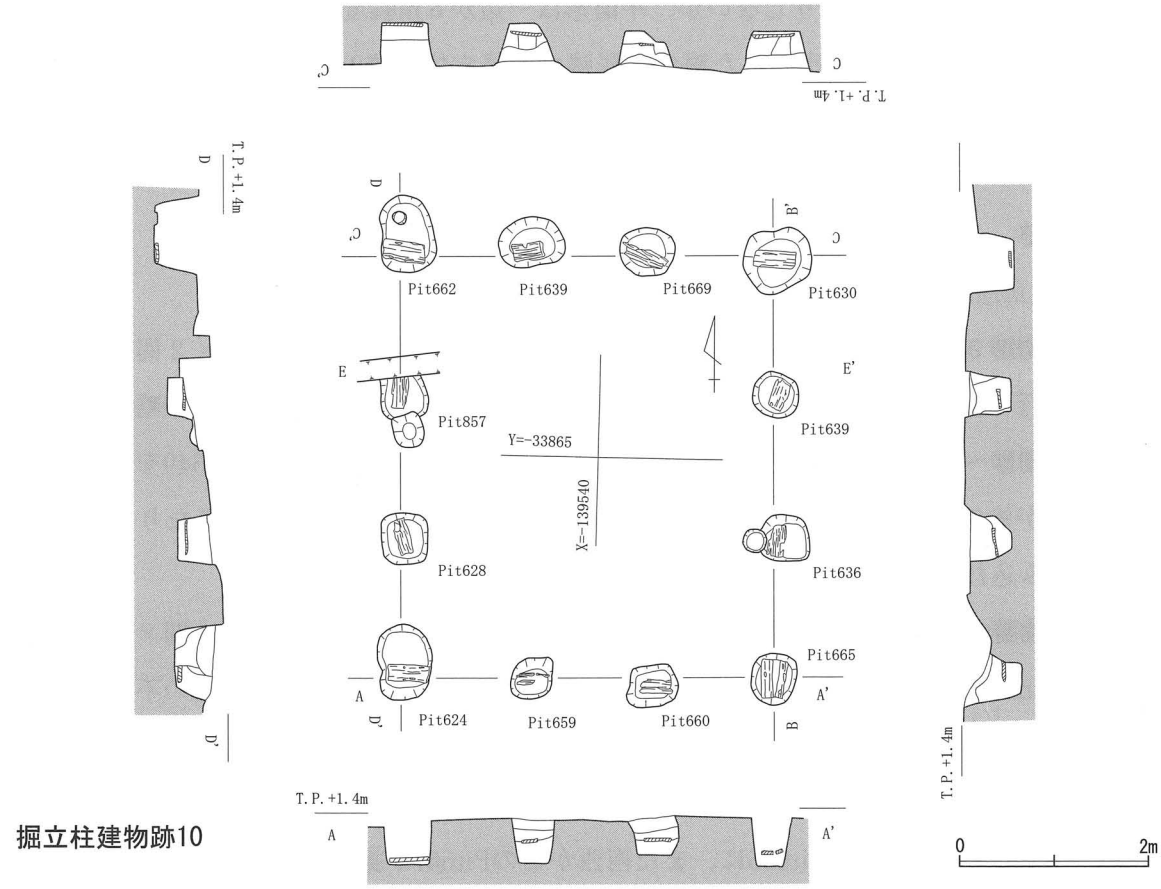
D-2では掘立柱建物跡を7棟検出している。

掘立柱建物跡9（第18図、図版14）　西遺構群の北半部で検出された2間×2間の建物跡で梁間3.8m、桁行4mで、検出面はT.P.+1.1mである。柱穴は30～40cmの不整円形や略方形で、埋土は灰色の極細砂～シルトに地山の明青灰色シルトがブロック状に混じる。Pit549を除く他の柱穴からは柱根が検出された。およそ径10～15cmである。他の掘立柱建物跡と異なり、柱根がピット底面に沈み込むことはない。

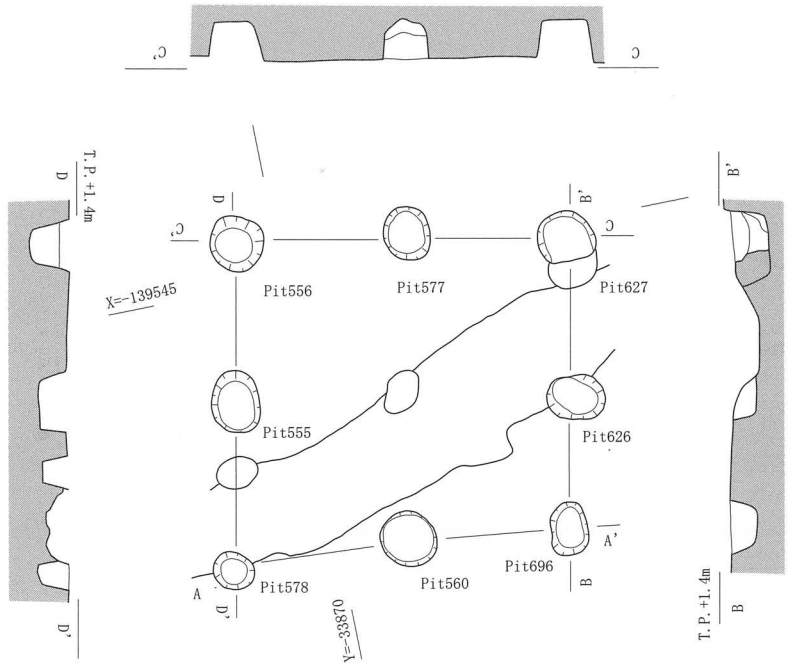
掘立柱建物跡10（第18図、図版14・16）　西遺構群の中央部で検出された3間×3間の建物跡で、梁間3.8m、桁行4.5mである。検出面はT.P.+1.3mである。柱穴は50～70cmの不整円形や略方形で深さは最深で60cmになる。埋土はオリーブ黒色シルトに地山の青灰色シルトの小ブロックが混じる。柱痕跡は確認されなかったが、すべての柱穴から礎板が検出された。北西かどのPit662が、掘立柱建物跡9のPit655に、また南西かどのPit667が掘立柱建物跡11のPit627に切られている。またPit667～Pit665は溝546によって削平されている。

掘立柱建物跡11（第19図）　西遺構群の中央部で検出された2間×2間の建物跡で梁間3.4m、

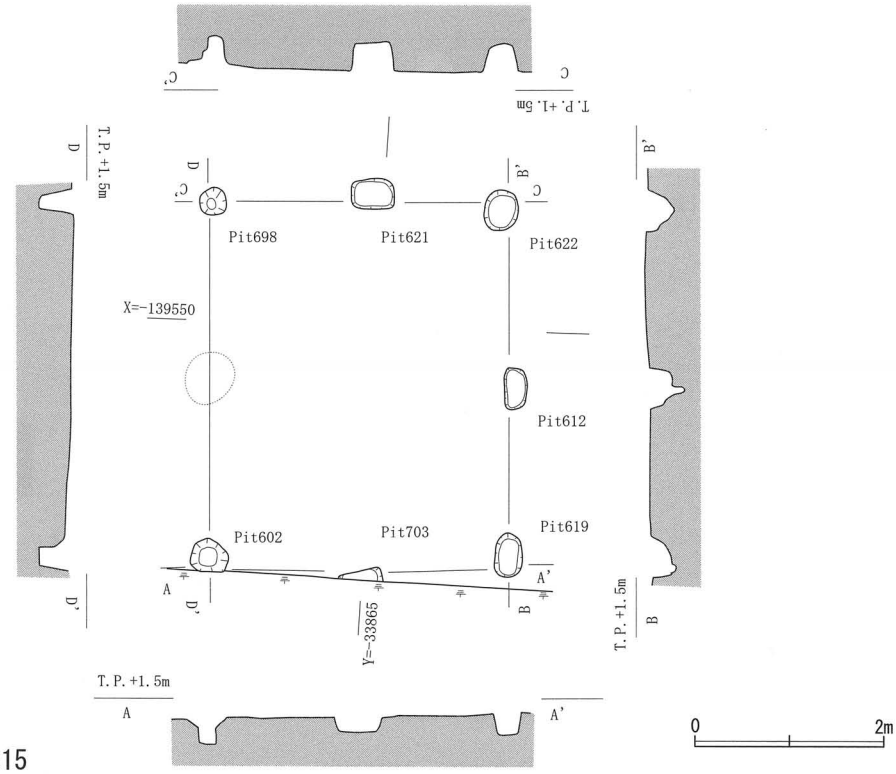




第18図　掘立柱建物跡９・10平面図・断面図

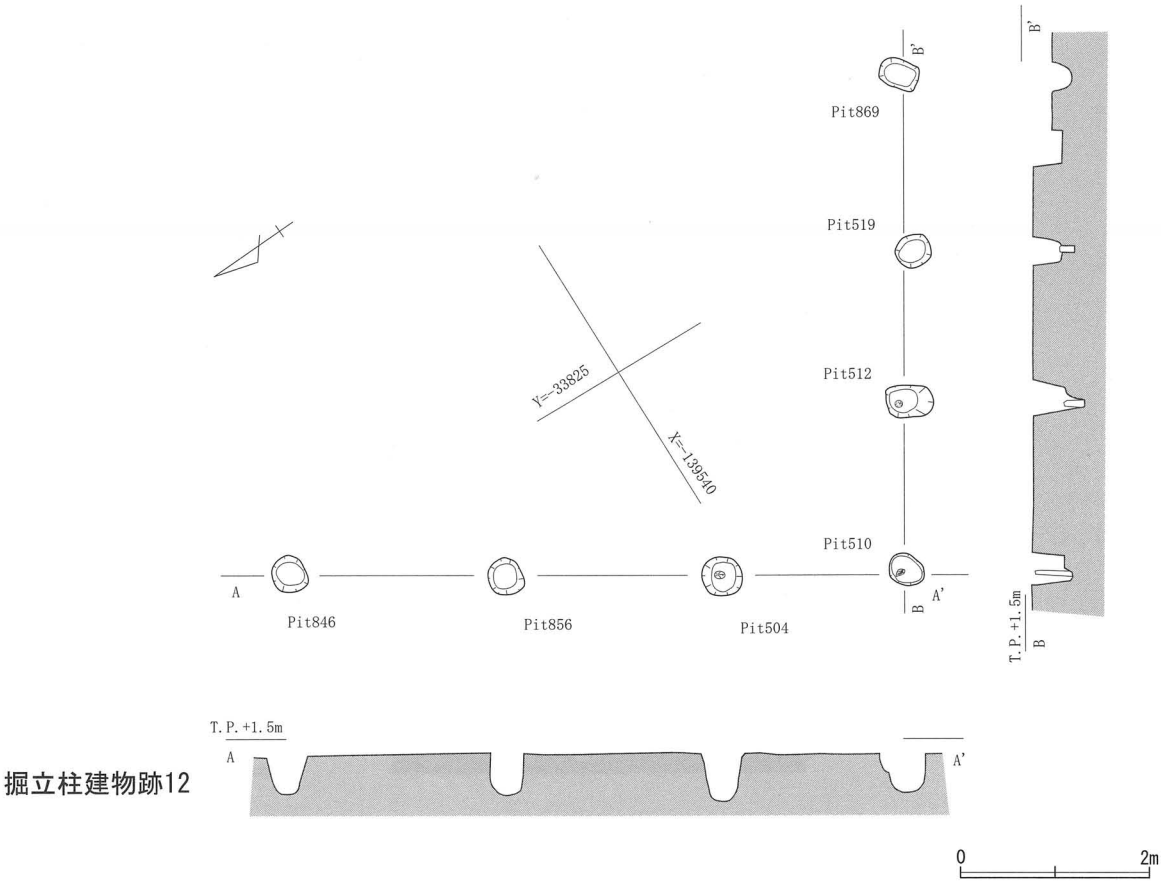


掘立柱建物跡11

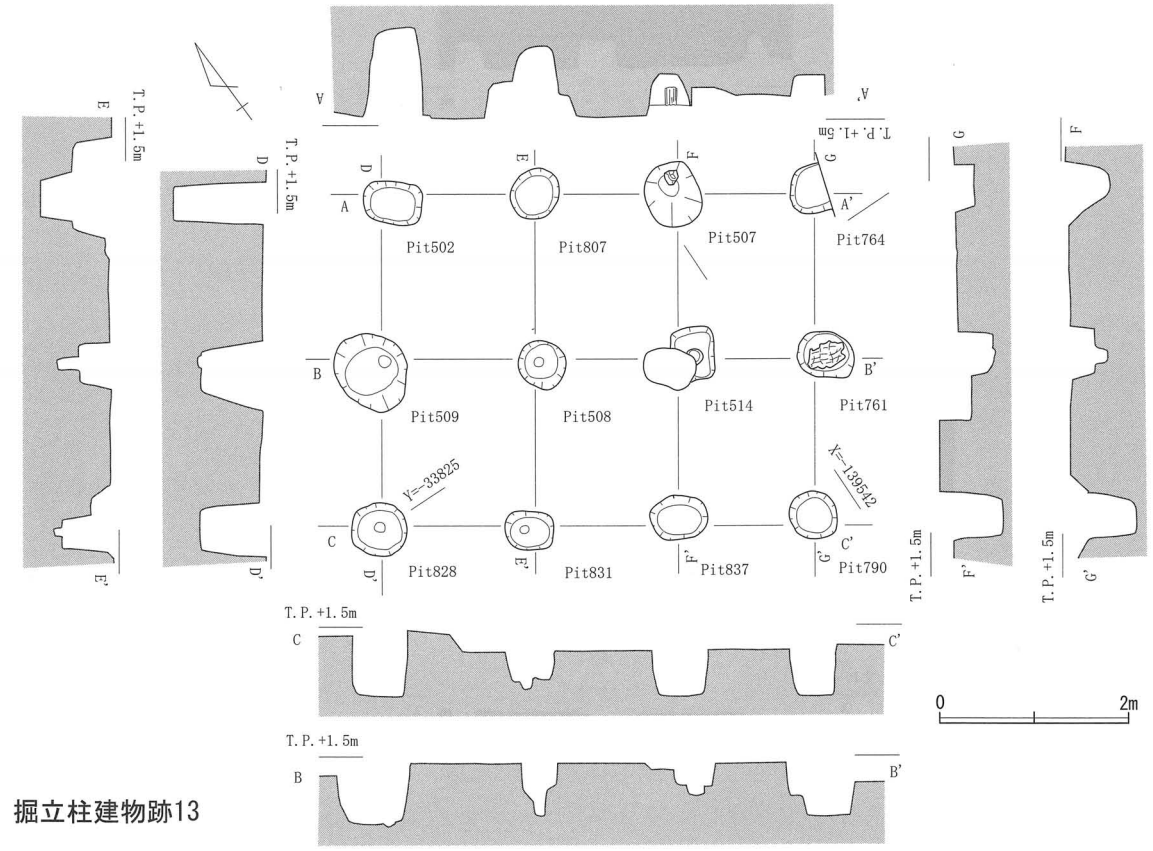


掘立柱建物跡15

第19図　掘立柱建物跡11・15平面図・断面図



掘立柱建物跡12



掘立柱建物跡13

第20図　掘立柱建物跡12・13平面図・断面図

桁行3.5mである。検出面はT.P.+1.3mである。柱穴は50cm程度の不整円形で深さは最深で40cmである。埋土は灰色シルトに第14層の青灰色シルトの小ブロックが混じる。Pit626、Pit578は溝546によって削平されている。

掘立柱建物跡12（第20図、図版15）　東遺構群で検出された３間×３間以上の建物跡である。梁間５m以上、桁行６mである。検出面はT.P.+1.4mである。柱穴は30cm程度の楕円形や円形である。埋土は灰色シルトに第14層の青灰色シルトがやや混じる。Pit856、Pit504などで柱根が検出されている。柱材のうちPit856、Pit519のものはヒノキであった。

掘立柱建物跡13（第20図、図版15）　東遺構群の井戸474の北東で検出された。２間×３間の総柱の建物跡で、梁間3.5m、桁行4.6mである。検出面の標高はT.P.+1.4mを測る。柱穴は30～40cm程度の不整円形で、埋土は灰色シルトに第14層の明青灰色シルトがブロック状に混じるのを基本とする。Pit831やPit508では柱痕跡がピット底面に沈み込む様子が確認できる。

掘立柱建物跡14　東遺構群で検出された２間×２間以上の建物で、東半部は調査区外である。検出面の標高はT.P.+1.4mを測る。柱穴は30～40cm程度の円形もしくは不整円形である。Pit760やPit825などは柱痕跡が沈みこむ様子が観察できる。Pit845からは礎板が検出されている。

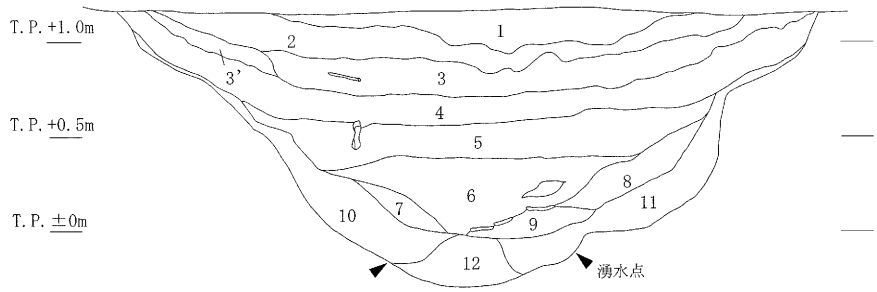
掘立柱建物跡15（第19図）　西遺構群で検出された。検出面はT.P.+1.4mである。調査区外へ続くため全体規模は不明であるが、２間×２間である。柱穴は20cm程度の円形か略方形である。

その他の遺構

自然流路470　東遺構群の南東端で北東―南西方向に流れる流路である。幅は４m以上、深さ1.5m以上を測る。北の肩部から滑石製の子持勾玉が出土している（図版18）。

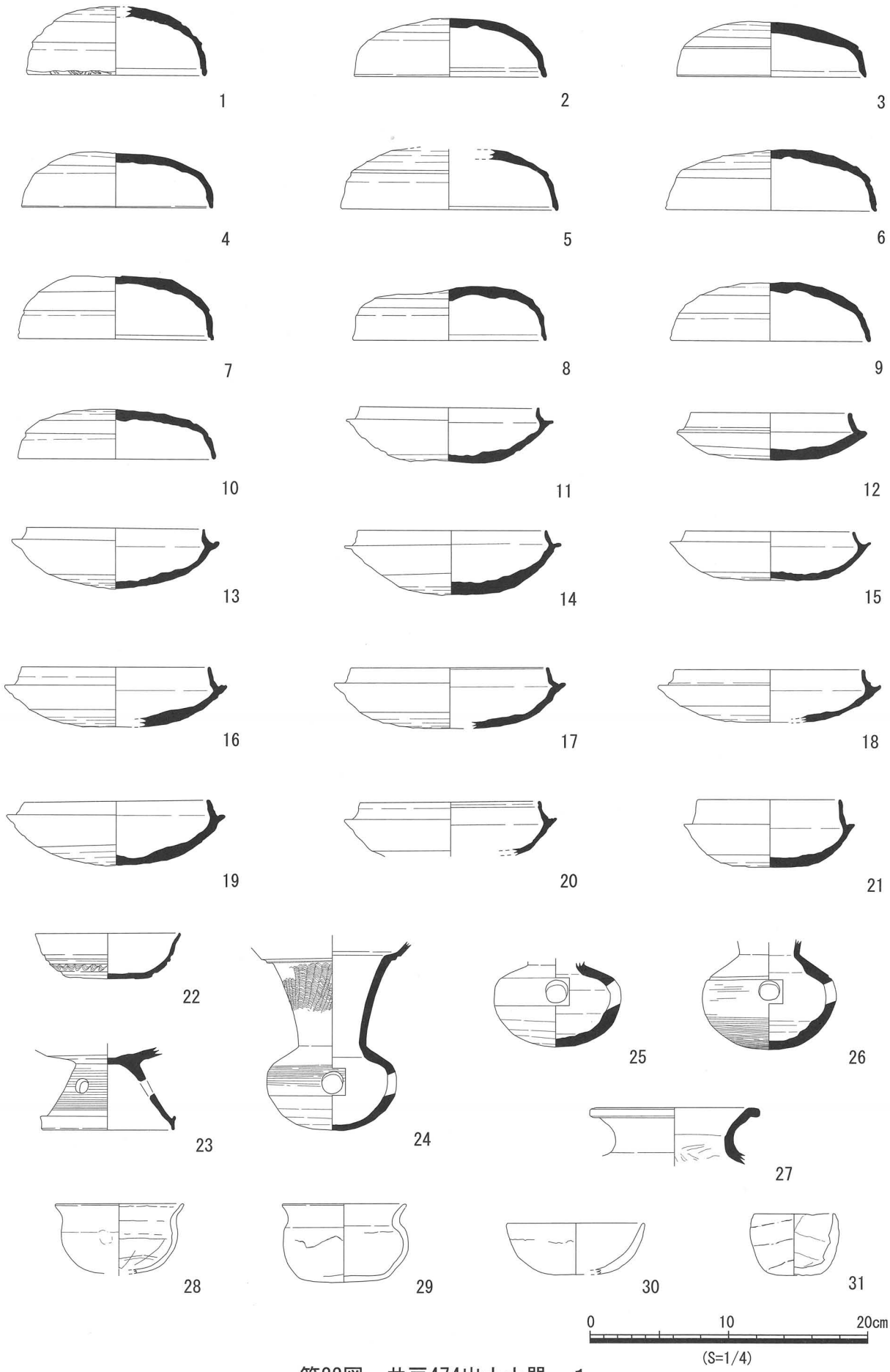
溝495（図版18）　東遺構群の北部で検出された幅50cm、深さ20cmの溝で北半は調査区外である。埋土は灰色シルトで上、下層に分けられる。下層は５世紀後半でU字形土製品が出土している。

井戸643（図版18）
西遺構群北部で検出された井戸で、径1.5m、深さ１mを越える。埋土は暗灰色粘土に青灰色粘土のブロックが混ざる。韓式系土器が出土している。また底面からは須恵器とともにカゴが検出された。

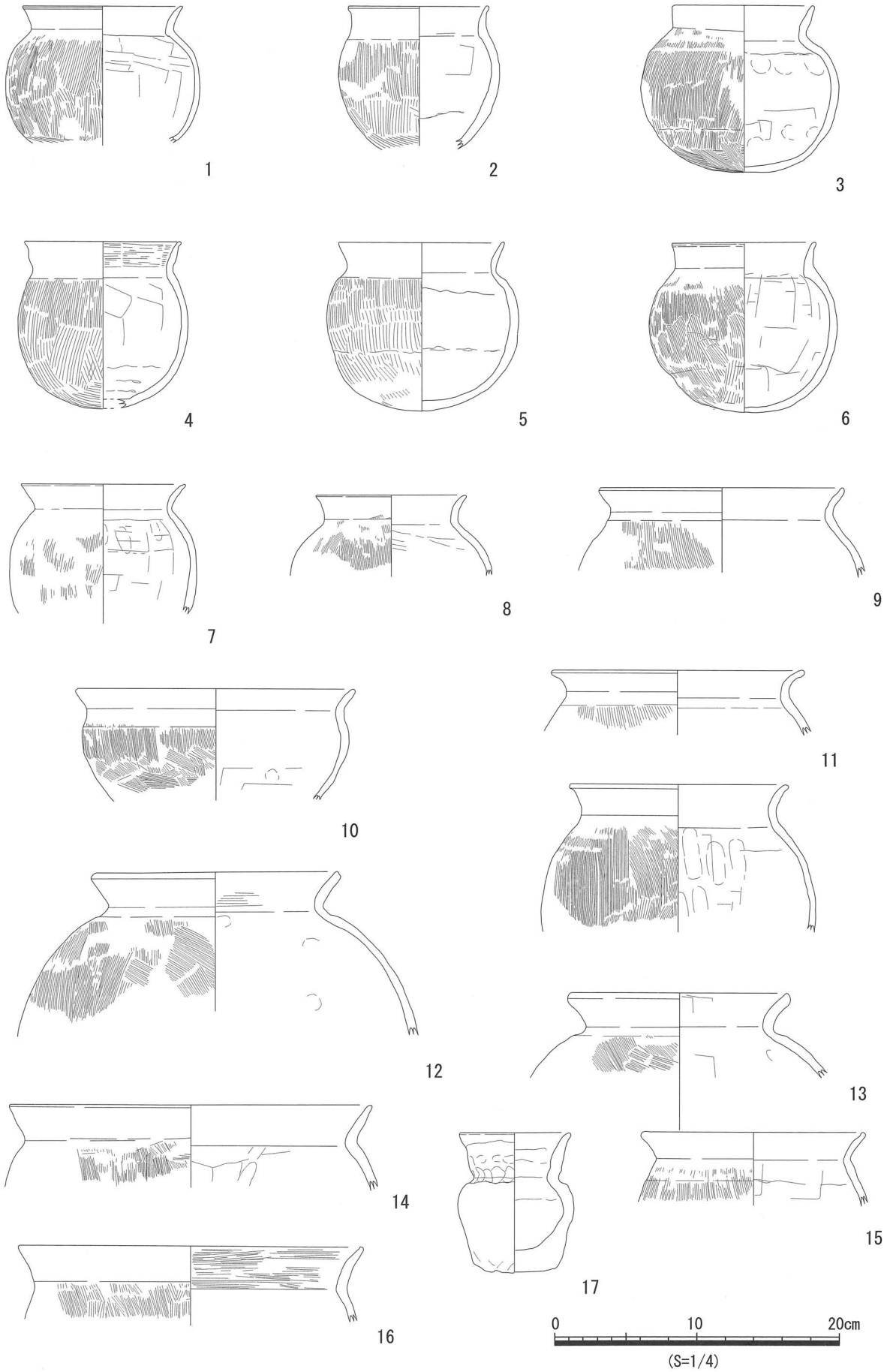


1：2.5YR4/1黄灰色粘質シルト
2：2.5YR4/2案灰黄色粘質シルト（植物遺体含む）
3：5Y5/1灰色粘質シルト（3'：5Y5/1灰色砂混じり粘質シルト）
4：5Y4/1灰色粘土
5：7.5Y3/1オリーブ黒色粘質シルト（粗粒砂少量混じる）
6：7.5Y3/1オリーブ黒色粘土（５より粘性が強い）
7：7.5Y3/2オリーブ黒色粘土（砂礫を少量含む）
8：5Y3/1オリーブ黒色粘土（有機物の腐食が帯状にみられる）
9：10Y3/1オリーブ黒色粘土
10：7.5Y4/1灰色粘土（粗粒砂をブロック状に含む）
11：10Y5/1灰色粘質シルト（2.5Y3/1オリーブ黒色粘土をブロック状に含む）
12：2.5Y3/1オリーブ黒色粘混じり2.5Y7/2灰白色粗粒砂

第21図　井戸474土層断面図



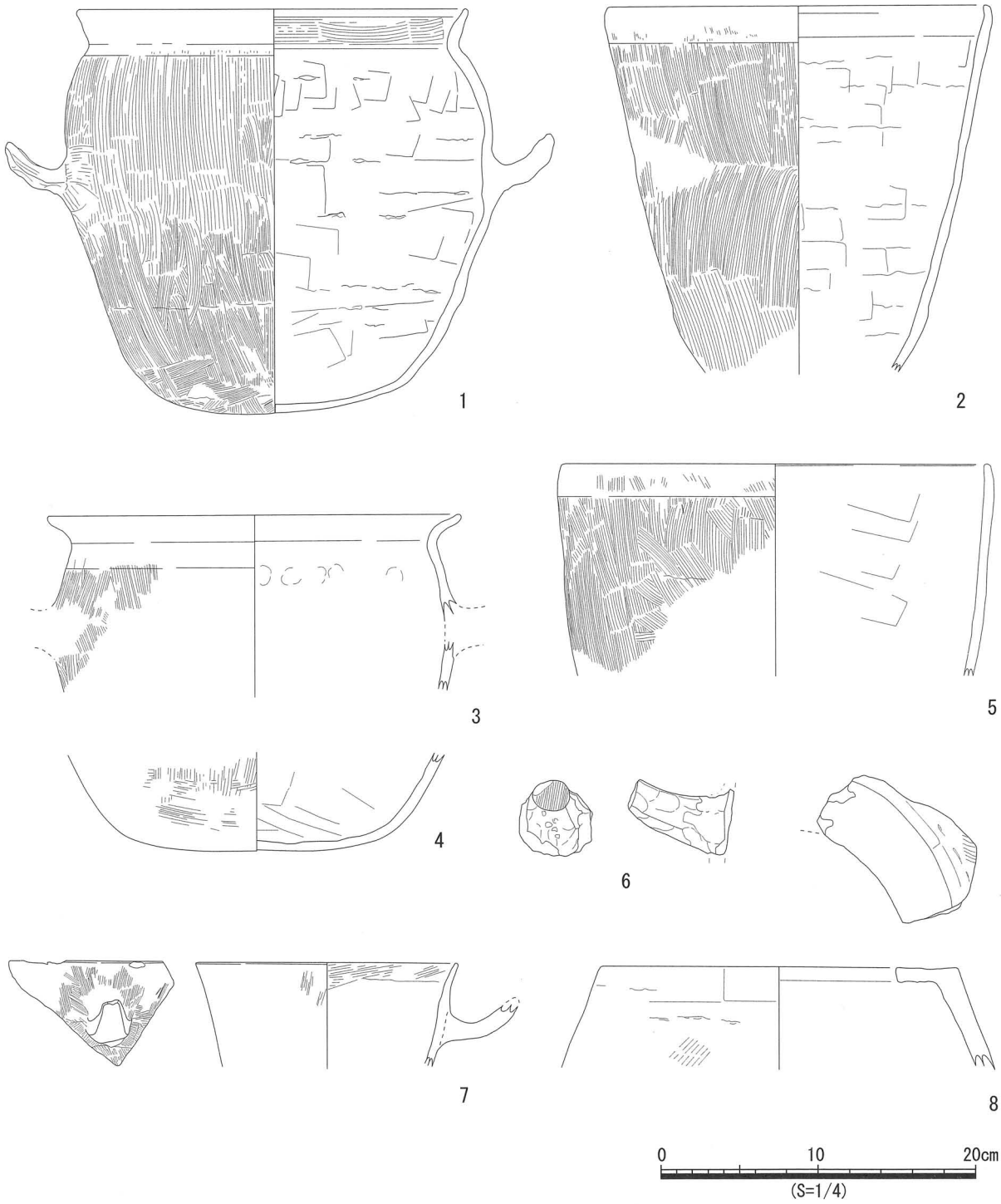
第22図　井戸474出土土器・1



第23図　井戸474出土土器・２

溝546（図版18）　D-1区の溝902と同じで、東遺構群を東西に流れる。幅は広い部分で0.84mを測り、埋土は灰色シルトである。上層は6世紀で下層は5世紀後半に属する。

井戸474（第21図、図版17）　東遺構群の掘立柱建物跡13の南東で検出された長軸5.5m、短軸4.2mを測る大型の土坑である。深さ1.5mに達し、最深部は湧水点となる砂層まで掘削されている。検出面はT.P.+1.2mである。掘方は鉢形を呈し二段に掘り込まれている。埋土は灰色およびオリーブ黒色系の粘土で、上・中・下層に分かれる。井戸枠は検出されていない。遺物は中層の4層



第24図　井戸474出土土器・3

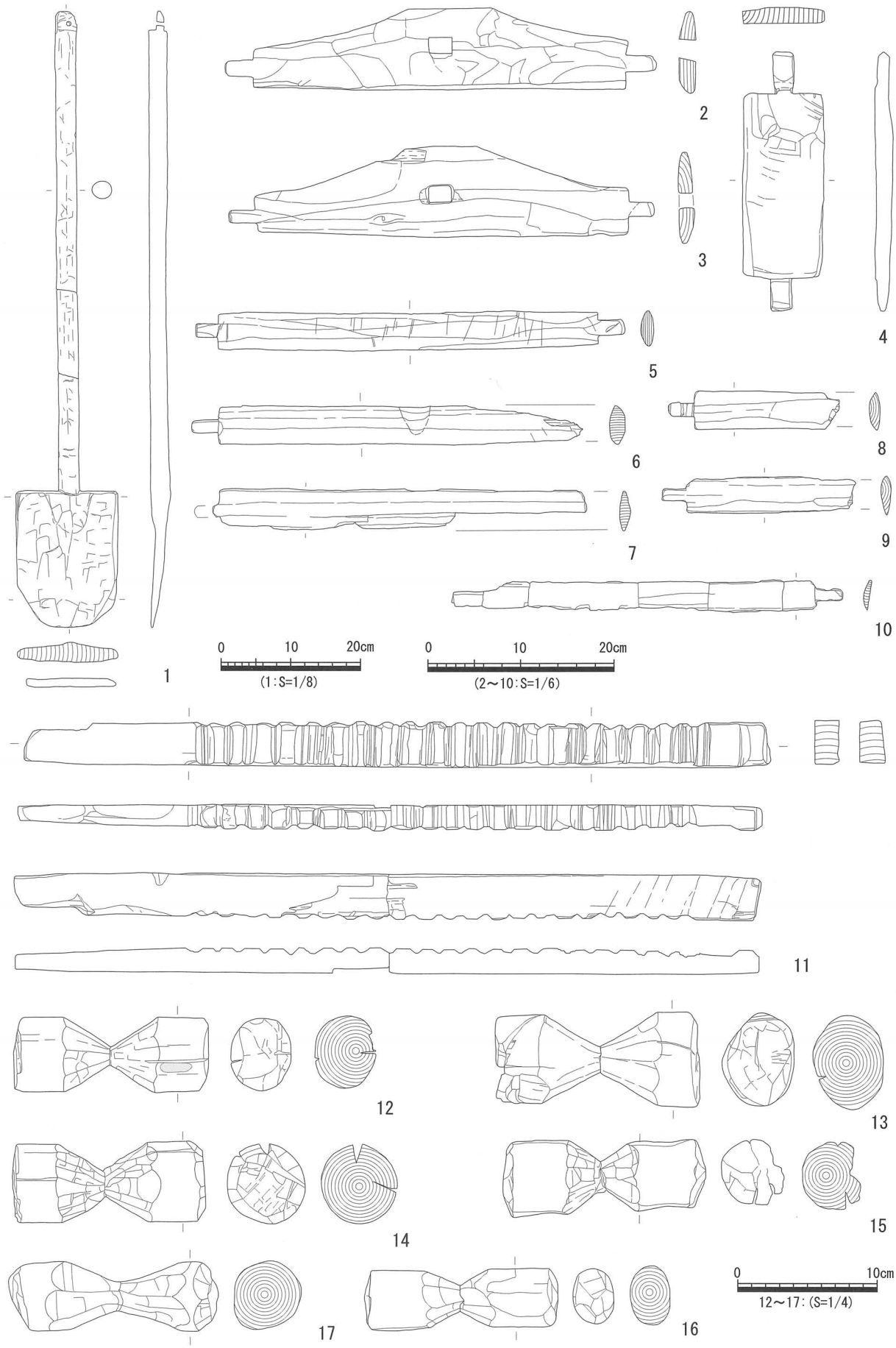
～６層を中心に土師器、須恵器、土製品などと供に多量の木製品が出土している。他にひょうたん、桃の種が出土している。出土須恵器から所属時期は６世紀後半である。

第22図～第24図は井戸474出土土器である。多くは４～６層からの出土である。第22図21は時期的に古いが、他は概ねTK10型式段階のものである。このうち同図22は胴部に波状紋を施す坏身で底部外面はヘラケズリされており脚部がつくものではない。同図28～31は土師器の小型土器である。第24図17は表面に朱色の化粧土を塗っている。器壁は厚く、作りは荒い。外面はユビオサエが明瞭である。また底部外面には砂礫が混入している。第24図７は把手付鉢、同図８は移動式カマド破片である。

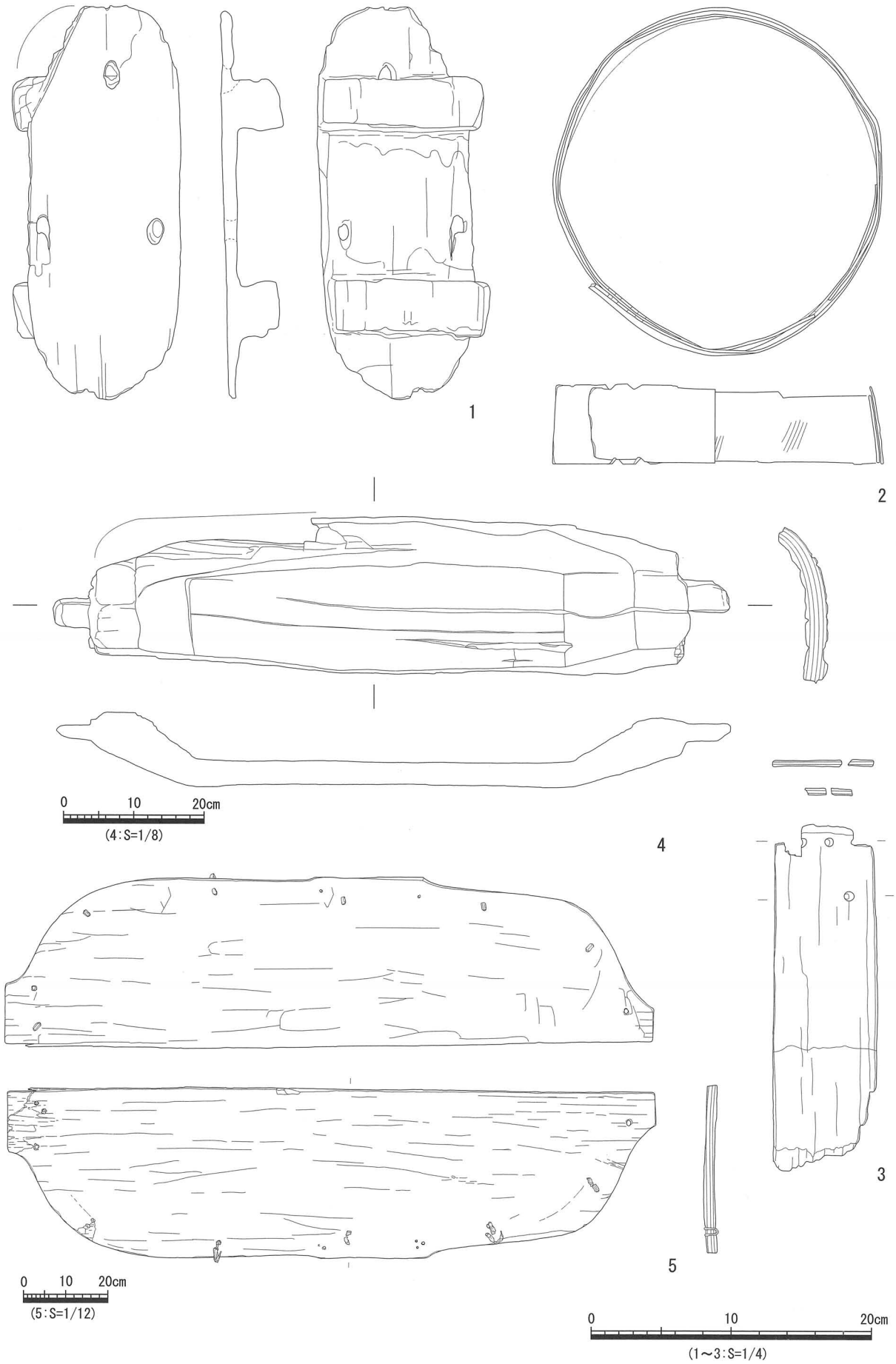
木製品は農具、容器、下駄、建築部材、祭祀具が出土している（第１表）。

第26図は農具である。１は一木鋤、２～10は大足の各部材である。３、４、６はコウヤマキが利用されている他はモミ属、ヒノキ、スギが利用されている。11はアカガシ亜属製の棒状品で、幅広面と幅狭面のそれぞれ一方に刻みを入れており、目盛板の可能性がある。刻目の間隔はややばらつきがあり、幅広面では1.6～1.8cm（平均1.7cm）、幅狭面では1.5～2.0cm（平均1.7cm）で幅狭面の方がややばらつきが大きい。刻目の谷部は刃物痕が明瞭であるのに対し山部は上面がこすれたように曲面をもっており、谷部にもじり編みの縦糸をわたして使用していたような感じはしないので未製品であろうか。12～17はツチノコである。６点中３点がアカガシ亜属製である。

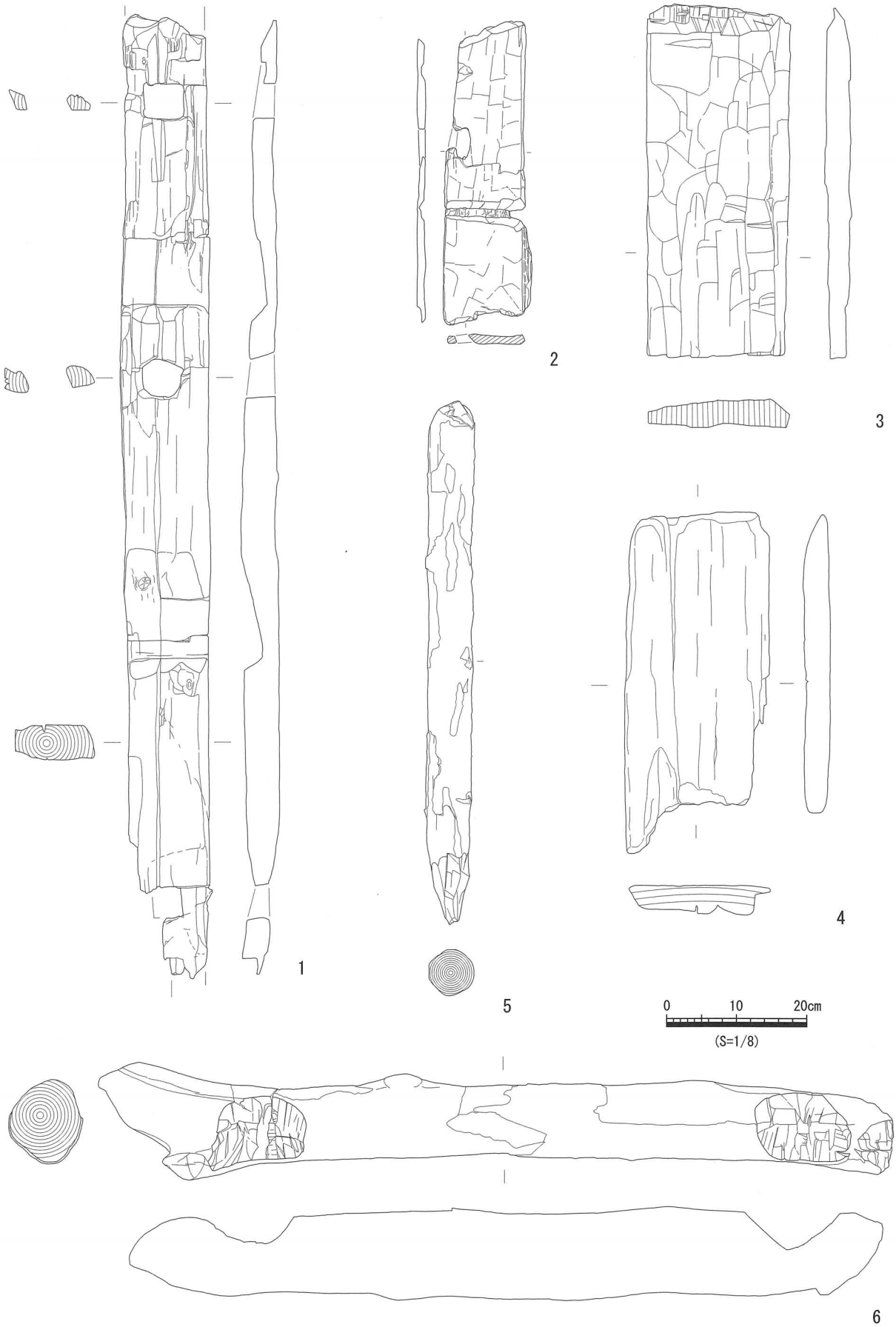
第27図１は下駄である。ヒノキの柾目材を利用している。２は曲物の側板である。厚さ３～４mm程度のヒノキの板目材２枚を重ねて曲げている。上面と下面にV字の切れ込みを入れているが、検出時には緊縛されてはいなかった。未製品であろうか。外面および内面は刀子のような刃物で削った加工痕が上下辺に対して約45°程度の角度をもってみられる。３も側板である。端部を接合のために孔を開けている。４はモミ属製の槽である。５はヒノキ製の曲物底板である。６ヵ所の孔に桜皮が残存している。側板とは段や切り込みなどを設けず平坦面で接合するタイプである。第28図１は建築部材を梯子に転用したものでツブラジイの芯持材を利用している。第29図は斎串である。井戸474内からは４～５層を中心に30以上出土している。斎串という名称には問題があるが、律令期のいわゆる斎串とよばれるものと形態的に同様のものである。遺存状態の悪いものが多いが、先端を両側辺から、もしくは片方から切りこんで尖らせている。樹種の判明しているものは５点ともヒノキである。木取りは図示した25点中、柾目：板目が11：14でどちらかに偏ることはないようである。加工痕は同図12に表面を刀子のような刃物で成形した痕跡が認められるが、多くは木目に沿って裂いたままで、表面上は縦方向の凹凸をそのまま残し、断面は細長い三角形となる。６世紀後半に属する斎串が一つの遺構からまとまって出土しているのは珍しいといえる。



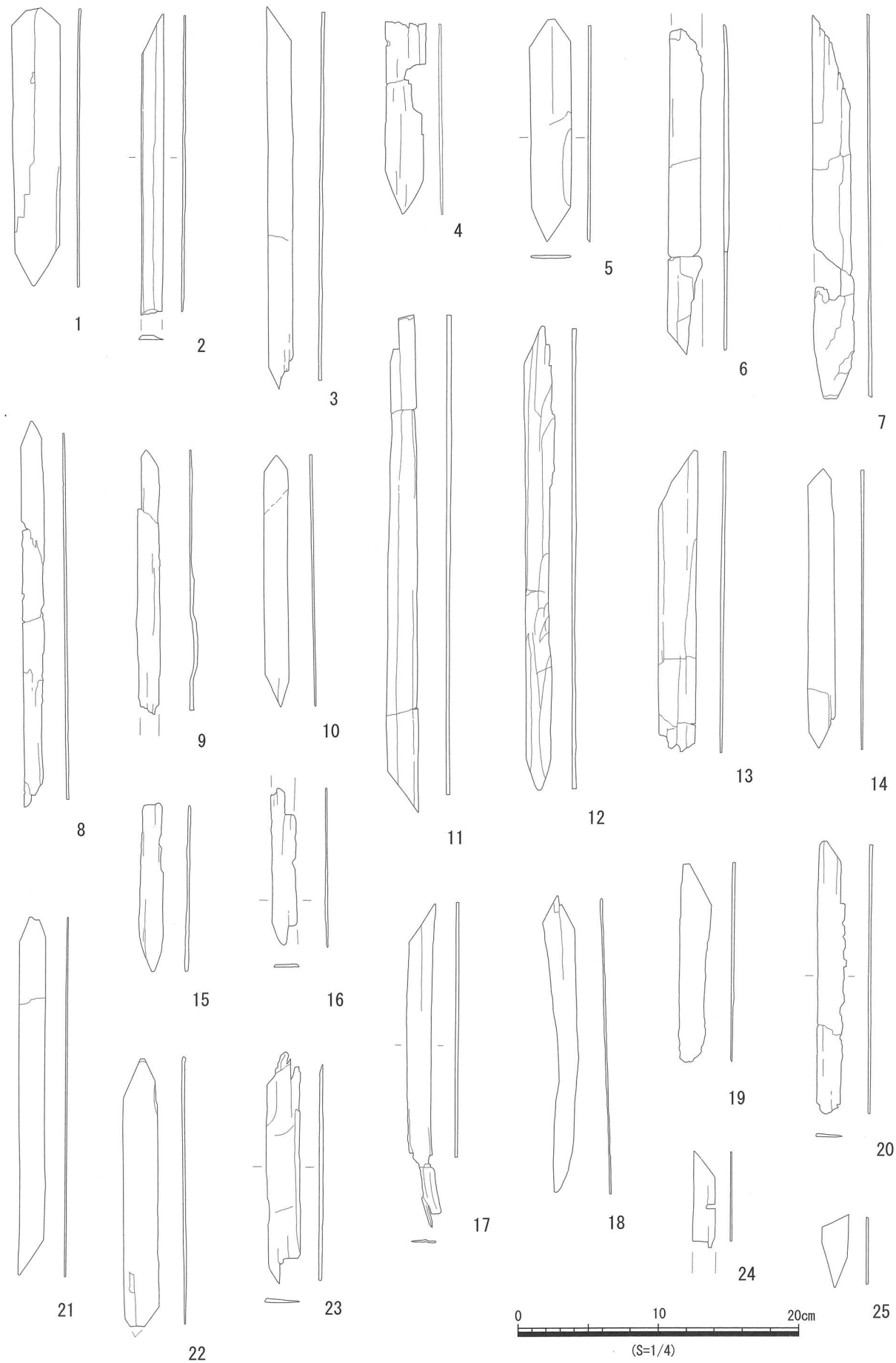
第25図　井戸474出土木製品・1



第26図　井戸474出土木製品・2



第27図　井戸474出土木製品・3



第28図　井戸474出土木製品・4

第1表　D-2区井戸474出土木製品一覧表

番号	挿図番号	製品名	層位	法量（残存値，単位：cm）			木取り	樹種	遺物登録番号	備考
				長さ	最大幅	最大厚				
1	25-1	一木鋤	5層	85.9	14.6	2.9	柾目	アカガシ亜属	3434	
2	25-2	大足横枠	4層	46.4	8.6	1.9	板目	スギ	2940	
3	25-3	大足横枠	4層	45.7	9.7	1.7	板目	コウヤマキ	2939-2	
4	25-4	大足足板	4層	22.8	8.7	1.7	柾目	コウヤマキ	3037	
5	25-5	大足横桟	4層	46.0	3.8	1.5	板目	針葉樹	3033	
6	25-6	大足横桟	4層	41.9	4.1	1.8	柾目	コウヤマキ	3034	
7	25-7	大足横桟	4層	40.1	4.5	1.2	柾目	モミ属	3031	
8	25-8	大足横桟	4層	18.3	4	1.3	板目	ヒノキ	3123	
9	25-9	大足横桟	4層	20.8	3.9	1.1	板目	ヒノキ	3042	
10	25-10		4層	41.9	3.2	0.9	柾目	スダジイ	3036	
11	25-11	目盛板	5層	53.4	3.1	1.8	柾目	アカガシ亜属	3432	
12	25-12	ツチノコ	4層	13.8	4.5	4.3	芯持	アカガシ亜属	3010	樹皮つき
13	25-13	ツチノコ	4層	14.5	6.7	5	芯持	サカキ	1683	
14	25-14	ツチノコ	5層	13.6	5.5	5.4	芯持	ツバキ属	3457	
15	25-15	ツチノコ	5層	14.5	5.3	4.2	芯持	ツツジ科	3459	
16	25-16	ツチノコ	4層	14	4.3	2.9	芯持	アカガシ亜属	3012	
17	25-17	ツチノコ	5層	14.9	5	4.8	芯持	アカガシ亜属	3458	
18	26-1	下駄	4層	27.4	11.7	4.4	柾目	ヒノキ	2939-1	
19	26-2	曲物側板	6層	径19.3	11.3	0.3	板目	ヒノキ	3564	2枚の側板を合せて曲げる
20	26-3	曲物側板	5層	24.8	7.3	0.5	板目	―	3115	
21	26-4	樽	5層	96.2	22.2	9.8	板目	モミ属	3420	
22	26-5	曲物底板	1層	92.5	24.2	1.6	板目	ヒノキ	2941	
23	27-1	梯子	5層	137.4	12.2	5.5	芯持	ツブラジイ	3453	建築部材の転用
24	27-2	板材	5層	43.2	12.6	1.3	追柾目	スダジイ	3460	ほぞ孔あり
25	27-3	板材	6層	50.5	20.1	3.8	板目	ツブラジイ	3563	
26	27-4	板材	4層	24.4	10	1.8	板目	スギ	3038	一部炭化
27	27-5	杭	5層	74.3	6.5	6.5	芯持	アカガシ亜属	3443	樹皮つき
28	27-6	建築部材	5層	133	12.5	10.4	芯持	アカガシ亜属	3450	樹皮つき
29	28-1	斎串	4層	19.7	3.4	0.2	柾目	―	2943	
30	28-2	斎串	4層	21.1	1.6	0.3	柾目	―	2944	
31	28-3	斎串	4層	26	1.8	0.2	板目	―	2945	
32	28-4	斎串	4層	16.5	2.7	0.2	板目	―	3020	
33	28-5	斎串	5層	15.4	2.9	0.2	板目	ヒノキ	3437	
34	28-6	斎串	5層	23.2	3.4	0.3	板目	―	3439	
35	28-7	斎串	5層	26.2	2.6	0.2	柾目	ヒノキ	3448	
36	28-8	斎串	4層	26.8	1.6	0.15	板目	ヒノキ	3013	
37	28-9	斎串	4層	18.4	1.7	0.25	板目	―	3017	
38	28-10	斎串	4層	17.9	1.7	0.15	柾目	ヒノキ	2946	
39	28-11	斎串	4層	35.5	2.1	0.3	板目	―	3025	
40	28-12	斎串	5層	33.1	2.1	0.3	板目	―	3468	加工痕アリ
41	28-13	斎串	5層	20.8	2.7	0.1	板目	ヒノキ	3444	
42	28-14	斎串	5層	19	1.9	0.1	柾目	ヒノキ	3446	
43	28-15	斎串	4層	12.9	1.8	0.2	板目	―	3119	
44	28-16	斎串	4層	15.8	1.8	0.2	板目	―	3118	
45	28-17	斎串	5層	22.9	1.7	0.2	柾目	―	3463	
46	28-18	斎串	5層	21	2.2	0.1	柾目	―	3470	
47	28-19	斎串	4層	14.2	2.1	0.2	板目	―	3016	
48	28-20	斎串	5層	21.1	1.9	0.25	板目	―	3465	
49	28-21	斎串	5層	24.8	1.8	0.1	柾目	―	3445	
50	28-22	斎串	5層	19	2.5	0.2	柾目	ヒノキ	3466	
51	28-23	斎串	5層	14.2	2.4	0.3	板目	―	3474	
52	28-24	斎串	4層	6.5	1.6	0.2	柾目	―	3021	
53	28-25	斎串	5層	4.9	1.8	0.1	柾目	―	2942	

第3章　まとめ

以上雑駁ながら古墳時代中・後期遺構面について主要遺構について述べてきた。遺構の所属時期や掘立柱建物跡の確定などの詳細については本報告に委ねるが、ここでは現段階での所見として調査成果をまとめておきたい。

遺物の整理作業の進展によって明確になるが、D-1区の竪穴住居跡の所属時期は5世紀後半～6世紀後半までに属する。これらのうち竪穴住居跡1・5・9・14・16・18・19・25は5世紀後半に属し、竪穴住居2・3・4・8・10・11・15・20・23は6世紀前半から後半に属する。各竪穴住居跡のカマドは、竪穴住居跡15が西壁に設けられ例外的であるが、北壁・北東壁に設けられるのを主体とし時期による差異はみられない。掘立柱建物跡は時期の詳細が不明確であるが、全てのピットに礎板が入っていたD-2区西遺構群の掘立柱建物跡10と東遺構群の掘立柱建物跡12が5世紀後半に属し、D-2区のそれ以外の掘立柱建物跡は6世紀前半～後半に属する。D-1区の掘立柱建物跡は掘立柱建物跡7および8を除き概ね6世紀代に属するが今後の整理作業で5世紀に属する掘立柱建物跡が確認される可能性は大きい。

掘立柱建物跡と竪穴住居跡の切り合い関係では、①：竪穴住居跡16・18→竪穴住居跡19→掘立柱建物跡2→竪穴住居跡20という変遷が追え、また②：竪穴住居跡14→竪穴住居跡10→掘立柱建物跡1、③：竪穴住居跡8→掘立柱建物跡6、④：竪穴住居跡3→掘立柱建物跡5というように、大局的には掘立柱建物跡が竪穴住居跡より後出するが、①のように掘立柱建物の後に再び竪穴住居が構築されており6世紀代も竪穴住居と掘立柱建物で構成される集落を形成していた。

このことからD-1区は、D-2区の西遺構群を含め、竪穴住居跡と掘立柱建物跡を幾度も建て直しながら百数十年間居住域として土地利用されていたことが分かる。D調査区の東にあるC調査区はMT15型式段階（6世紀前半）を境に竪穴住居跡がみられなくなり、掘立柱建物跡が主体になるのに対し、D調査区は6世紀代も竪穴住居と掘立柱建物跡が主体となる集落構成であり続ける点でC調査区の集落とは異なることを指摘することができる。一方井戸474を検出したD-2区東遺構群はC調査区の続きと考えられ、井戸474出土の斎串などの祭祀遺物は、C調査区の集落構成の中で理解される必要があろう。

またD-1区の西端部は集落を区画する溝900を検出した。これはD調査区北西にある発進立坑部の調査で検出された溝11と同一である。この溝より西側は庄内式～布留式期の砂層が厚く堆積しており、古墳時代中・後期の集落はこの溝900を西限とすることが明確になった。

以上のような古墳時代中・後期集落の大まかな様相を、今後本報告へ向けて詳細に検討するとともに、引続き行われるE区・F区の調査の進展と合わせてその特徴を明らかにしていきたい。

最後になりましたが、現地調査ならびに遺物整理、概要作製に際しまして多くの方々からご協力いただきました。深謝の意を表します。

報告書抄録

ふりがな	しとみやきたいせきはっくつちょうさがいよう・ご
書名	蔀屋北遺跡発掘調査概要・V
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	岡田　賢
編集機関	大阪府教育委員会　文化財保護課
所在地	〒540-8571　大阪府大阪市中央区大手前２丁目　TEL. 06-6941-0351
発行年月日	2006年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しとみやきたいせき 蔀屋北遺跡	しじょうなわてし しとみや すな 四條畷市蔀屋・砂	27229	7（51）	34°44′25″	135°37′52″	平成15年12月9日 ～ 平成16年12月17日	2010㎡	なわて水環境保全センター建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
蔀屋北遺跡	集落跡 生産域	古墳時代	竪穴住居跡25棟 掘立柱建物13棟以上 大溝　井戸　土坑	土師器・須恵器・韓式土器・石製品（紡錘車・滑石製勾玉など）・鉄器（鎌・刀子など）・ガラス玉・木製品（農具・祭祀具など）・自然遺物（馬骨・桃種など）	5世紀後半～6世紀代のカマドをもつ竪穴住居跡群、掘立柱建物群、井戸、溝などで構成される集落跡

蔀屋北遺跡発掘調査概要・V

発行　大阪府教育委員会

〒540-8571　大阪市中央区大手前２丁目　℡06-6941-0351

発行日　2006年３月31日

印刷　株式会社 中島弘文堂印刷所

大阪市東成区深江南２－６－８　℡06-6976-8761

図　　版

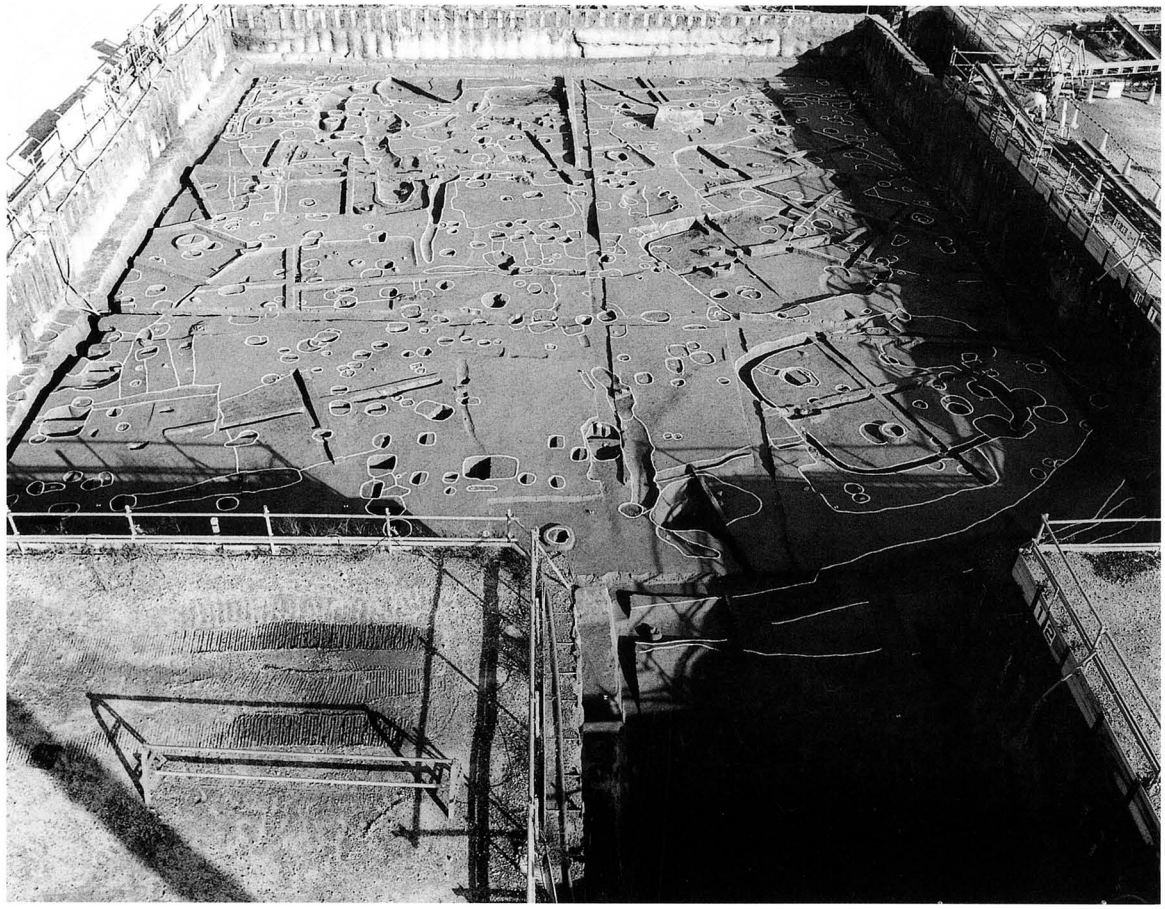
D-1区古墳時代中・後期遺構面垂直写真

図版 1

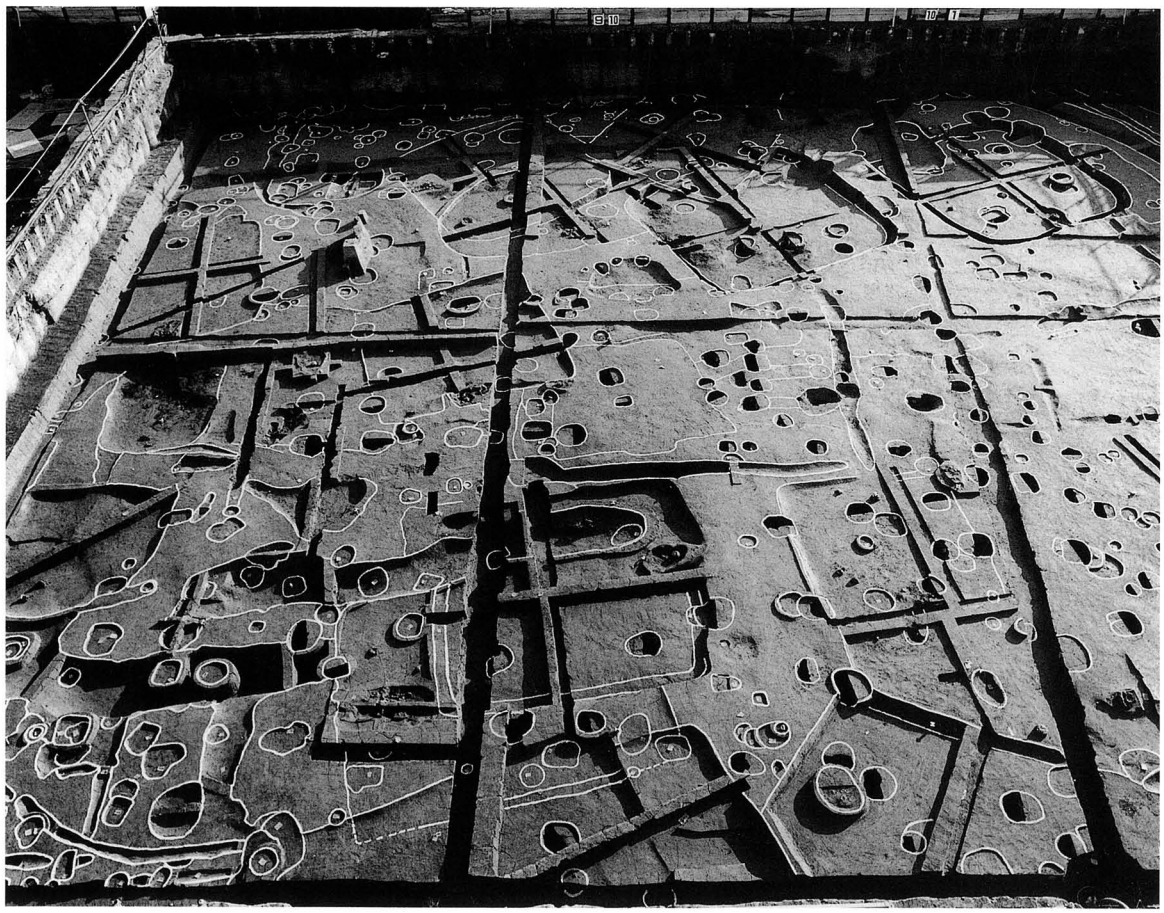
調査区全景

調査区遠景（南より）

調査区遠景（東より）

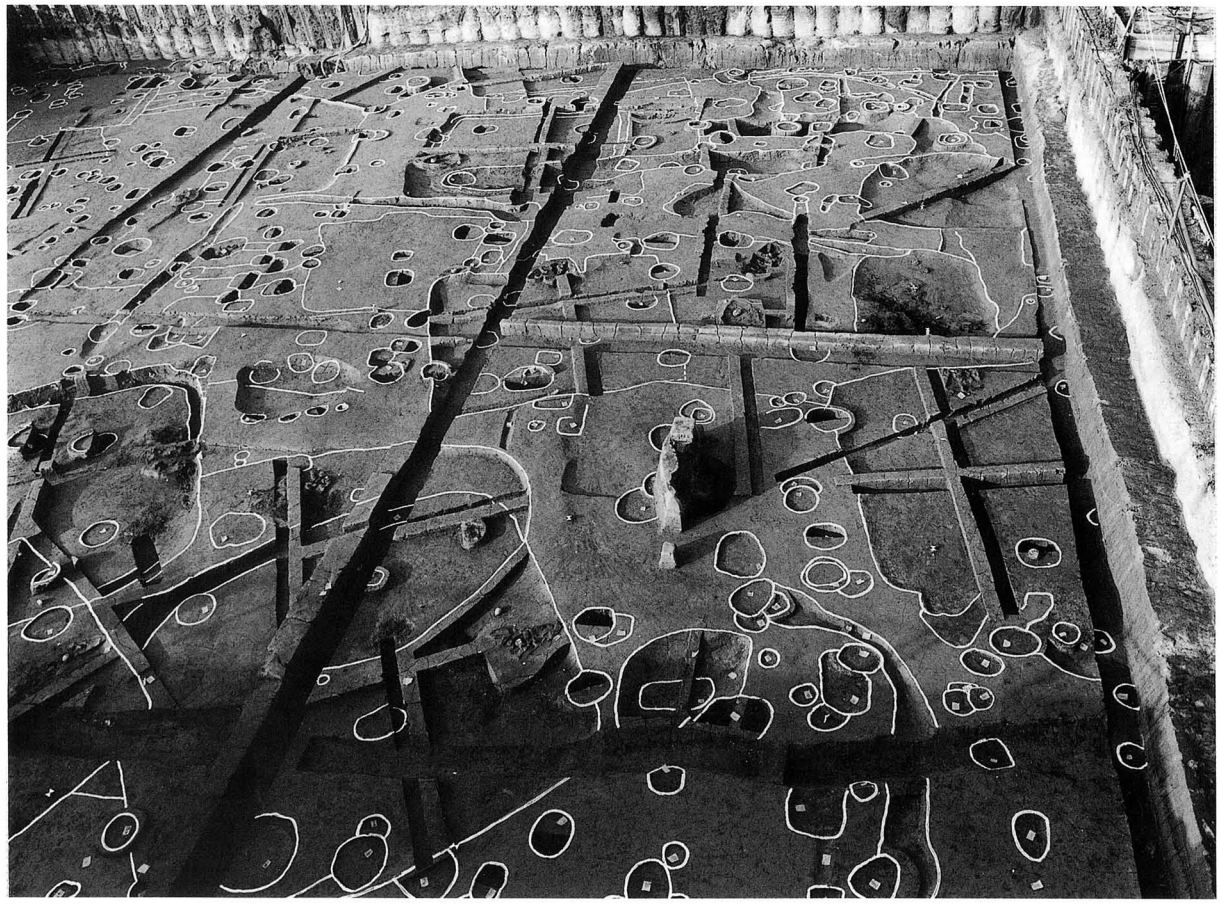


D-1区古墳時代中・後期遺構面全景（西より）

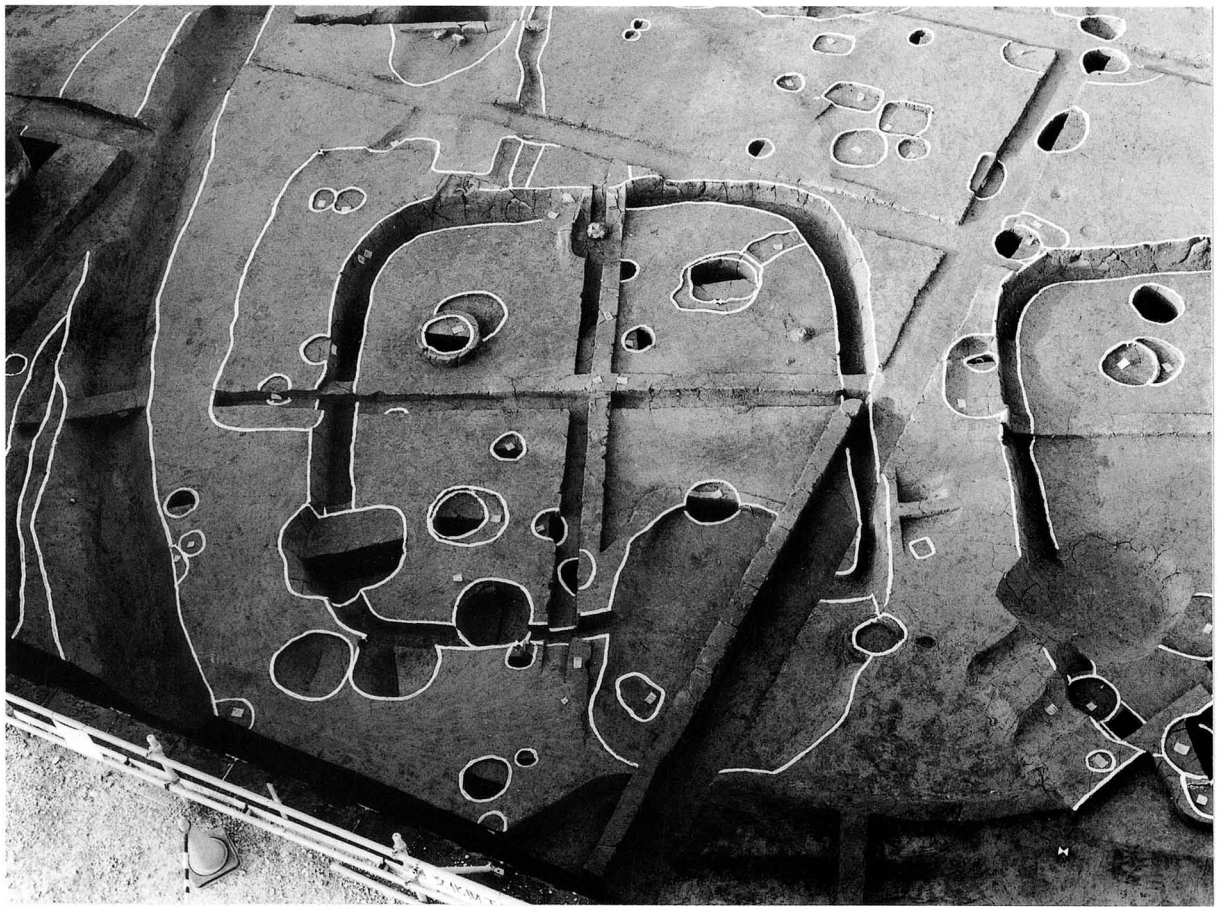


D-1区古墳時代中・後期遺構面全景（北より）

D-1区古墳時代中・後期遺構面全景（南より）

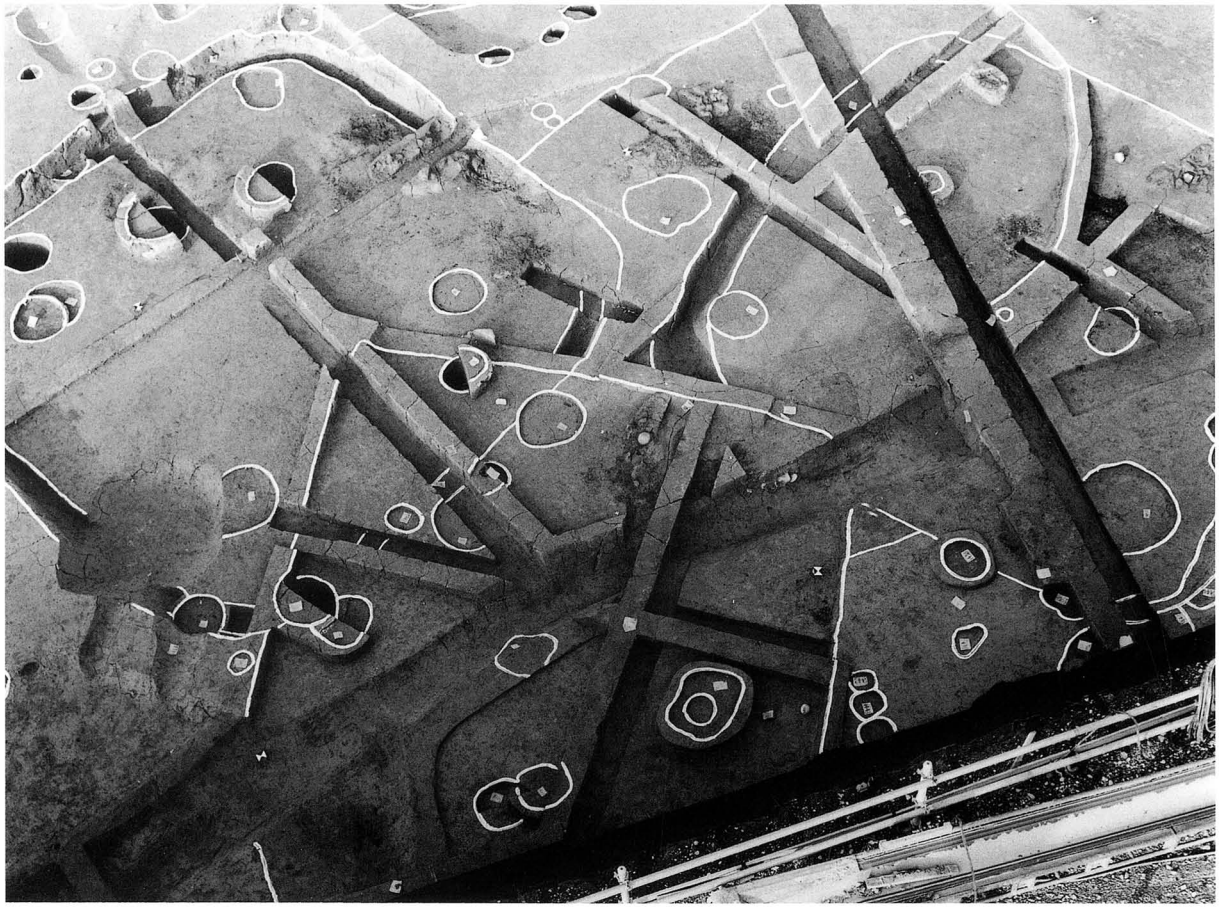


D-1区古墳時代中・後期遺構面全景（南より）



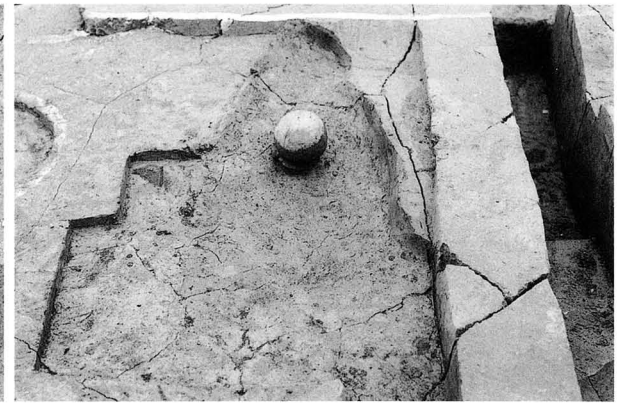
竪穴住居跡１・２

左上：竪穴住居跡２カマド検出状況
右上：同完掘状況
左下：竪穴住居跡１カマド



竪穴住居跡３・４・５・８

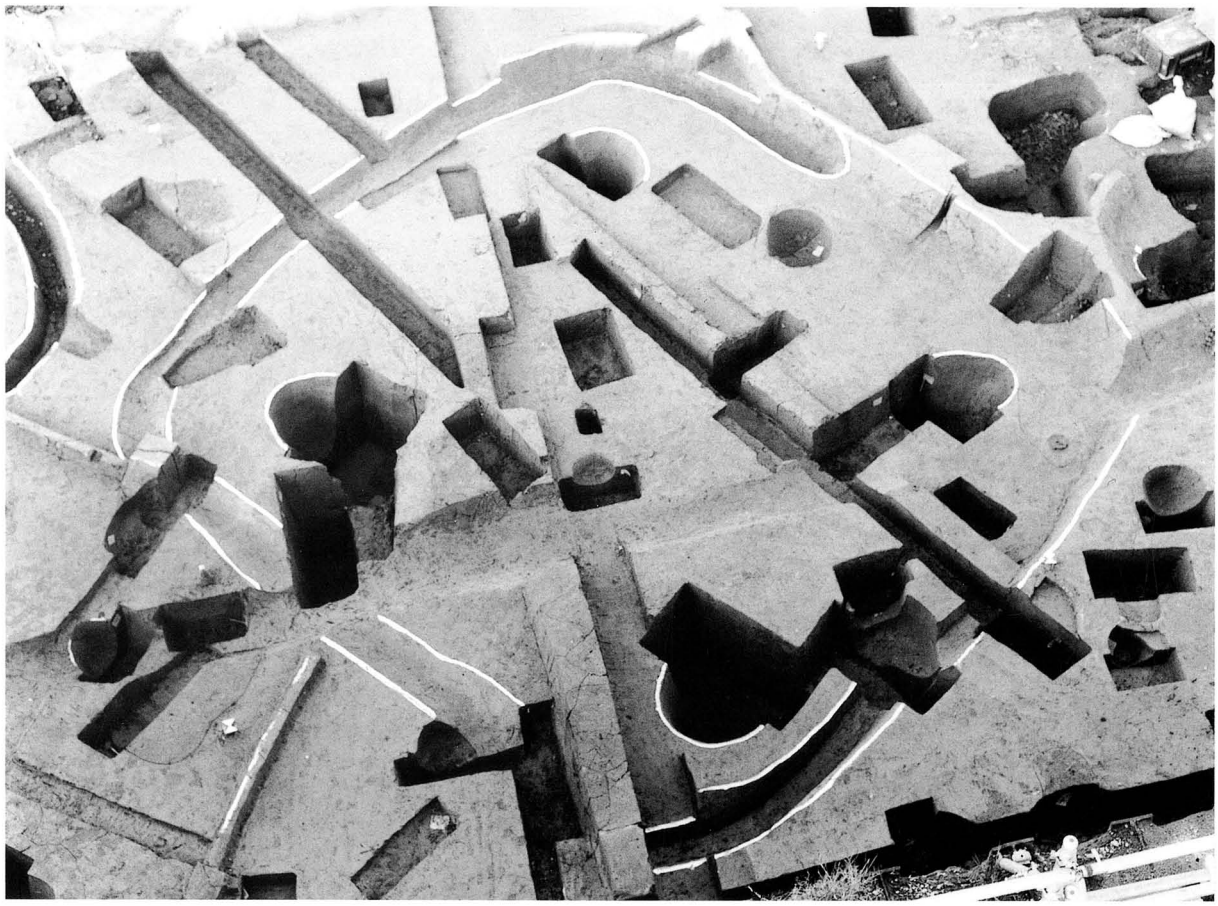
竪穴住居跡４床面土器出土状況



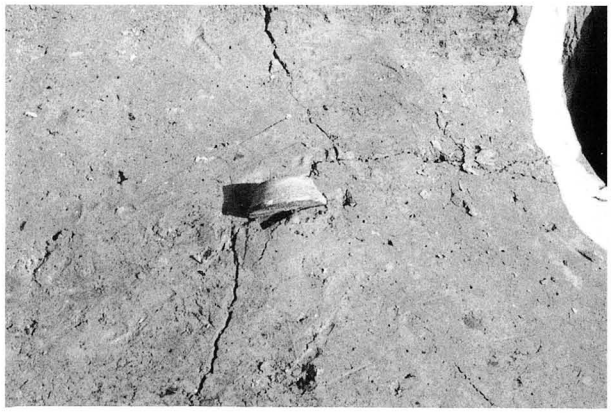
竪穴住居跡４カマド

竪穴住居跡４床面下土器出土状況

竪穴住居跡５カマド



竪穴住居跡８

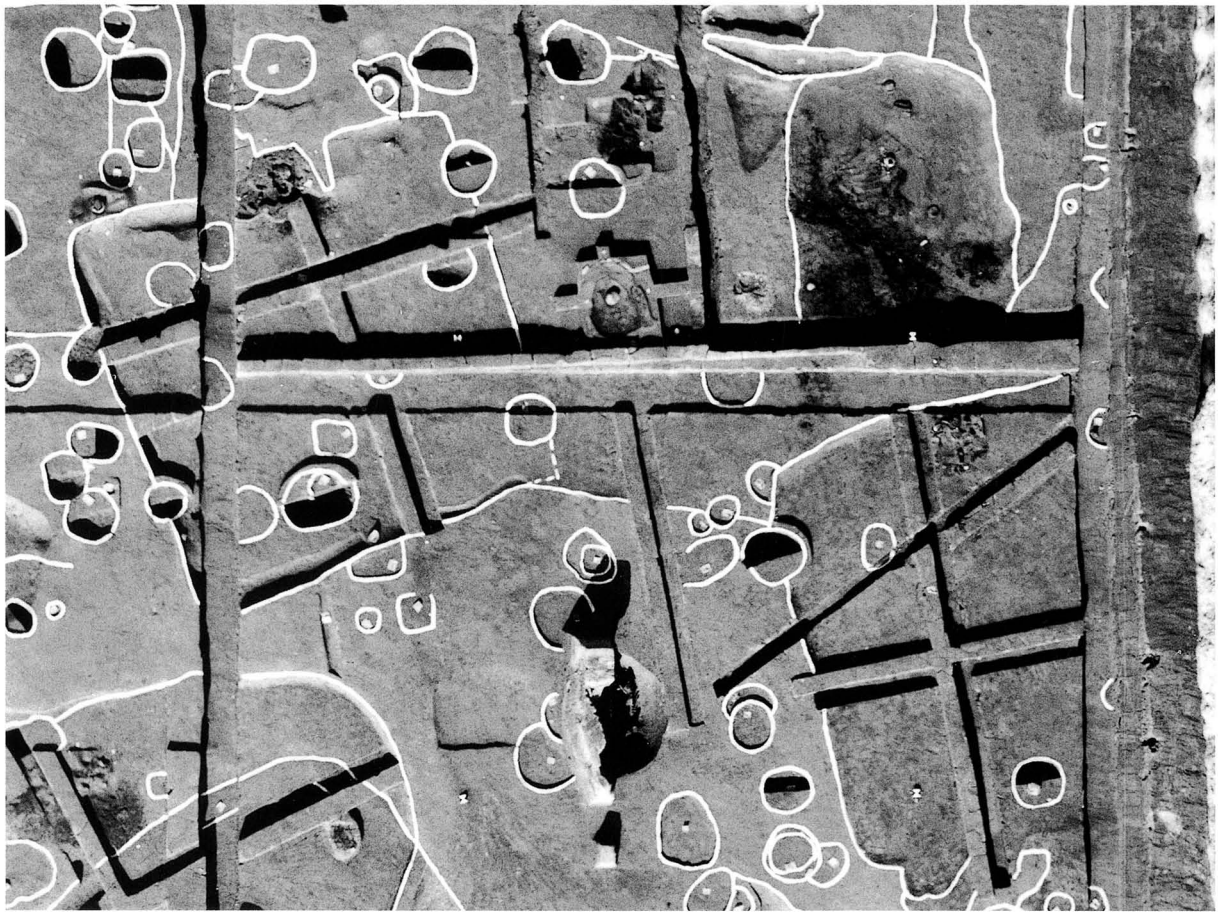


竪穴住居跡８床面紡錘車出土状況

竪穴住居跡８カマド

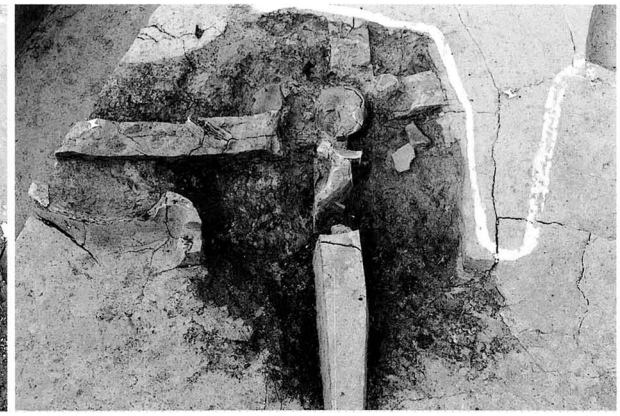
竪穴住居跡８カマド焚口近接（北壁）

竪穴住居跡８カマド焚口近接（南壁）



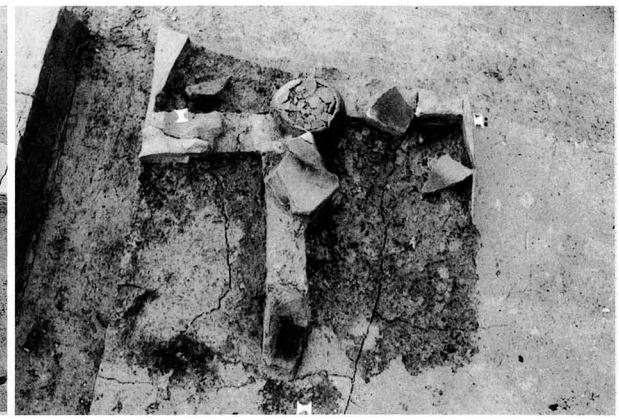
竪穴住居跡18・19・20・23

竪穴住居跡18カマド

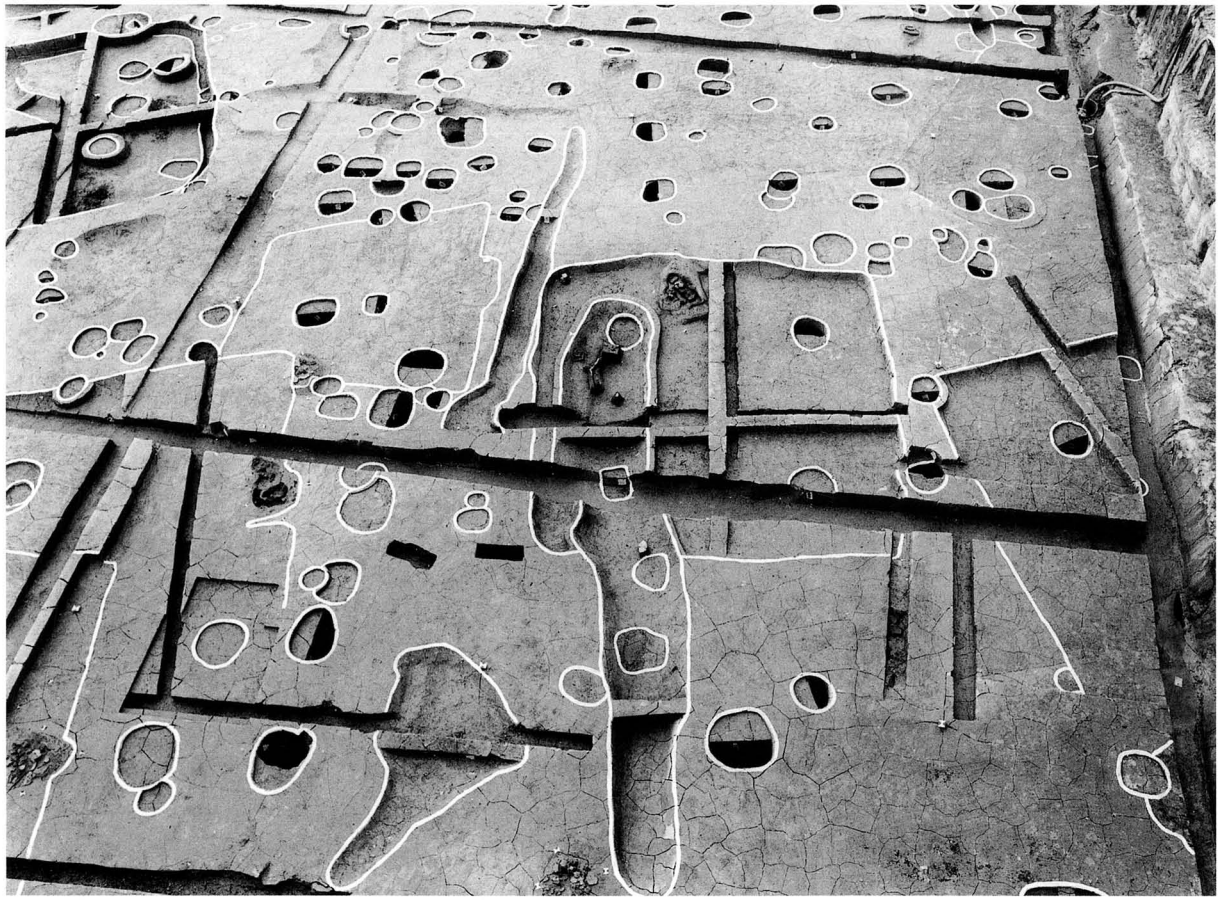


竪穴住居跡19カマド

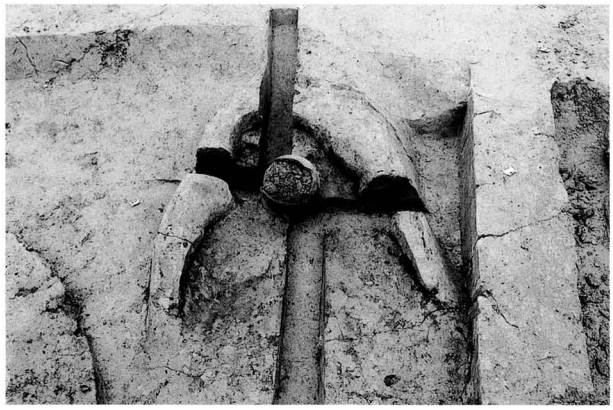
竪穴住居跡20カマド



竪穴住居跡23カマド



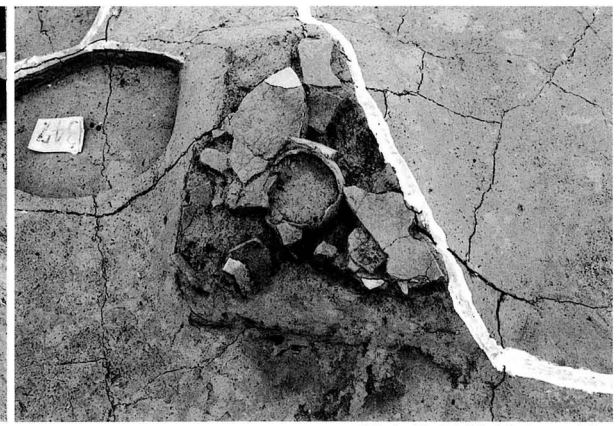
竪穴住居跡10・15・16・19（東より）



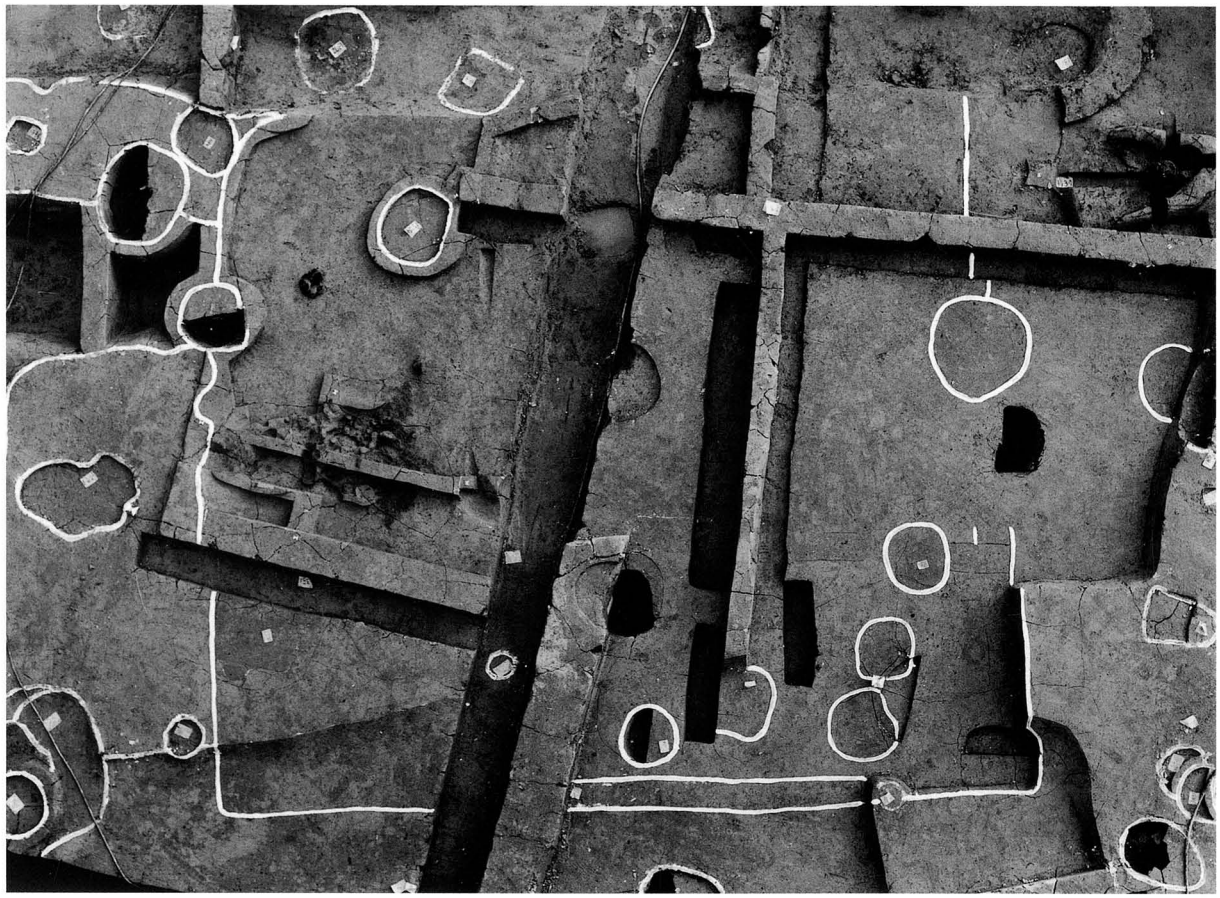
竪穴住居跡15カマド

同左（近接）

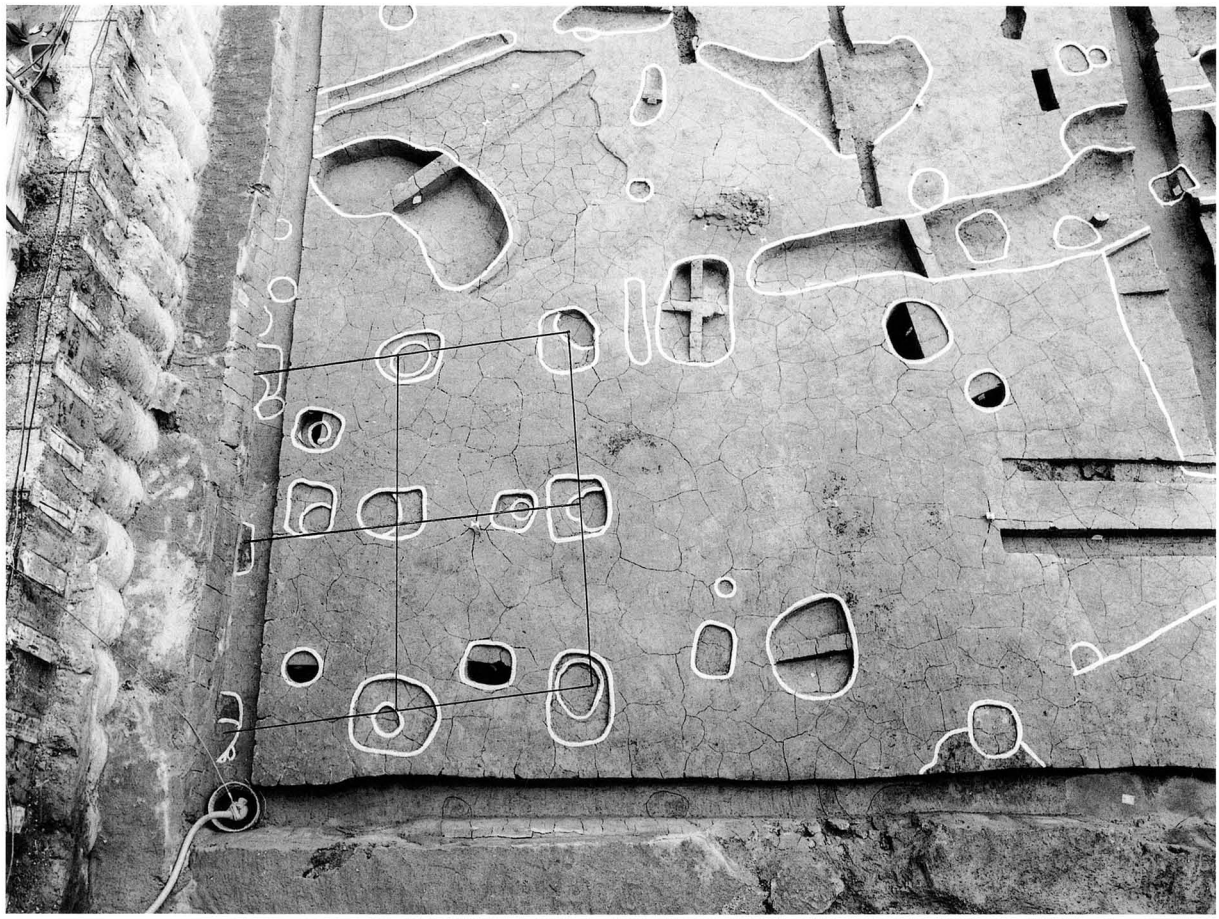
竪穴住居跡25カマド



竪穴住居跡16カマド



竪穴住居跡25（北より）

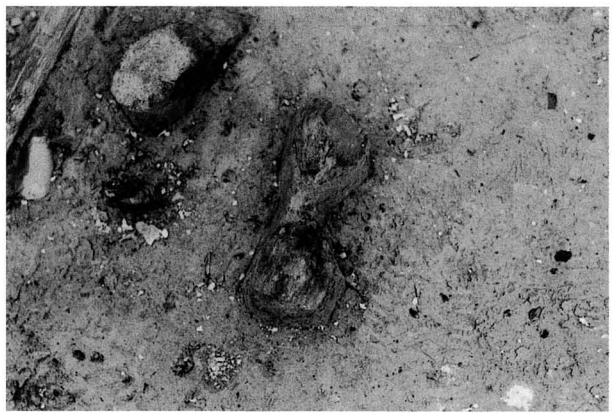


掘立柱建物跡３（北より）

溝900　６層遺物出土状況（西より）

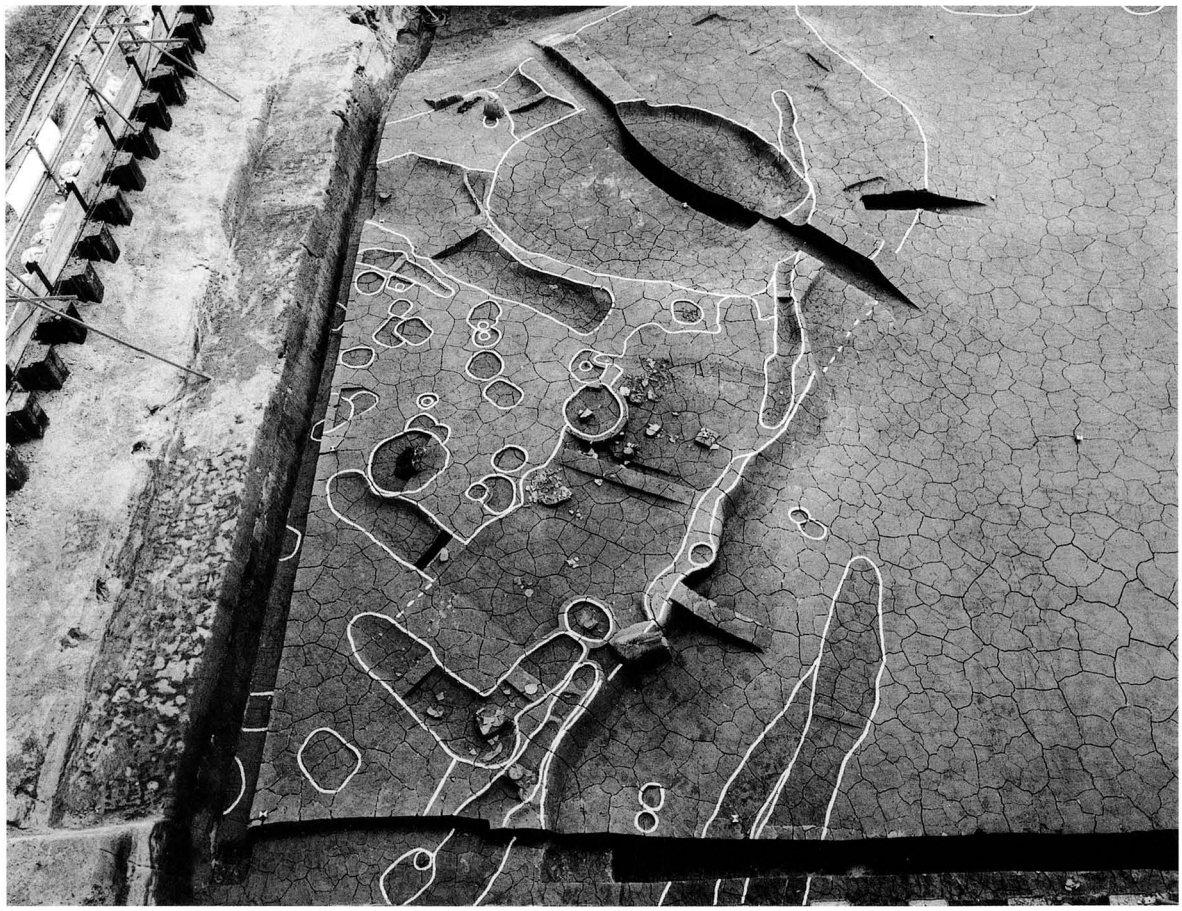
溝900　馬下顎骨出土状況

溝900　馬骨（中手骨）出土状況

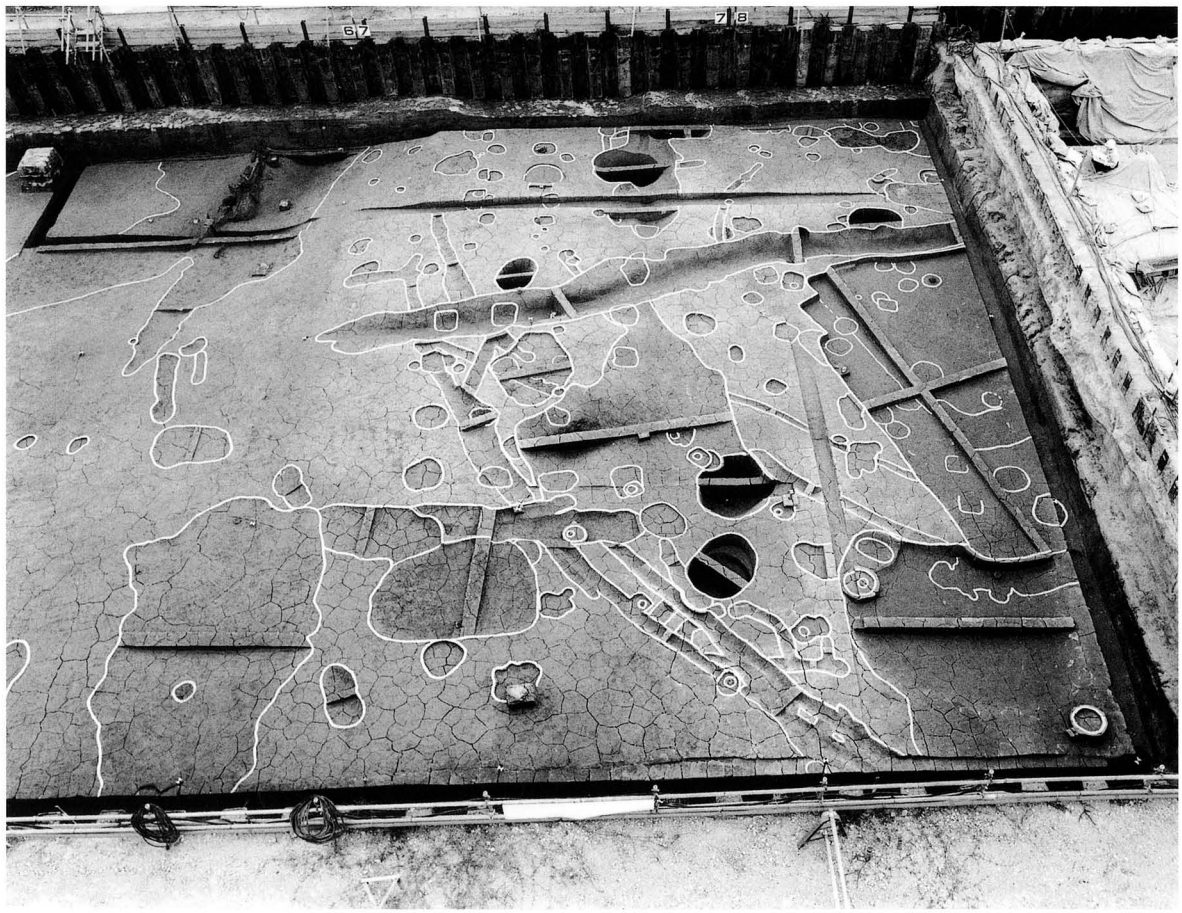


溝900　木製品（ツチノコ）出土状況

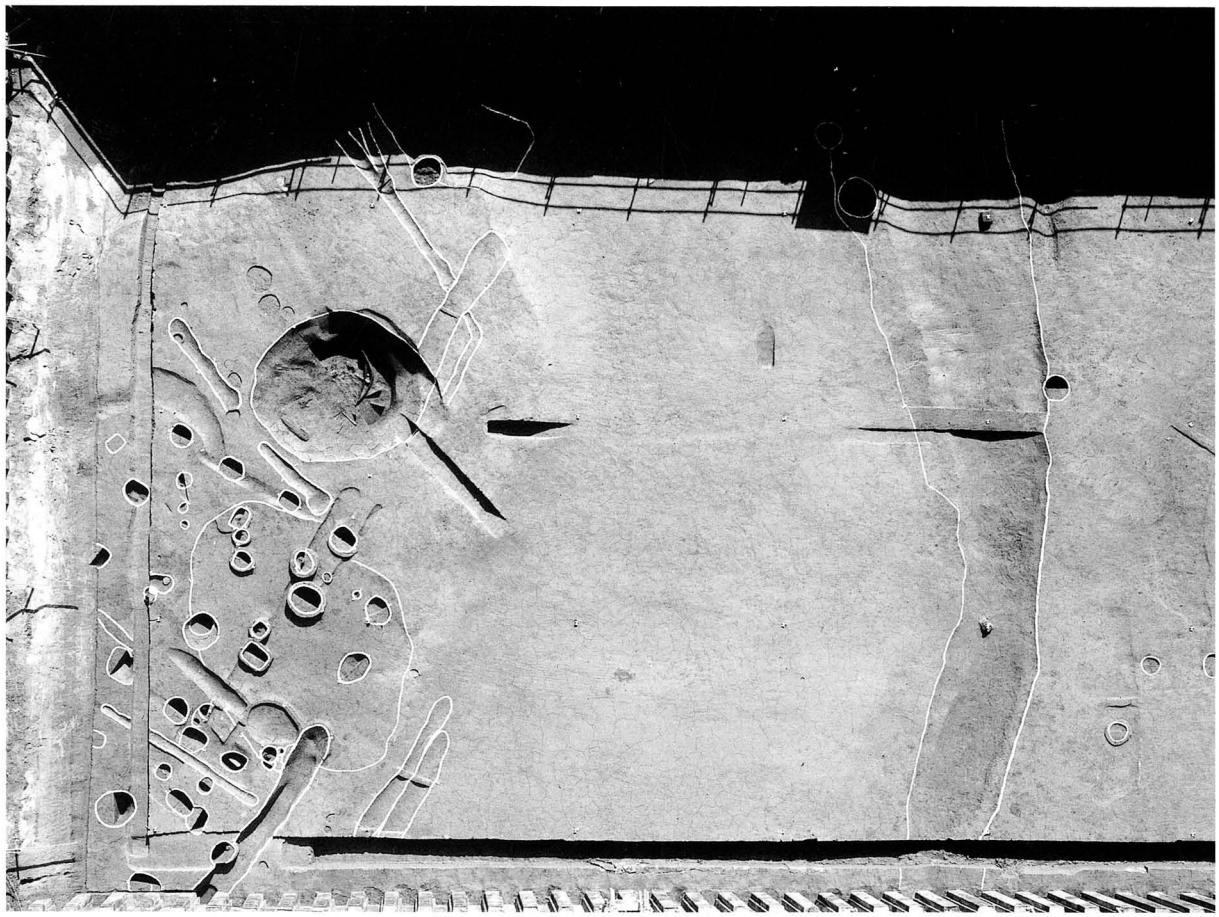
溝900　木製品（鎌柄）出土状況



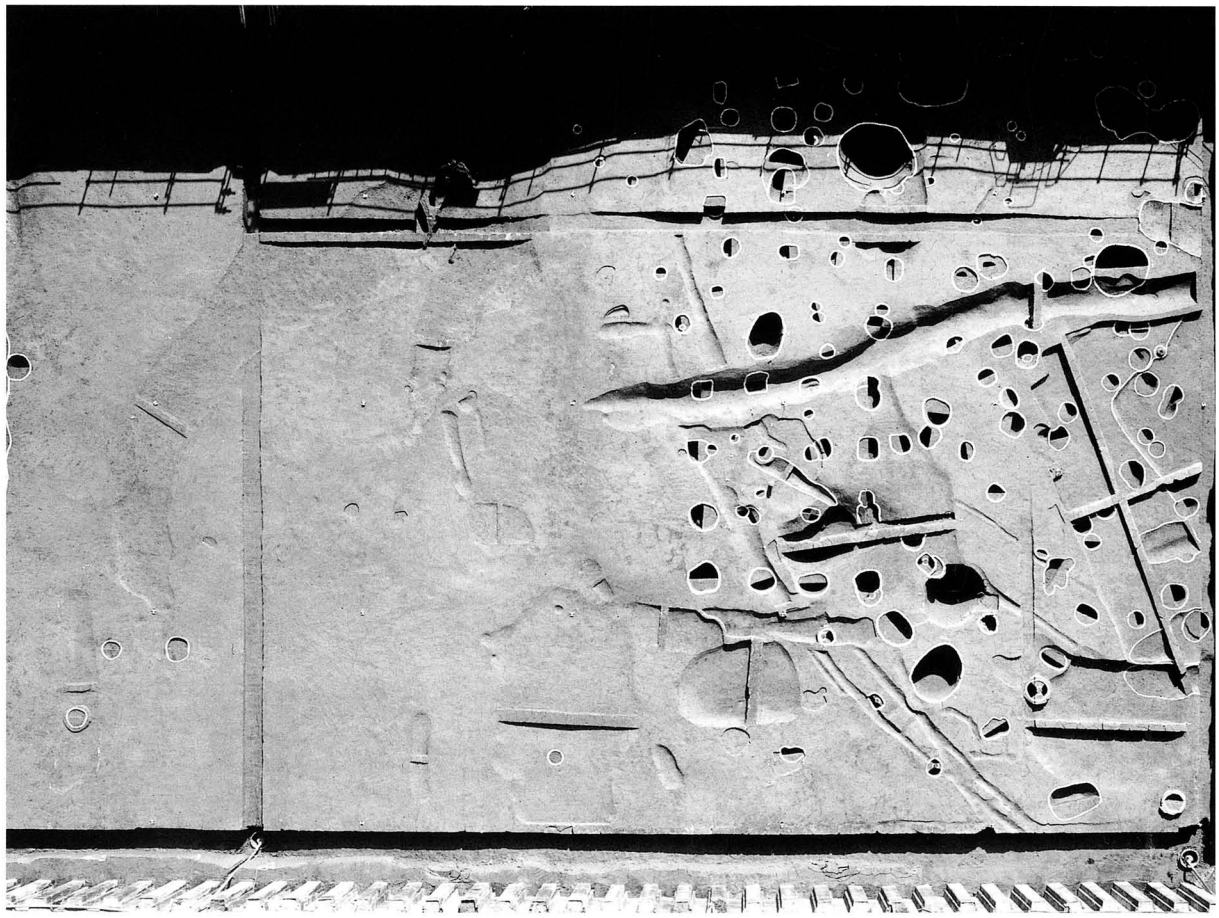
D-2区古墳時代後期遺構面東半部全景（北より）



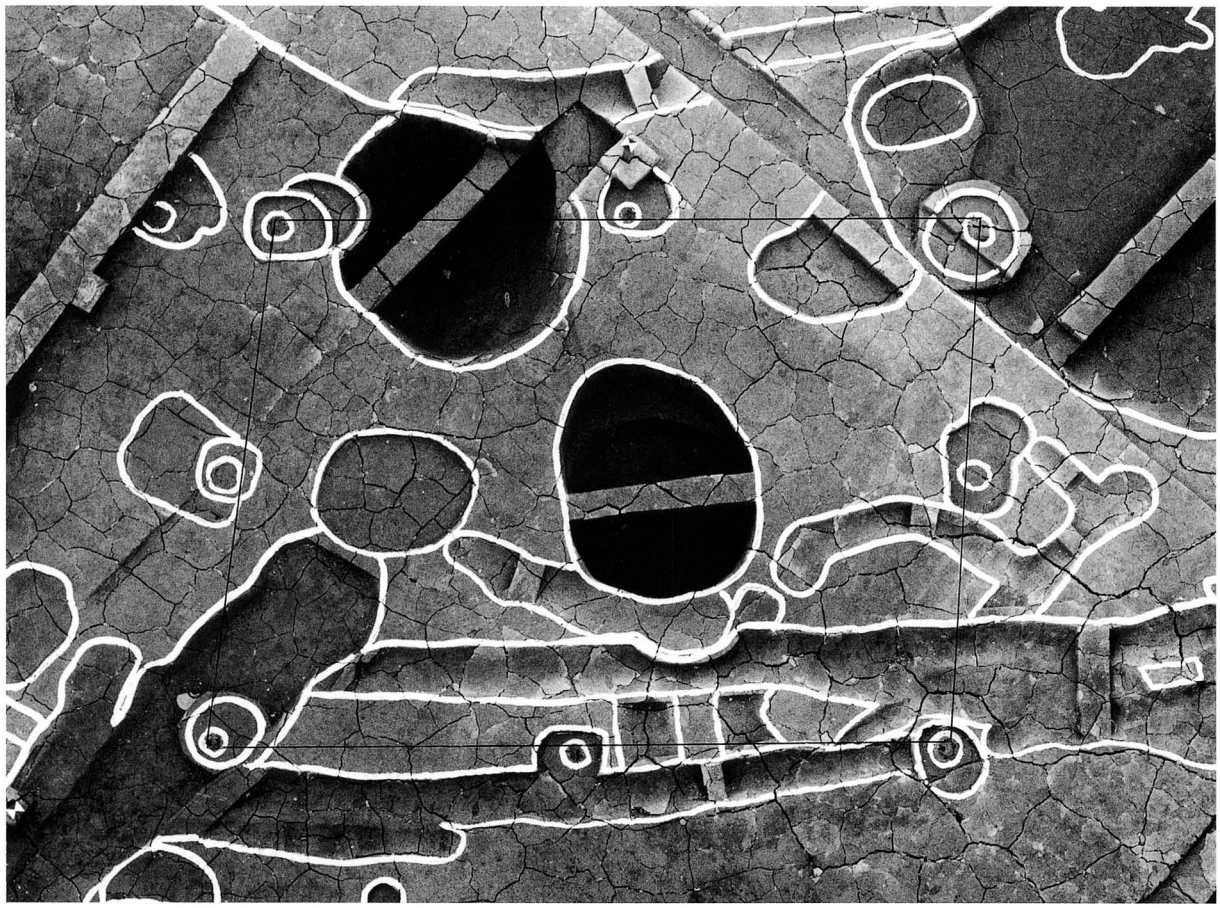
D-2区古墳時代後期遺構面西半部全景（北より）



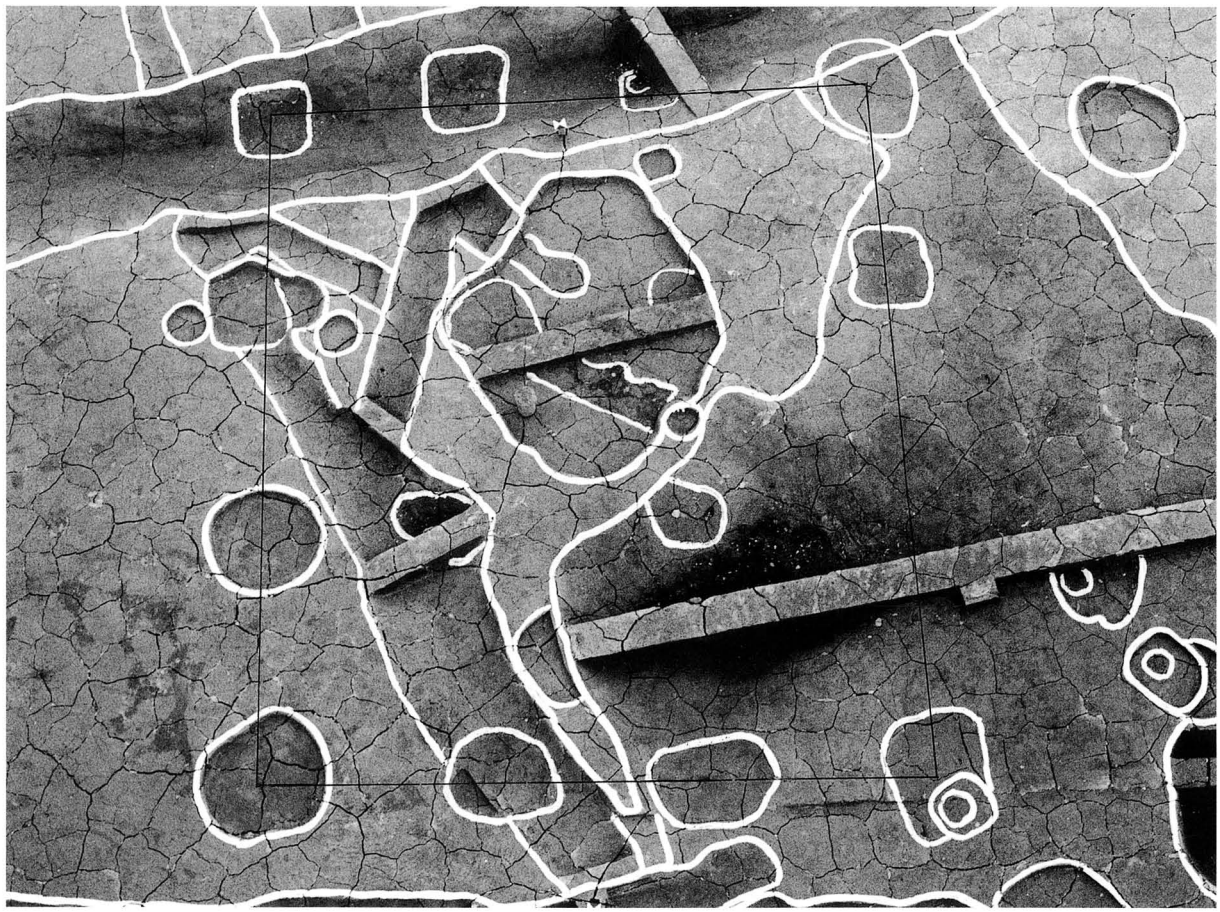
D-2区古墳時代中・後期遺構面東半部全景



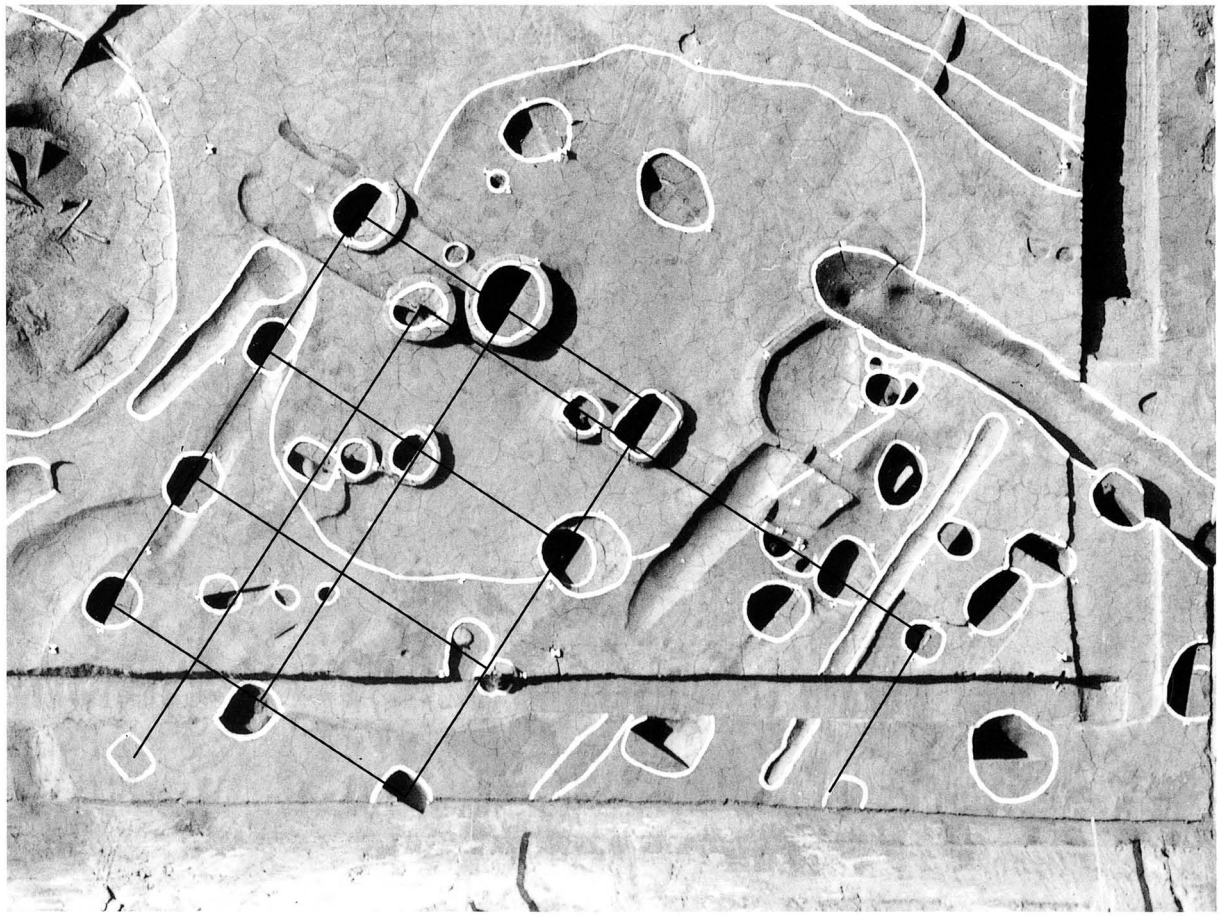
D-2区古墳時代中・後期遺構面西半部全景



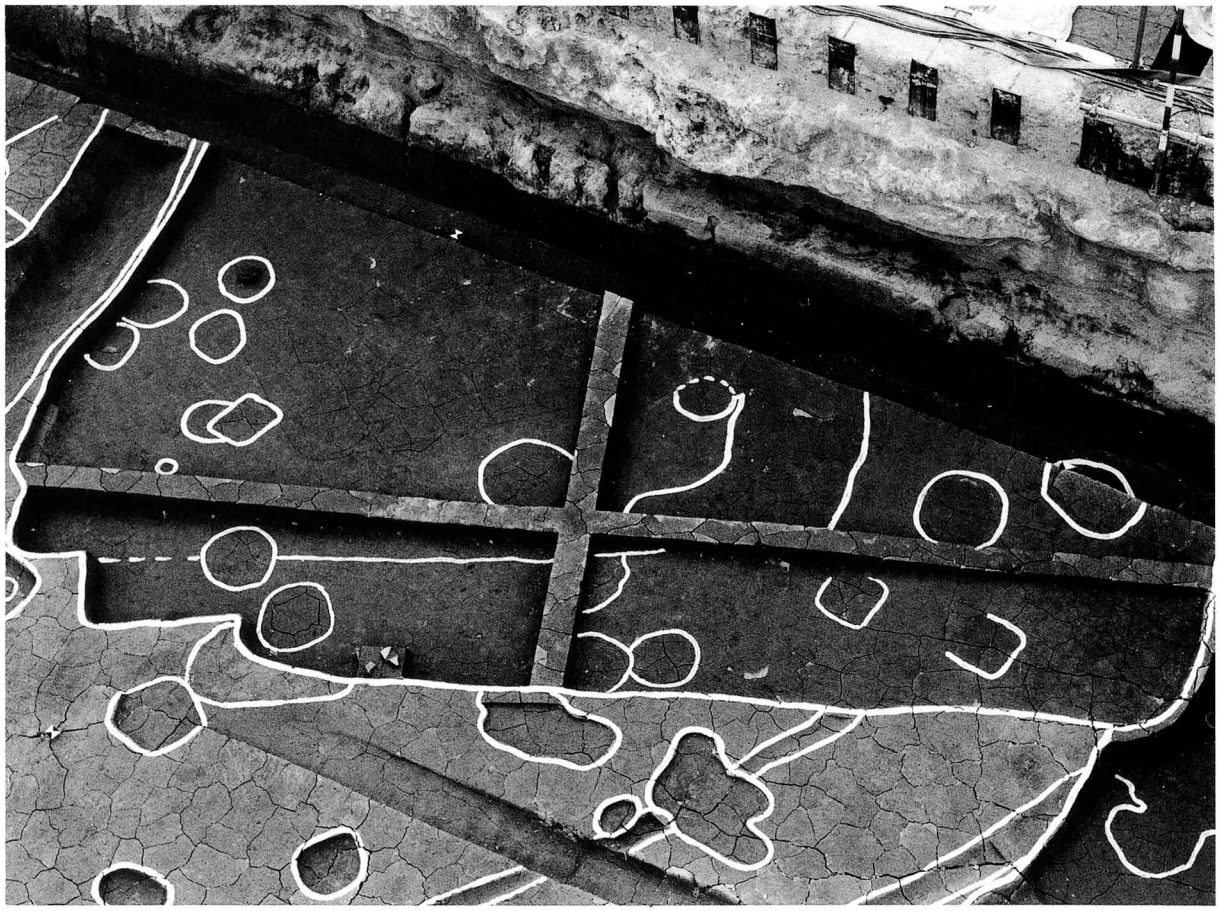
掘立柱建物跡９



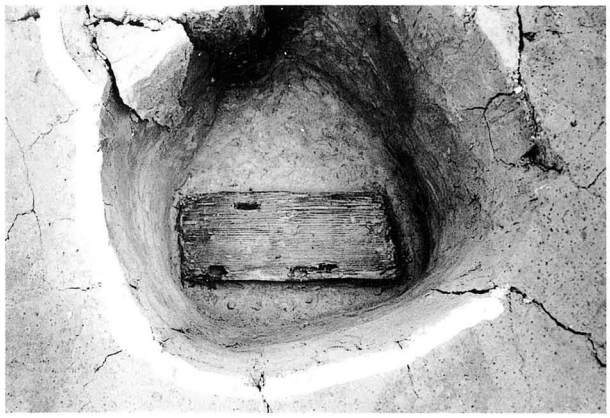
掘立柱建物跡10



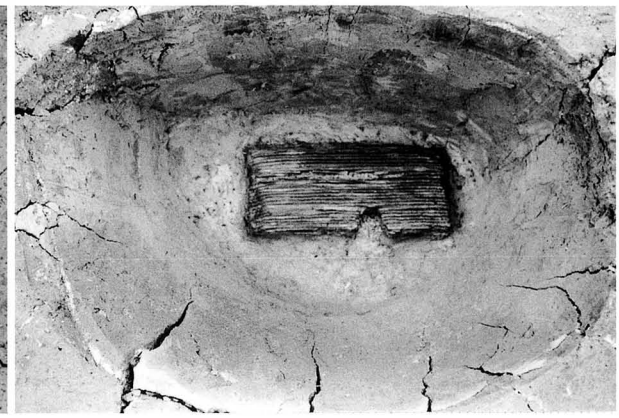
掘立柱建物跡12・13



竪穴住居跡26・27

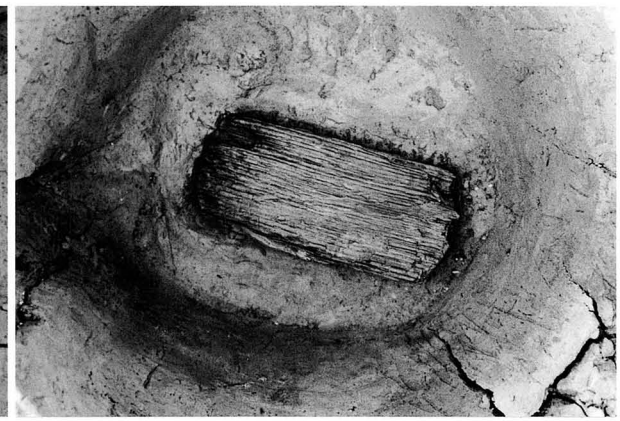


Pit662

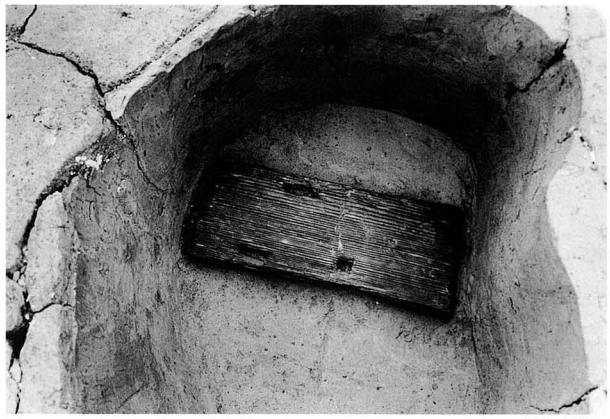


Pit639

Pit628



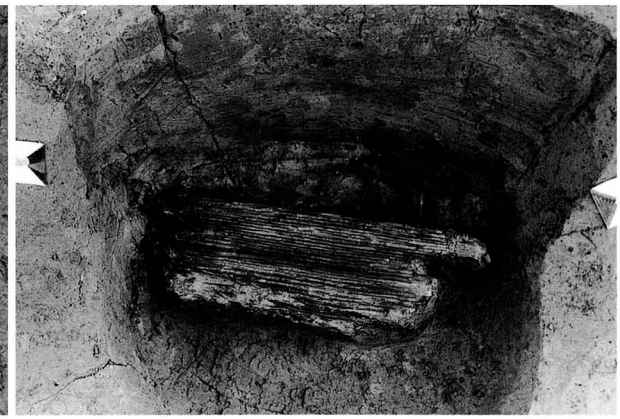
Pit634



Pit667

Pit636

Pit665

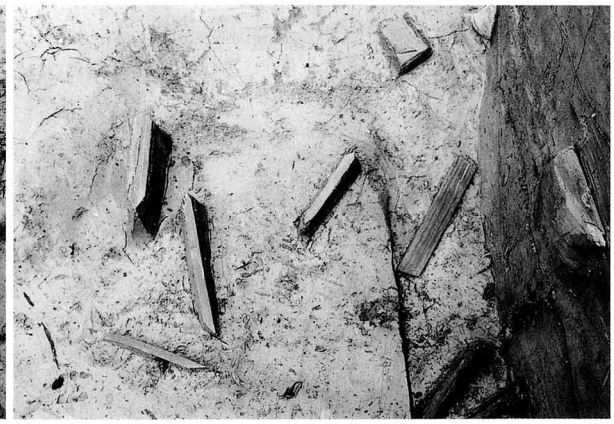


Pit660

掘立柱建物跡10　礎板出土状況

井戸474　５層遺物出土状況

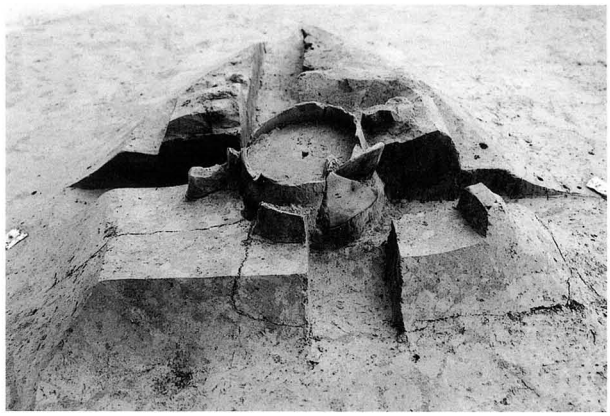
井戸474　４層木製品出土状況



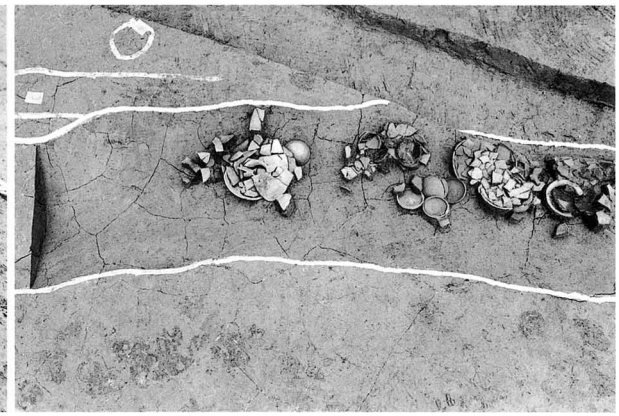
井戸474　５層木製品（斎串等）出土状況

井戸474　５層木製品（梯子等）出土状況

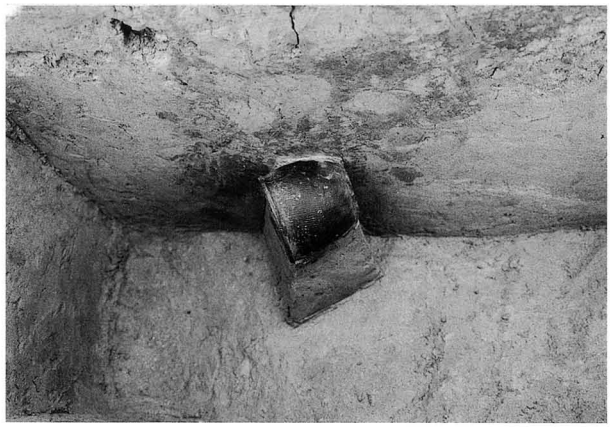
井戸474　６層遺物出土状況



D-1区　カマド935

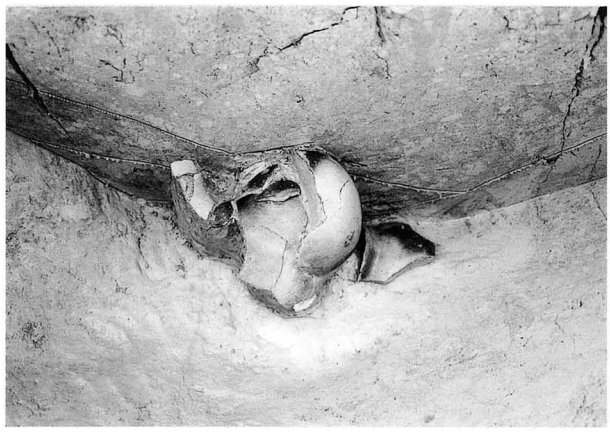


D-1区　溝986



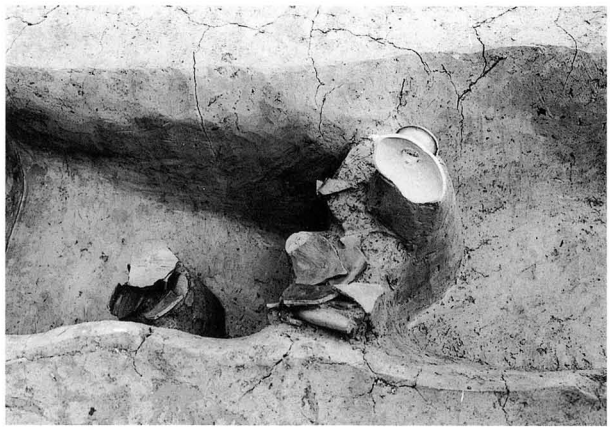
D-1区　Pit1664韓式系土器出土状況

D-1区　土坑1617



D-2区　井戸643韓式系土器出土状況

D-2区　溝546遺物出土状況



D-2区　溝495遺物出土状況

D-2区　自然流路470子持勾玉出土状況

22-1

22-2

22-3

22-4

22-6

22-7

22-8

22-9

22-10

22-11

井戸474出土土器・1

22-15

22-13

22-14

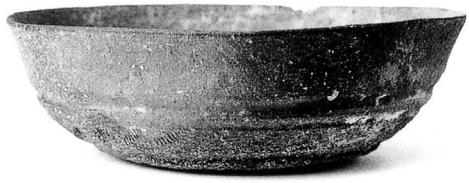
22-16

22-17

22-18

22-19

22-21



22-22

22-23

井戸474出土土器・2

22-24

22-25

22-26

22-28

22-29

22-31

23-1

23-2

井戸474出土土器・3

23-3

23-4

23-5

23-6

23-7

23-8

井戸474出土土器・4

23-12

23-16

23-13

23-18

24-1

24-2

井戸474出土土器・5

28-1～3, 5～23, 25

27-1

27-5

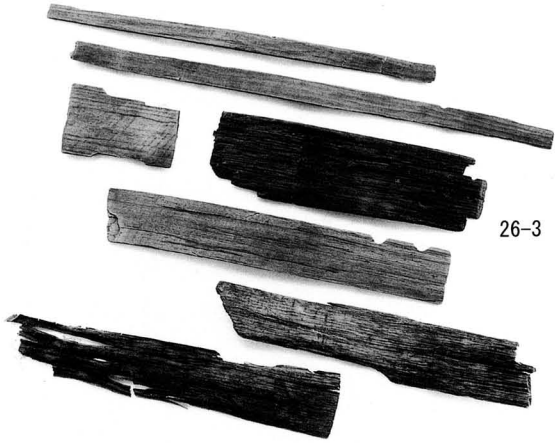
25-1

27-6

井戸474出土木製品・1

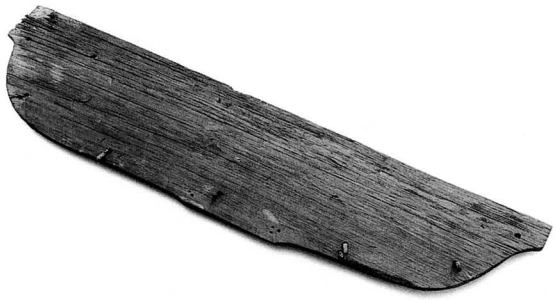
26-2

25-11



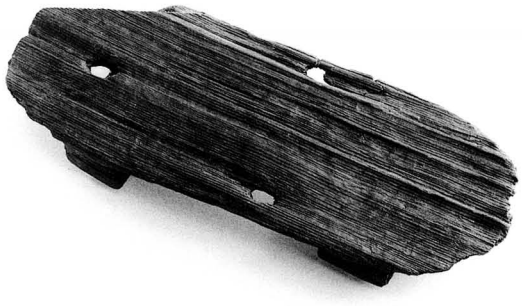
26-3

25-12～17

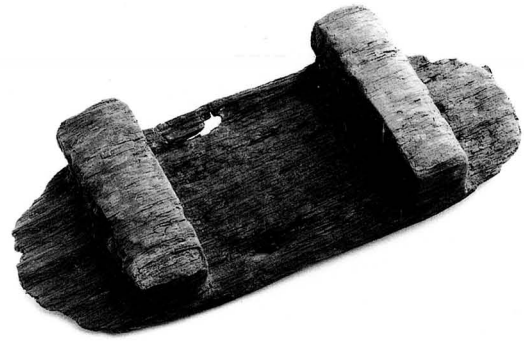


26-5

26-4

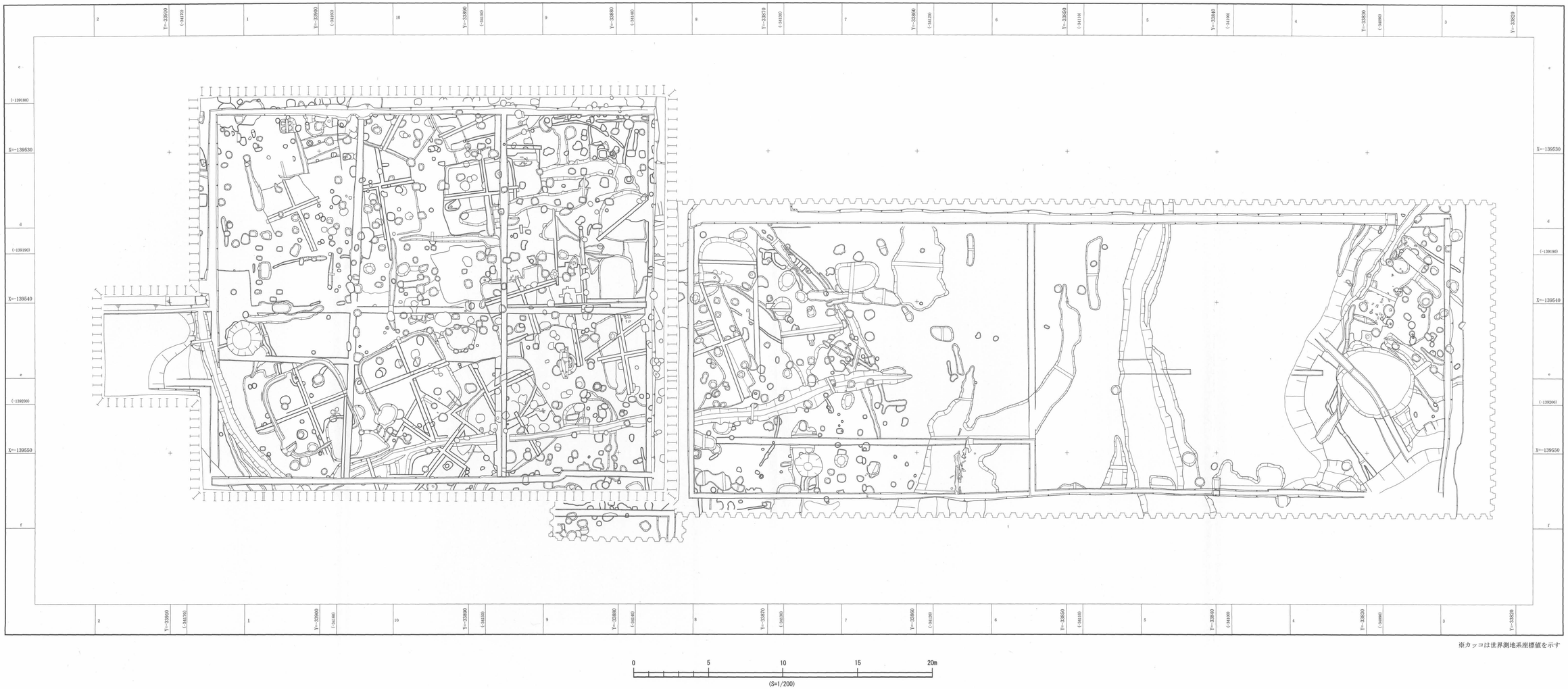


26-1



同左

井戸474出土木製品・2



※カッコは世界測地系座標値を示す

0 5 10 15 20m
(S=1/200)

付図　蔀屋北遺跡Ｄ調査区古墳時代中・後期遺構面平面図